324-24

禪學心性實驗錄

明治
40 2 25
内交

原坦山翁肖像

前賢未發之智
見古今獨步之
學究

源氏長谷家

顯於心性實驗證之

卷首

從一位侯爵源通之

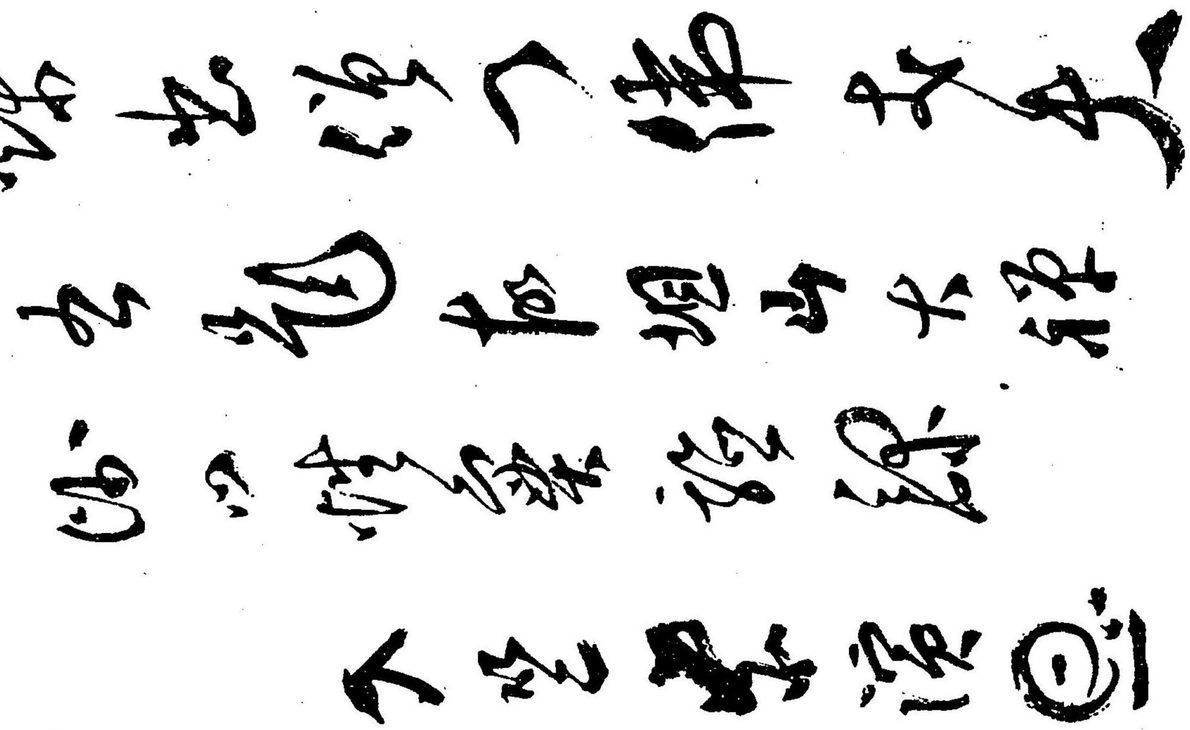
東京帝國大學圖書之印

東京帝國大學圖書之印

八幡學田之藏書印

日東帝國學丸亟

京都帝國大學圖書



禪學心性實驗錄序

舊臘文債山の如く、容易に償ひ難きを以て終日几に凭り筆を呵して專心努力し、復た他を顧みるに遑あらず。會客あり、戸を排して入來る。緇衣紫帽、是れ決して世間尋常の人にあらず。因つて引いて之を書齋に見るに、恰初對面の沙門なり。名を荒木磯天といふ。故原坦山師の門弟なり。已に寒暄を叙し了つて徐に余に謂つて曰く、頃ろ師の遺稿を輯め、是れを「禪學心性實驗錄」と題し、將に印刷に付せんとす。請ふ爲めに之が序を作れと。而して更に又其書の內容を說き、些の遺漏なからんむとを期し、頗る委曲周到を極む。余本と坦山師と少からざる因緣あるを以て必ず百忙を排して之が序を作らんとを約して別る。乃ち獨り書齋に於て師を想見するに、其洒脫の狀、奇逸の態、髣髴として眼前に現れ來るの感なしとせず。因つて之を考ふるに、余が嘗て大學に學生たるや、師の諄々として大乘起信論を講ずるを聽

く、是れ實に今より二十七八年前の事にして、眞に恍として隔世の如し。然り而して余が今日佛教に對して多少の趣味を有するもの、實に師の賜なりといふべし。師の遺稿の發行せらるゝに當つて、豈に一言なかるべけんや。今にして師の行動云爲を回思するに、間、軌道を逸して、殆んど端倪すべからざるものあり。是れ必ずしも特に奇を衒ひ異を誇るが爲めに然かするにあらず。蓋し世界人生の事に就いて蚤に大悟徹底する所あつて、天上天下、復た其心胸を累はすものあるとなし。是を以て區々たる世間の繩墨に拘はるを能はざるが爲めなり。然れども其一たび佛教の教理を講ずるに當つては、微を窮め幽を闡き、娓々として繭絲を繰るが如く、聽者をして憬然曉然たらしむ。師の遺稿の後生を裨益するもの多かるべきは、余の深く信じて疑はざる所なり。印刷成るに及んで偶、感ずる所を述べて以て之が序となす。

明治四十年一月九日

文學博士　井上哲次郎　識

自序

予曩に『仙術』の著あり以て初學の爲めに禪の實踐法を示す、今復た吾老師故原坦山翁の遺訓に據つて本著を草す、憶ふに翁の禪に於ける其所見太甚だ古今の理觀と異り、悉く佛法實驗の說にあらざるは無く、皆な的確眞證の論にあらざるは莫し、然れども大聲は俚耳に入らず微言は俗見に逆ふ、翁當年の聲望を以てすら猶ほ緇門の固陋を覺醒するに由なきを歎す、矧んや門外白衣の能く首肯する所ならんや、遑に莫、時運の進捗は永く空理謊誕の談議を許さず、精究實證の確說にあらざるよりは以て智人の要求を充たすに足らざるなり。

今や漸く斯學勃興の機運に遭ふ、理を計し義を批する者は則ち之れ有り、佛に見えず神に接したりと叫ぶ者は則ち之れ有り、茶禪、俳禪、洒落禪等弄禪の徒は則ち之れあらん、而も未だ直指見性の眞秘を活捉して吾人身心の上に迷悟の分際を確實に開示する者あるを聞かず、此辰に方り斯道の爲めに翁が獨得の實驗論を世に紹介するも作家時宜に處するの活機量ならんか、僉よ、魯と呼び魚と號ぶも敢て問ふ所に

非ず、但だ之れが論釋の責は著者の負ふ所、若し夫れ砂中に眞金を撈ひ、蒼溟に驪珠を遺すが如きは全く讀者の得失なり。

古哲いはずや、得魚忘筌と顧ひに羅網を透脫して鯉龍を搜得せよ、殺活手に在り把放君が與奪に任かす、あはれ世の參學の高流久しく摸象に習へり忽ち眞龍を怪むこと勿れ、坦山翁自ら曰く、我れ唯だ車を行らんと欲す推挽の異なるを怪むこと莫れと、知るべし古今獨步の活機軸なることを、切に須く直指端的の道に精進し、絕學無爲の人を尊貴せよ、庶幾くは佛佛祖祖の眞髓に冥合し、老翁獨得の三昧に嫡嗣することを得ん歟、翁の事歷碑文あり序に代へて卷首に載す、今復た敢て蕪辭を要せざるなり。

明治三十九年晩秋於野陽蟠龍山禪窟

東海　荒木磯天識

覺仙坦山老師之碑

自泰西實驗之學一入我國凡百之事概取則於此獨釋氏之徒依然唯尙理觀無一及之者而有之始于吾鶴巢老師矣師年甫十五入昌平校兼修醫術弱冠遇榮禪和尙始知佛法爲大丈夫之學剃染爲僧徧參諸方既而得證於風外老人嗣法於京璨禪師機鋒險峻名聲振叢林一日遊京師邂逅小森某某修西學者說其實驗甚詳師傾聽者久之忽曰我佛法他日恐爲此學所排斥曾入八事山中承仙訣於正光眞人謂此可以資也自是專心研思大有所發明乃著書以辨迷悟修證之要旨其說甚異古今理談因創佛仙社聚徒授之自言知我罪我者其唯在此安政乙卯瑞世永平寺明年建法幢於洛北心性寺無幾退休再托迹水雲十餘年明治五年官置教導職師累遷至少教正十二年帝國大學始置印度哲學科擢師爲講師大學講釋典實始于此十八年選爲學士會院會員緇流入此院亦爲嚆矢廿五年曹洞宗管長缺其人內務大臣特命攝理宗務七月師困臥累日似有疾者衆醫診候皆言不見病徵廿七日俄呼筆硯身自裁束報故舊門生曰老衲即刻臨終歟報侍者請遺囑師笑曰死後之事復何爲泰然撫白髭而寂矣火浴分葬市谷長昌寺及相摸

最乘寺、下總、長德院、師諱良作、字坦山、號覺仙、又鶴巢、磐城平藩士新井君勇輔長男、以文政二年十月十八日生、享年七十四、老師爲人軀幹肥胖、容貌秀偉、言行如落落、而又似甚翼翼者、時或呵佛罵仙、醉倒諸謔、頗如狂、或思親誨徒、丁寧懇欵、至歔欷流涕、其擧止殆不可端倪、曩任曹洞宗大學林總監、又執經眞宗敎校、薰陶所及、皆使人志氣勃興、所著無明論、心識論、惑病同體論、腦脊異性論、心性實驗錄、老婆新說等、悉無非佛法實驗之說、頃日弟子等謀建碑、囑余撰文、乃錄其梗概、以告來者、今夫西學日益進矣、噫能繼老師而完斯道者其誰也。

明治二十七年八月　　門下生　大內靑巒敬撰并書

勅賜日本曹洞第一道場吉祥山永平寺貫首大休悟由篆額

「訓詁之責在著者」

時得集偈頌　　故　坦山

嘗入宣尼學、　蓋雖究經史、　早悟非至法、　圓顱爲釋子、　盡力南頓禪、
偶得安心旨、　憶昔小少時、　慷慨期傑士、　自慨我何人、　永朽山野裡、
秉志忘寢餐、　却慚屈姚姒、　不如了一心、　萬法歸胸襟、　天地從改變、
世情任浮沈、　生死夜與晝、　今古晴又陰、　清霄孤杖月、　和日閑窓禽、
幽意可自掬、　免遭他搜尋、
古賢先聖異中同、　千句萬章空裡風、　筆硯有時隨意得、　任他爲白又爲紅、

衆生、幻心遥依幻滅。諸幻盡滅覺心不動。
依幻說覺亦名爲幻。若說有覺猶未離幻。

我身本より幻なれば、その心も亦た幻なり、その心すでに幻なれば、その煩惱も亦た幻なり。
煩惱本より幻なれば、その惡業もまた幻なり、その業すでに幻なれば、三途の苦果もまた幻なり。
三界の生死幻なれば、四生の因果も亦た幻なり、一大法界の中、幻にあらざるものある事なし。

生也幻幻、死也幻幻、六凡四聖、幻幻幻幻。
來也呵呵、去也呵呵、三心一如、呵呵呵呵。
迷也咄咄、悟也咄咄、染淨明暗、咄咄咄咄。

凡例

一、本書は、前帝國大學哲學科講師、故原坦山覺仙鶴巢翁の事歴を叙すと共に、師が著はす所の心性實驗錄即ち無明論、心識論、腦脊異性論、惑病同體論、老婆新說の四論一說を講述したるものにして、而して其原本は師の生前即ち明治六年の木版にして是れ亦師が門生の外、未だ世の書肆に於て多く市られざるものに係る。

一、本書は前記の原本を基礎として老師生前の親誨に鑑み、其論說の由來及實地工夫と、其口決に於ける多方面の學解とを講述したるものにて、著者は師が門生の一員として聊か其親誨に接し、爾來多少の工夫と實詣とを經たる者、さあれ其論釋に於て或は錯謬多からんは素より豫め讀者の賢察を請ふ所なり。

一、老師は前掲の四論の外、自己の著述として世に公刊したる者なし、而して其四論一說も亦皆始終一轍にして心性實驗の談に外ならず、師の一代は實に此一事の吹唱に在り、而して其自著は文言甚だ簡勁直截にして、生前の親誨、口敎に接せざる者にありては容易に其本旨に達し得ざる點多し、是れ著者の聊か菲才を費したる所以なり。

一、本書の眞髓、即ち具體的心性實驗義の全豹は、其心識論に在る、無明論は其目標と

…して特に其對象を指示せるに過ぎず、腦脊異性以下の諸論、亦皆之れが證明的立言なり、故に讀者の實究を期する者は、先づ本書全編を讀過したる後、更に腦脊異性及惑病同體の二論を精究し而して後、再ひ第三章の心識論に參究す可し、茲に始めて本書の全豹を了得し其眞髓に到達す可し、老婆新說以下は开が實踐の工夫を慈誨せる者及著者の蛇足を畫ける者、之れに依つて自身に之を試むるは宜しく各人の自得に在り、他の詩偈の如きは僅かに老師の妙境界の影象を窺覗するに資せんのみ。

一、老師歿して茲に十有五年、而して師が一生の心血は歲と共に古り、世の皮相淺學の空論は依然として妄誕に馳せつゝあり、明治四十一年は實に師の慈明忌に該當すと雖も、湯茶菓珍菜の供儀は、以て靈の嘉納に價ひせずと思へば、門生たる著者の感慨は、眞に今昔の情に堪へず、敢て讀者の高諒を冀ふ所なり。

一、師の遺訓を論講して之を公刊するは本書を以て嚆矢と爲す、後世益々之れが完全の釋義を見んことは著者の企望なり、卷の首尾に於ける顯紳畏友の文詞は本書公刊の眞志を證明せらるゝ者、肯て著者が名利を釣る手段にあらず、さあれ一切の其れは全く著者の責任なり。

禪學心性實驗錄

目次

第一章　緒論……一
一　坦山翁の人格……一
二　心性實驗の由來……五
三　實驗後の學談……九
第二章　無明論……一四
一　無明の體及起因……一四
二　無明の相及住地……一六
三　斷惑の工夫……一九
第三章　心識論……二二
一　心識論の立脚地……二二
二　心識の本體……二八

目次

三　覺心……三九頁
四　不覺心……四五
五　和合心……五〇
六　一心の染淨……五八
第四章　腦脊異性論……六四
一　解剖生理……六四
二　腦氣筋……六七
三　脊髓筋……七一
四　交感神經……七八
五　腦脊異性の實驗……八〇
第五章　惑病同體論……九一
一　惑體……九一
二　病原……九六
三　惑病不二……一〇〇

目次

第六章　老婆新說……一〇七
一　禪定力……一〇七
二　觀察智……一〇九
三　拖泥帶水……一一二
第七章　結論……一一四
一　禪定の要訣……一一四
二　自然の結果……一一八
三　迷悟の分際……一二〇

禪學心性實驗錄

故 原坦山著
門生 荒木礒天講述

第一章 緒論

坦山翁の人格

一言にして翁の資性を蔽ふ、豪邁不羈卓犖是れなり、翁が言行は頗る落落たるが如く又甚だ翼翼たるものに似たり、其の人と議し他と論ずるや機鋒險峻、侃々諤々毫も假借せず、其の親を思ひ徒を誨ふるや丁寧懇欵、歔歔として流涕するに至る、時に或は醉倒諧謔頗る狂の如く又端嚴靜肅寇に神の如し、其擧止固より端倪す可からず、吾人門生今敢て之を議するは禮に於て缺くる所あり、但だ他の爲めに聊か翁の人と爲りを紹介するの已むを得ざるものあり且く逸事を叙す。

翁の名は良作、藩士より出でて昌平校に學び夙に經史を究めて既に群を拔き、更に時の名家多岐安叔、港長奄、佐藤舜海等に就きて醫術を兼ね修む、良作の名江戸に高し、時に城北の禪窟駒込の吉祥寺は天下の敎林たり、而して其の越後寮の學頭に、京璨和尙と云ふあり、固より佛法の緫奥を究め、兼ねて漢學に精通す、儒者良作頻りに佛法を罵倒すと聞き、引見して道論を試む、辯難數次の後ち約するに負者は勝者の弟子たらんことを以てす、既にして極力論抗良作遂に敗る、斷じて曰く『男子一誓以死踏之』と剃染して僧と爲り名を坦山と改む、坦山得度の後ち四方に漫遊して天下の高僧知識に見え、大阪に往て風外老人に參す、奕堂藏雲等の善知識皆な同參なりき、精究多年終に心性を徹見し益々道力を調養す、後ち叡山に登りて律部を學ぶ、到る處時流の爲めに容れられず、嶽を降りて東山に入り蝸廬を結びて之に居る、蝸廬は自ら造り、自ら名けたるもの、方六尺の車上纔かに雨露を凌ぐの蓋を設け、車内を四區に分ちて廣さ各三尺、其一區は居室、一區は書房、一區は庖厨、一區は雜具を藏し、前面に日月の窓を穿つ、眞に別天地の觀あり、實に壺中の乾坤と謂ふべし、之を東山日暖かき邊りに曳き適處に停まりて書を讀み經を寫す、糧盡くれば市に出でゝ托鉢

し一日の米を得れば退きて廬中に隱る、如斯もの數年而して造詣日に益々深し、既にして洛北の心性寺に住す、該寺は二條家の祈願所なり、仍て二條公と相親昵す、公は時の關白なりき、一日時事を論じて公を罵倒す公甚だ憤怒、當時の法、關白を罵る者は大辟に當る翁平然として相關せざるものゝ如し、二條家の太輔翁の人と爲りを知り甚だ之を惜み、翁を以て癲狂者と爲し清水の癲狂院に送り關東の法類を召喚して之を附す、翁護送せられて大津に到り此處に始めて自由の身と爲る、忽ち筆硯を呵し『雲を詠す』と題する詩歌各一首を書し、之を二條關白に贈る、曰く

蓋覆乾坤笑女媧、或昇山嶽或泥沙、隨風隨處無常態、時起廿霖利國家

あなつそら心にまかす浮雲の

、風のいづこに吹きさそふ良舞

關白果して首肯せしや否や、爾後翁は自ら狂翁と號し、狂を以て自ら任し身を終るまで之を改めず、以て其境界を知る可く其人格を窺ふ可し、或人翁の雷名を聞き之を利用して財を得んとし祠堂建築の勸進序文を需む、彼れ私かに期す、翁の文以て衆目を惑き、翁の說以て群心の仰讃を買ふに足らんと、乃ち之を翁に强ふ、翁即座に

筆を執て『某寺本堂建立、資金貰度旨申出候條守錢奴者淨財寄進可、然、往生極樂不可、有、疑者也　坦山』と書して與へたり、斯の如き磊落不羈畸行奇言擧げて算ふ可からず、翁明治維新の變に會し、貧困身を支ふるに由なく江戸淺草の街頭に立ち賣卜を以て纔かに口を糊す、或者其命數の如何を問ふ、翁恭しく筮して曰く云云と、其人重ねて問ふ、果して然りや否や、翁大喝一番して曰く、此馬鹿野郎、當るも八卦なり、當らぬも八卦なり、筮者の關知する所にあらずと、其跌宕なる大率是の如し。

既にして時運は此の奇人に待つの機に達しぬ、世は戰亂の後を受けて維新の大業未だ完たからず、廢佛毀釋の俗論は碌々たる幾萬の愚僧を猥狽せしめ、教界混沌其の歸着する處を知らざるの秋に方り、翁は本願寺學寮の講師に聘せられ、又帝國大學に哲學科を置かるゝに際し入つて同科の講師と爲り、尋て學士院の一員に列せられ、自家特得の學理、心性實驗の新說を講演す、翁常に曰く、古昔宗教の書を編する皆多くは小說的なり、基督教の福音書に於けるも佛教の佛傳に於けるも同一轍なり、佛書萬卷を積み之を播くも、取る可きの眞理は寔に萬斛の砂中に眞金を撈するが如しと、凡流の翁を喜ばざる亦た已むを得ざるなり、當時知名の士にして翁に隨つて道を問ひし者少からず、中に就て前島密、中島信行、島尾小彌太等を始め其の他大內青巒等の道俗數十人の多きに及べり、又師が帝國大學に講師たる當時、大學々生として師の講說を聽き爾來佛典研究の端緒を得たる者甚だ多し、中に就て現今世に名聲嘖々たる者は井上哲次郎、澤柳政太郎、有賀長雄、三宅雄次郎、井上圓了、嘉納治五郎、棚橋一郎、岡田良平、內田周平等の碩學博士少なからず、加藤弘之、三宅秀等の諸先生亦た師の爲人を熟知し交情淺からざりしは皆人々の知る所なり、人格既に斯の如し、故に翁が一代の事歷は皆な超凡越格の玄機にして寸鐵人を殺すの怪氣焰あり、片言人を活する快機用あり、到底凡俗の得て端倪す可きにあらず、而して其學に於けるや深奧透徹、內外精究、眞理にあらざれば濫りに之を談せざるなり、此翁にして此實驗を說く、吾人は必ず其虛義に非らざるを信ず、偶あり翁の人と爲りを窺ふに足る、以て讀者の一粲に供す

曾聞聰叡多貧賤、自笑魯癡且乏錢、頗有自家三昧在、淸風月下打閑眠

二、心性實驗の由來

教と學とは固より別旨に非ざれども、機用に至りては其趣きを異にす、學は則ち法を究明し教は則ち法に從順す、されば佛教は則ち開示悟入の教導にして佛學は則ち轉迷開悟の工夫なり、故に學の方面は實究眞證なるを要し、教の方面は應病與藥なるを要す、換言せば學道は本にして教導は末なり、思へ悉達の胸裡に蟠りたる一大疑團は菩提樹下の研學思惟に由りて豁然として大悟せり、其證悟の妙理は實に振古未曾有の大法なり、故に若し卒爾に之を說かば却て凡愚の誹謗を惹起せん、是に於て乎專ら根本義の說明法を攻究し、四聖諦、十二因緣、六度、七覺支、八正道等、漸を追ひ機を察して群品の爲めに應病與藥の教誨を施したり、而して佛入滅の後ち弟子等相謀りて佛成道以來四十九年、五十餘會の教誨を結集したるものは即ち釋氏一代の藏經なり、此藏經の上に就きて時を經、年を閱みするに、從ひ、或は異諍を生じて數派に分岐し、時運の推移に依り、或は研究の度を進めて頓漸半滿を劃し、論師大士の輩出する毎に各々異彩を發揮し、論藏益繁くして教義稍々空理に傾き、後世の徒に到りて遂に謊誕無稽に流れ、聖を去ること彌遠くして漸く無實虛妄の誇を得るに至る、是れ教學經過の梗概にわらずや、されば菩提樹下の蹤跡は專ら學佛者の工夫す可き所にして其後の立教に係る應病與藥の法門は專ら導師の考察す可き所なりとす。

然るに中古以來佛徒の教學に於ける如上の區堺を泯し、教と學とは自ら其趣きを異にすることを覺らず、往往一粟を滄溟に索め、亡羊を岐途に逐ふが如きものあり、爰に泰西實驗の學日に進み月に熾んなるに逮び、吾佛法を以て謊誕無實の妄法と爲し、彼の希臘亞利斯の理談と同視するに至る所以のもの抑も故無きに非ず、亞利斯は西曆紀元前殆んど三百年の古哲にして彼れの理談は土水火氣の四元を根基として人身窮理の大本を說き、加ふるに奇異の神話を附會して未だ實驗の物理を語らず、而して大乘佛教の始唱者たる中天の馬鳴及其亞流たる南天の龍樹も亦彼の亞利斯の如く地水火風の四大と說き、或點に於て殆んど相似するものあるを以て、馬鳴龍樹の學流より發達せる經論の諸說は皆な其範圍を出でざるものと爲し、今日に於ける彼れが理學實驗の長を以て吾が本據を失するの短を攻む亦殆んど危い哉。

惟ふに大小乘佛教の諸經論等皆な其心識を說くこと極めて審細詳密に、且つ極め

て深蘊精覈にして理義殆んと一點の罅隙なく、至說至論不可思議不可商量の域に達し、復た敢て計較す可きの餘地を存せず、佛徒之を學んで橫談縱說復た間然する處なきが如しと雖も、其多くは唯た是れ空談空理にして、見紙上の戲論に過ぎず、是を以て一たび其本據を吾人身心の上に要めば、恰も之れ尼娘に就て畢丸を論ずると等しく、遂に之を明確に摘示するに由なからんか、今や精究實驗の諸學駸々として進み、天秘漸く闢けて世界は宛がら瑠璃透明の活機關たらんとす、此時此際依然として中古以來の空想を墨守し、論駁追窮せらるゝに遠んで、我れは不可得の中に只麼に得たりと放言するを得んや。

坦山老師西學東漸の世に生れ、天稟の英資を以て螢雪風に經史の奧義を究め、早く其の至法に非ざるを悟り、剃染緇門に投じて諸經論を涉獵し、又南頓の禪を學びて其玄旨に到達し、爾來孤杖の月に諸山を歷遊して天下の知識に飽參し、造詣益深くして道力彌重きを加ふるの時偶〻秦西の學に通じたる小森宗二なる人の爲めに忽ち論破せらる、翁尙未だ到らざるものあるか、豈夫れ然らんや、彼れが實驗窮理の長を以て吾が本據を失するの短を攻む、釋迦達磨の出現を請ふも、設令ひ龍樹世親を

して再起せしむるも、其本據を確示し其實驗を證明するにあらざるよりは彼れが否の言下に破れざるを得ざるものあらんか、翁慨然として嘆に憶らく是れ獨り坦山の敗辱に非ず、恐らくは佛家休戚の係る處なりと、乃ち自ら萬死を顧みず、又他の誹謗を慎れず、從來の學說に批判を試み、經論を再審し、工夫を精覈すること多年、莊に實驗眞證の秘奧に到達し、漸く前代未發の驪珠を搜得して吾人身心の上に明かに迷悟の分際を確示するに至れり。

非無聰達人、流弊誤群類、蚊力欲撞山、自歎且自愧、

三、實驗後の學談

瞿曇一代の說法は菩提樹下の消息を應機接物に宣傳したるものにして、此樹下靜處の直指三昧之を禪と謂ふ、而も禪は唯だ口耳の學に非ず、吾人身心の上に之を驗す可し、其法は臆斷空理に非ず、天地事物の上に之を視る可し、謂ゆる宗旨は即ち後世の私立なり、故に佛法を以て宗旨を說く可し、宗旨を以て佛法を說く可からず、宗旨必ずしも佛法に非ずとは坦山老師の常套語なりき、而して自ら其經論を講ずる

や章句に拘泥せず、訓詁に繫縛せられず、直ちに其眞髓を捉へ來りて、其要義を開示するに顯密克く其の正鵠を得、自己の實驗に照らして論釋些の罅隙なし、謂ゆる魚を得て筌を忘れ月を觀て指を執せざるものなり、其耳底に山色を見、其眼目に松風を聽くの機用は禪家の常談なりと雖も其實に至りては、水を穿ちて月を網し、索を執つて風を繫ぐが如きもの天下比々皆然らざるはなし、獨り老師に至ては大いに之に異り、縱令ひ佛祖の親訓なりと云ふとも其實驗に適合せず眞際に證契せざるものは、之を批判するを憚らず、されば玉石を同架し、金砂を混視するが如きは佛祖に忠なる所以の道に非ずとは老師の學談なりき。

師が著はす所の書、無明論、心識論、腦脊異性論、惑病同體論、老婆新說等悉く是れ實驗眞證の談に非ざるは無し、而して心性實驗錄は如上の諸論を構成する所の本據にして其他の經論を批判するの範鑄なり、人或は曰く師の佛學に於ける彼れが骨て修むる所の醫學より持ち來りて他の敎學を批判す、蓋し先入爲主の僻說なり佛法豈に焉に關せんやと、然り、謂ゆる先入爲主是れ常人の多く免れ難き處、されば吾人の身心是れ一に非ず又異に非ずとせば、身體窮理の術豈必ずしも心性覺悟の學と

關せずと云ふを得んや、矧んや醫明は即ち謂ゆる五明の隨一にして梵土醫聖の管掌する所、實に死生の大事一に此に係るに於てをや、由來佛徒の死生を談ずる唯だ漫に心性を云云して身體の事實を疎外するの弊習あるは則ち佛徒却て自ら先入爲主の過に坐し謊誕無稽の謗を得る因由の第一なり、佛徒たる者豈夫れ深く猛省せざるべけんや。

師の學談、一たび世に紹介せられて凡愚の之を喜ばざるは即ち素より其所なり、其無明論は弘化丁未の撰にして師が二十九歲の時なり、其心識論は安政庚申、師が四十二歲の撰、其老婆新說は文久癸亥の述に係り、師が四十五歲の時にあり、而して其再校心識論、腦脊異性論及惑病同體論の諸論は何れも明治二己巳、師が五十一歲の著にして初撰以來二十餘年の實驗に徵し、彌々其の獨斷的臆說にあらざることを確認し、爾來又二十餘年の研磨を積み、茲に始めて後世を照らすの一軌範と爲れり、師自ら言ふ、我れを知り、我れを罪するものは、其れ唯だ此に在るかと。

果然、明治四年當代の碩學、東京兩國回向院主福田行誡なる人あり、老師の學談を聞き則ち曰く、師の說云云精細なり、以て世に對し之を實に滿つ可く、信ず可きものと

するもの、果して必ず然る可きや否や、予に於て甚だ其疑を懷くと、是に於て忽ち筆硯を呵し、以て批判を試む、行誠は近世實に得易からざる高僧にして學德兼備知行合一、世の碌碌たる庸人に非ず、道聲遠近に聞え、教化宇内に普し、亦是れ古今獨歩の一偉匠なり、其語るや皆な典を該ぬる君子の所談也、其說くや綿密懇欵片言だも苟もせず、其論ずるや博引傍證糸毫の差を許さず、聽く者をして自ら畏敬せしむる感あり、其破するや誨ふるが如く諭ずが如く又諷するに似て謙讓の雅量、對手をして自ら敬服せしむるを常とす、此人にして磊落不羈豪邁卓犖超凡越格の坦山を批す、恰も是れ龍虎相擊つの盛觀なり、既にして兩翁互に相警むる處あり、能所互に相得る處ありしと云ふ、以て世の平凡の談議に非らざりしを知る可し、

老師尙ほ頗る愼重の態度あり、五十年來實驗の學談獨り自ら是とせず、之を內外の識者に質さんとして廣く世に諮詢したるも未だ是非の答案を得ざりしは、老師の深く遺憾と爲しし所なりき、其說果して是か、其論果して非か、讀者讀ふ之を次章以下の叙述に看よ、紅と爲し又白と爲す、は固より看者に任す、師を知り師を罪するも亦唯だ此に在り、若し夫れ之れが論釋の是非の如きは深く問ふに足らざる可し、老

師又偶ゝ以て悟後の境界を窺ふに足る咀嚼玩味は讀者にあり、

人生虛幻質。豈有金石堅。難保圓月滿。安永春花鮮。
艱辛貪名利。藥餌索神仙。紛紛稱弘法。渾渾謂愜玄。
爭似恣飽飯。鞠躬又便便。閑吟步秋野。冷笑坐春筵。
固愼把黃葉。何堪挾箭弦。不羨眞淨界。一任安塵纏。

第二章　無明論

一、無明の體及起因

無明とは何ぞや、蓋し是れ本論の先決問題にして、又迷悟の分際を究明するの根本問題なり、今や其實體を詳かにせんと欲す、名義の紛紛に拘らず直ちに本題に論及すべし、佛教の諸經論皆な無明を以つて生死流轉の源由と爲し、南頓北漸皆之れを以つて迷悟の係る所と爲し、之れを斷盡して眞淨界に入るものと爲す、然れば無明は佛教全般の所對也、無明なければ佛教無し佛法無しと云はんか、無明畢竟夫れ何物ぞ、此根本問題を解決せんとして佛教は生れたり、佛法は開示せられたり、實に無明は佛家の一大事因緣なり、然るに此無明の本源を知るは唯佛の境として馬鳴、龍樹未だ之を說かず、他の古聖先哲も亦た人人の自悟自證に得せしめんとするの意を漏らし、無明の實性即佛性、煩惱即菩提とのみ謂ひたるが如き、稍、其說を得たりと雖ども未だ以て其眞相を道破するに足らざるなり、異道の學、日に熾んに、佛法の正義將に絕えんとするの秋に方り、盲修瞎煉の禪、耳口名義の敎、雷龙葉を摘み枝を尋

ねて未だ其本幹に達せず、獨り原坦山あり、猛然として直ちに其根據を打し、精究實驗自ら毫末の凝滯なき迄到りて公然之を世に流布する者は本論を以て嚆矢と爲す、論に曰く

(一)經論之所詮以無明爲惑障之本而所謂無明惟說暗昏癡疑之迷相而未見謂其實體者也。

經曰、識想住於緣起四住、惑及一切煩惱而四住地前更無法起故名無始無明住地、金剛智知此始起、一想有終而不知其始前唯佛知始知終。

論曰、無始無明熏所起識非凡夫二乘之所能解乃至菩薩究覺地不能盡知唯佛究了是悉以無明爲惑障之源而不言其實何物反推諸妙覺之後豈不亦慊乎然今其自悟自得之意亦可以見矣古人曰、無明實性即佛性可謂稍得其說

文意明了、論釋の要なきが如し、但だ謂ゆる無明は動識の根體即ち經論に謂ゆる緣慮心にして、是れ即ち其怪物なることを知れば足れり、此心固より自體あるに非ず、覺省すれば終に滅盡す、今、要所は其起因の何れに在るかの問題なり、箇の起因、箇の源始、是れ唯佛の究了する所、古今の經論師空く名義を談じて未だ實詣する所無し、

而して獨り之れ有るは即ち原坦山師其人のみ、而して之を審細に說示する者は即ち師の心識論なり、今此無明論は曾だ謂ゆる無明なる者が人心諸惑の根本たることを究明し、心識論の前提として將た準備として、特に一論の成立を見たるものと知れば足れり、無明の眞相其れ果して如何、且く之を次條に看よ。

二、無明の相及住地

無明の起因は古聖未だ之を說かず、只其實性は即ち佛性にして無明其れ自身の自體無きを言ふ、動識の源始は先哲未だ之を言はず、只其煩惱は即ち菩提にして動識其れ自身の別體無きを說く、無明の眞相夫れ畢竟何物ぞ、煩惱の狀態元來何物ぞ、論に曰く

(二)且試論之蓋夫無明之實者動識之根體也已矣其始成身心也隨業緣以疑和蘊之體根之用凡聖不二。

譬如湖與江河也在湖名湖水在江河名江水河水名相雖殊水性不二其爲湖也有注洋含潤之德而及其爲江河也流蕩波瀾之則波舟楫利森般暴之則流漂田宅漂溺山澤人見其漂蕩之勢以爲水害不可測矣然人之於水也不可以一日闕之。

今夫心亦然矣雖有常寂元明之性德而意識之相現則作善作惡其相雖異其體非殊。

且其質流注積結故滯結身處則發疾病矣積聚心地則現惑障矣是所以其爲迷悟也。

猶如飲食之性能養人聚滯則生害矣。

且其靜也隱乎難測常潛伏于頭目胸臆之際其動也難制遂發妄迷諸惑之相。

以何知之或遇危難諸苦或發見愛疑慢又如瞋恚喜豫驚駭悲哀之切自察其心地煩悶惱屈而不能自在是即無明之住地也。

苟未拔其根則菩提涅槃及一切勝妙之法皆是鬼窟裡之活計耳。

理義明白、無明の體相を說き得て餘蘊なし、讀者諸士、老師の說く所、古今の理談と甚だ異なる處あるに留意せしや、若し夫れ空く看過したらんには、曾に本論の眞體に到らざるのみならず、依然たる鬼窟裡の活計たらん、今其れ前段無明の體相用を說くは古今相似たり、且其の質流注積結云云以下の論に至りては明かに論師獨得の實驗を談ずるもの、請ふ少しく予をして蛇足を畫かしめよ、其質液は流注して積結する物なるが故に、身處に滯結すれば則ち疾病を發し、心地に積聚すれば則ち惑障

を現すと云ひ、又其の靜や隱乎として測り難く常に頭目胸臆の際に潛伏し、其の動や制し難く遂に妄迷諸惑の相を發すと云ふの一段、是れ本論の主眼にして前代未聞の卓論、新說にあらざらんや、何となれば古今の經論師、東西の諸禪客、其無明を云云するや盲修闇證、只其の體を說きて未だ其住地を言はず、耳口三寸只其の相を論じて未だ其性質を語らず、故に吾人身心の上に迷悟の事實あることを知るも、之れが本源を察するに由なく、其狀態を想像するも、之れが然る所以を推すに由なし、本論之を確實に捉へ來つて其住地を指示し、其性質を摘發す、況んや其實體を物質即ち一種の流液に索め之れが動靜聚散の狀態を明晰に說破す、盲修闇證の禪客、耳食名義の徒、其の餘りに從來の施設と異るに喫驚して、忽ち外道呼ばゝりするも亦强ちに無理ならず、遮莫此に至りて是非の空論は無要なり、人人自身の上に之れを實查精究して、其曲直眞僞を判斷すべきのみ、其說果して是か、其論果して非か、之を細說し詳論する者は即ち師の心識論以下の諸說なり、今は雷だ其伏線として機かに影像を認めたるに過ぎず、影像既に甚だ異樣なり、其本體果して奈何、誤つて奴を認めて郎と爲し、鐵を認めて金と爲すこと莫くんば幸なり。

三、斷惑の工夫

細に無明と名け、麁に煩惱と名く、而して自體無く而も生滅有るものは則ち迷惑なり、無明その生や精動穩流即ち微細の動念と爲り、漸く長じて煩惱苦想即ち順逆の境に對して憎、愛、愁、惱、怖、畏、瞋、嫉等の麁識を成す、凡夫之れに據つて妄迷流轉し、佛祖之れに據つて發心悟道す、無明その滅や至妙清淨、定慧圓滿、明かに佛性を見る、此に至つて煩惱菩提、猶ほ昨夢の如し、其生や已むこと無し、其滅や之を斷ずるに在り、今則ち之を斷せんと欲す、論に曰く

(三)若其欲脫之須工夫參究工夫之際不拘行住坐臥進止動靜直向一念起滅之地攝引張弛放之視其所適捉之察其所窮及斷其源覺性常往應用無邊即是無明之脫也謂之正覺又稱大悟

抑是依敎立言若非祖宗之所要雖然古人曰光不透脫有兩般病是豈非無明不脫耶況乎當今邪僞之道熾而難遇正師我唯欲行車莫怪推挽之異又有一條葛藤曰不關言句伎倆如何辨正邪若能於是了

三、斷惑の工夫

達非聲色之所擬也焉耳。

眞參實究、素より然る可し、我れ唯だ車を行らんと欲す、推挽の異なるを怪むこと莫れと、今如何が推挽を異にする、讀者幸に留意せよ、祖、だ一念起滅の地に向つて攝引張弛し、之を放ちて其の適く所を視、之を捉へて其の窮まる所を察すと、是れ師が獨特の新工夫、實驗の活作用なり、而して其一心起滅の地とは何處ぞ、前條既に無明の住地を指示す、往て審細に看取す可し、黑蚖の潛伏地、既に之を搜得したり、獅子直ちに適往奮進、之を活捉するの手段ある可し、あはれ世の濟濟たる論師、盡天盡地に第二人無きの禪客、古今東西甚だ夥からざるに非ず、橫談縱說頗る妙ならざるに非ず、拂拳捧喝志氣揚らざるに非ず、瞬目揚眉作略快ならざるに非ず、然れども思へ、彼等が見臺紙上、彼等が長連牀上、水を穿ちて月を網し、索を執つて風を繫ぐの戲論は無きや、株を守りて兎を待ち、亡羊を岐途に逐ふの迂は無きや、樹に緣つて魚を索め、原上に鵲鴿を尋ぬるの陋はなきや、茲に顧みて始めて坦山の示誨に接す可し、無明の實性即佛性、是れ甚だ聞えたり、其佛性とは抑も何ぞや煩惱即菩提、生死即涅槃、稍、其の說を得たり、菩提涅槃先づ其物を捉へ來れ、愛に至つて本論に看よ、直ちに無明其

物を捉へて攝引張弛、之を放ちて其適く所を視、之を察して其窮まる所を知る、何ぞ夫れ寔に明確にして而も甚だ切實なるや、其根を拔き其源を斷つ、精究眞參、素より其人にありと雖も、正師に遇はずんば其根源を了し難し、幸に今之を本論に得たり、但だ車軸の甚だ嶄新にして其の推挽の大に異なるは固より其所なり、深く怪むに足らず、敎に依て言を立つるは祖宗の旨とする所に非ず、要は直ちに其眞髓を得るに在り、虎穴に入らずんば虎兒を獲ず、藥瞑眩せざれば其病瘥えず、餅餅は饑に充たず、冷暖は自知に在り、之を實際に試む可し、若し夫れ一條の葛藤の如きは言詮の及ばざる處、聲色の擬する所に非ず、師の一著に看て且く正邪を辨せよ。

摸索心源幾萬端、工夫做盡只知難、頃來偶得截流術、合元殿裡問長安。

第三章　心識論

一、心識論の立脚地

唯だ車を行らんと欲す、推挽の異同は敢て問ふ所にあらず、由來心識の學たる寔に佛教生命の係る所、釋氏一代の經卷、汗牛充棟の論疏、詮し來れば唯だ心識の二字を出でず、今夫れ空前の實驗心識論果して何の地に立脚す、曇曇の心識を說く、昔く一切の有情に通ず、非情も亦た此中に漏れず、古今東西の經論師之を講演し之を疏釋すること至れり盡せり、而も其の餘りに茫洋として吾人人類に於て甚だ切實を缺くの憾み無きこと能はざるを奈何せん、玆に大日本帝國曹洞沙門釋氏坦山あり、特に本論を撰して人間に流布する者は則ち偏に人機を對象として專ら人間の心識を說明したる者、他の謂ゆる蠢動含靈の如きは本論直接の對機に非ず、心識の本體は固より差別個個の法に非らざるが故に、其性德は一切に遍照し、不變の規律は一切に通融す、本論元より萬類に通せざるに非ず、但だ他の群類は直接の對機にあらざるのみ。

本論元來、臆斷の敎にあらず、典故を該ぬること廣博、實驗を重ぬること綿密、强ち敎に依つて言を立て、文に依つて義を解するは祖宗の必ずしも要とする所にあらず、抑も佛說の心識論に於ける固より人類に局らず、從つて其の所說も亦た決して一準ならざるとを知る可し、經論千百而して心識の名義異同甚だ夥し、經論師各其の所解に隨つて疏釋を加ふ、蓋し是れ古今多く異諍を生ずる所以なり、若し夫れ火を以て冷と爲し、氷を以て熱と爲し、頭を以て履み、脚を以て語ると爲さば、假令ひ佛說と云ふと雖も誰れか能く之を信せん、然らば則ち其說の多端必ずしも據るに足らず、故に實驗に係らざる者は之を取らざるは則ち本論の特色なり。

空く名義を談じて而も未だ實詣なく、癡坐暗證して而も未だ正定を識らず、滄溟に一粟を探り、亡羊を岐途に逐ひ、以て得たりと爲す、無始刼來生死の本、癡人は呼んで本來人と爲すもの、蓋し是れ古今の通弊なり、本論之を救はんと欲す、行車の推挽を異にする豈に怪むに足らんや、況んや萬類に通ずる一心を拈じて專ら人機の上に說著するに於てをや、佛書萬卷、取る可きの眞理は恰も萬斛の砂中に眞金を撈するが如しとは論主坦山の常談なり、法は一切に遍すと雖も、敎は人に依つて立つ、苟も

教を論せば須く先づ人に就て究む可し、佛に見え神に接したりとの幻覺も人に依つて開き得たるに非ずや、蠢動含靈亦た分に隨つて各心識の作用ある可し、未だ人を究めず、人焉ぞ他を云云するの要あらんや、茫洋一切を談ず、是れ人間の能事にあらざる可し、本論專ら人に就ての實驗を說く、推して以て他を究む可し。

心識の所在及流布の源支等は古來未だ曾て佛教經論の說かざる所、而して本論之れが說を爲し、加ふるに泰西の究理論を取捨して修證の要道に資するものは、曾に佛說の缺典を補ふのみに非ず、復た以て彼れが理學の錯謬を糺さんと欲するの微意に出づ、元より實驗獨得の學談、衆に違ふと雖も獨立の辨なきを得ず、讀者豫め之を諒とし或は批判を試むるも亦た可、但だ實際に經驗せずして耳食一片の空談に了るは非、且く本論の學的方面に就て其立脚地を一瞥せんか。

方今に於ける哲學海の潮流を察するに、千態萬狀、未だ全く歸着する所を知らざるが如し、而して大勢は唯物唯心及物心並行の三論を出でず、されば風濤波瀾の結果は、其說明的方面に於て幾多の進捗を認め、殆んど完璧の域に達せんとしつゝあるが如し、而して折衷的並行論は世の歡迎を受け、斯界名譽の實冠は彼れが頭上を飾

とらんしつゝあり、されど此種の論者は其實、一方の何れかに自家の活計を求め他の端に補ふて以て自立の根據と爲したるの痕跡、歴歴蔽ふ可からず、之を純正論者に比すれば、聊か卑怯の感なきに非ず、然れども事實は之を否定するに途なく、眞理は之を强ふるに由なし、理事を表裏に相究めて以て眞に近づくの穩健なるに若かず、論主坦山亦た玆に見る處ありてか、佛教從來、諸論師說く所の純正唯心論の缺典あるに慊焉として、其一端を泰西の理學に補ひ、之を自修の實驗に照らして一家を樹立し、却て泰西理學の錯謬を糺だす所ある者は則ち本論獨得の長處なり。

佛教從來經論師說く所の唯心一元論の缺點は物象界の事實を强ちに否定して省みざるにあり、されば、とて他の謂ゆる心神の活動は物質の活動其れ自身が元來心神にて元來心神の實體なし、精神は物質固有の働きにして物質の外に精神なしとの唯物一元論も亦た事實に於て全く首肯する能はず、又他の謂ゆる心と物とは全く別體にして只だ相互の關係ありとの心物二元論は素より取る處に非ず、之を他の諸說に顧みるに論主坦山は、スピノザー氏の謂ゆる精神は宇宙に遍在充滿し、心的作用のある處には必ず物的作用の伴ふものにして而も物的作用の下には必ず

精神作用の伴ふもの即ち現象と本體とは二にして不二なりとの說に酷似し其根據に於て稍一致せるが如し、是れ即ち現象と本體との並行一元論なりとす。

然るに本論が心識の所在を說き、其源支の依る所を示したる點に於て、或は之を心物二元論の如く思惟し、又デガルトの謂ゆる精神は物質の或部分に現はるとの精神實體說と等しきが如く、論ずる者あれども开は未だ論主坦山の本旨を得たる者に非ず、其心識の所在を示したるものは、物質と心識とを別體に見て、而も心識は物質の或部分に住すと謂ふの義には非ず、心の覺知作用は物質組織の或る部分に於て其作用特に顯著なりと云ふに在り、而して其最も顯著なる部分を且く心の所在と說き、心源と名け、他の部分を支流と說けり、之を人身の上に於て具さに云はゞ渾身何の部分か心の所在ならざる、物的作用の下には必ず心的作用あり、心的作用の下には必ず物的作用あり、然らば則ち心の方面より之を說かば萬法唯心と爲り、物の方面より之を論せば諸心唯物と爲る、故に物其物が即ち心なり、心其心が即ち物なりと云ふも敢て不可なし、心を離れたる物なく、物を離れたる心なしと云ふも亦た妨げず、心と物とは一に非ず、亦た異に非ず、身心不二、不二身心、但だ覺知作用顯現

の多少によりて且く源支を立づるは、心識說明の法に於て然らざるを得ず、故に一元を差別して且く三心と說くも、此三心の外、復た他に別の物質あることを說かず、物質も亦た心の名に依つて之を說明す、若し物の名に依つて心を說明するも敢て妨げず、名は畢竟體の代詞なり、今は心作用を說くを主とするが故に、一切を心識に攝するに過きず、本論固より心常相滅の說にあらず。

三心の說、一家の樹立なりと雖も、古格必ずしも審理に便ならず、單刀直入、骨子を捉へ來りて要道を辨ずるは則ち本論の特色なり、佛敎諸經論、其文廣博、其義精密、以てこれに加ふる無しと雖も、其廣博は却て空漠に失し、其精密は寧ろ汎濫に得たり、心識の名甚だ多し、蓋し染淨麁細等に依つて其稱を異にす、而して名義は互通するが故に、今は其實に依つて名義の紛紛、諸釋の區區の如きは關する所にあらず、適切簡明、以て心識の妙諦を說く者は則ち本論の特色なり。

泰西の解剖生理、神經系の中樞部を分ちて、腦氣、脊髓の二と說き、更に末梢部の諸神經を說きて之を一處に總ぶ、詮し來れば稍、本論三心の說に相似せり。

要するに本論は、現象と本體との並行一元論にして、其の對機は專ら人類に待つ、天

地同根萬物一體、是れ果して眞理ならば先づ之を人類に學び、人類を推して以て之を萬機に究め、萬機を察して以て絶對に及ぶ、且く萬法を差別すと雖も、萬法終に絶對に歸す、絶對夫れ學び難からんや、論主此に立脚し而して之を吾人身心の事實に要めて迷悟の分際を明かに覺省せんことを期す、偶わり又以て論主の本懷を窺ふに足らんか。

扶倦挑燈草要義一片未全灰浮辭非肯釣名利顧以深心供後才

二、心識の本體

本論は現象と本體との並行一元論なることは前條すでに之を辨せり、彌、進んで本體とは何ぞや、現象とは何ぞやの問案に到達せり、而して其本體を辨ずるに於て此れと並行せる現象の何たるかは自ら辨明せらるゝを以て、今心識の本體を說明せんには絶對的無限界より說き起さざるべからず、之を細說するは頗る複雜に涉り却て本論の要旨に違ふを以て、此には極めて簡單に其大要を辨ず可し、先づ世界を考察するに、空間及び時間の無限なることは何人も知る所なれば敢て贅せず、世界

は元來一進一退一離一合、謂ゆる星雲より始まりて星雲に終り、更に星雲より成立し一離一合一進一退を繰り返して無始無終なる者、故に世界の大化は時間の無限なるに從ふて、過去の過去際より、未來の未來際を盡して無限なるを以て、人間有限の思想にては其起源も其終極も識知すると能はず、此に至れば謂ゆる不可思議、不可商量にして如何なる哲學も說明する能はず、而して心識も亦た此無限界に逼瀰彌綸せるが故に、且く心體を論せば矢張り說明の出來得る範圍に於てせざるべからず、今試みに左に大要を辨せん。

本體とは何ぞや、曰く宇宙の絶對的一大勢力即ち是れなり、而して無限界宇宙の一大勢力が擧體活動するなり、此活動が漸く進行する間に進勢と退勢との別を生じ、其表面に波動を起す者即ち物象なり、而して其裏面に相續して物象離合の規律となるもの即ち心象なり、言ひ換ふれば勢力の表面は物體にして勢力の裏面は心體なり、二者の體共に是れ勢力にして即ち一元なり一體兩面、一にあらず、異にあらず、或は言はん宇宙の一大勢力が活動して一體兩面の說且く聞えたり、されど其勢力が何故に活動を始めたるかと、然り、勢力固より活動を性とする者なるに由る、其性

畢竟如何と問はゞ最早説明の範圍にあらず、謂ゆる唯佛與佛乃能究盡なり、即ち無限界中無始性海に入りて人間の思想は進むこと能はず、強て進まんと擬すれば却て後方に返るの外なし、諸ゝ本論が之を如何に説明するかを看よ、論に曰く

(一)心識生萬法、萬法攝於心識。

是れ開卷劈頭の提起なり、即ち心識本體なり、而して大乘佛教の諸經論は是れに同じ或は諸法は唯心の所現と云ひ、或は一切因果世界微塵、心に因つて體を成すと云ひ、色身外洎山河虛空大地、咸な是れ妙明眞心中の所現と説き、三界唯心、萬法唯識等の論、枚擧に遑あらず、さあれ曾だ經論に説くが故に眞理なりとは言ふべからず、是に於て乎、聊か辯なきを得ず。

勢力波動の表面が物象にして其裏面が心象なることは前述の如し、而して其果して然るや否やの理由は未だ之を説かず、今試に之を論せんか、さて意識性の方面即ち精神と、無意識性の方面即ち物質とは、無限の進化に於ける進勢の速度を異にこそすれ、共に是れ無始劫來宇宙の一大勢力が出沒生滅の波動を起して世界大化の間に一離一合一進一退を反覆して、此世界は其波動の習慣性に依りて成立したる

なり、故に吾人の生存も吾人の身心も皆無始劫來繼續したる習慣性の結果に外ならず、此習慣性は即ち一種の法律規則なり、此法律規則に據つて現象界即ち總ての物質は生起したるなり而して其物質の裏面に相續して表面の物象に於ける離合進退の法律規則となる者は即ち心識なり、然れば則ち心と物とは表裏一體にして不離不即、俱に獨立して存するものにあらず、之を心的作用の方面より論せば即ち心識生萬法と爲る、之を物的作用の方面より説けば即ち萬法攝於心識と爲る、茲に萬法の語は佛教經論の術語にして即ち一切物象の義なり、而して如上の十一文字は以て現象本體並行一元論の意義を開示して餘りあり、此並行論の眞理を説明するには、且く其半面に執着せる他の學派の邪義を排して以て顯正の手段と爲すを最も便利とす。

彼の唯物論者が物質を説明するには、化學上の分析より説き起して、所謂元素なる物を説き、以て唯物の理を證明するを見る、而して從來は六十乃至七十有餘の元素を區分したるも最近の化學は更に説を爲して分子は其原皆一にして唯だ電氣作用に由りて其性質を變化殊分するに過ぎずと云ひ、其電氣作用は復た物質より生

ずる力なりと說くに似たり、分子は最小至細不可析の者なりとす、而して物質は其體分子より成り、分子は小分子より成り、小分子は微分子より成る、而して所謂微分子は延長性を有すと云ふ是れ彼等の定義なり、果して然らば、苟も大なり小なり多少の空間を占領せる延長性あれば更に之を分析するとを得可し如何に幽微少物と雖も全滅に歸せざる限りは等しく延長性物體たるべし、果して然らば此物體たる最極微分の物質其物は畢竟何より成立したるかと問はざるべからず、此に至つて唯物論者は必ず言はん、物質畢竟不滅なれども其本體は不可知的なりと、若し果して不可知的ならば、唯物論は未了義の說にして一時假定の憶斷といはざるべからず、然るに此派の論者は此憶斷否寧ろ空想を根據として、世界は物質より成り生物は死物より生ず、草木の有する生育力も、動物の有する感應力も、人間の有する覺知力も、皆無機物質の固有せる勢力即ち物力の變態に過ぎずと爲し、物質の外に世界なく、物質の外に精神なく、物力の外に生活なく、禽獸人類悉く是れ物質及物力の變態なり、物質以外何の神あらんや、何の佛あらんや、未來も靈魂も畢竟是れ無智蒙昧の愚民の妄想なりと論じ、復た他に向上の要道あるを知らず、自己の執せる物質

其物が絕對的一大勢力の波動即ち宇宙界半面の現象たるに過ぎざるの眞理を覺らざるは、實に一方向きの擔板漢にして、模象に倣ひて眞象の全體を解せざる者なり、

如上の唯物論は其歸結に於て空想憶斷取る可きに非ずと雖も、或點までは理化學實驗の根據を有す、中に就て謂ゆる物力の說は暗に宇宙の大勢力に自然と接近しつゝあるが如し、物質には其物體に固有せる勢力ありて元素若しくは分子の一離一合するは全く物力の變化作用に由ると謂ふ、而して其物質變化の原因に伴ふ萬有の規律は何物にして何より生ずるやと問へば、是れ亦物質の固有せる勢力の變化作用に於ける習慣性に由ると答ふるに外ならず、今此に物力と謂ふは總名にして之を殊別すれば元素分子の集散する作用のみならず、運動、重力、光熱、音響、電氣の類は皆物力の發現にして其勢力の發現せるを顯勢力と名け、其未だ發現せざるを潛勢力と名け、其勢力は物質を離るゝことなし、之を物質固有の勢力と云ひ、物質不滅の理法と共に勢力恒存の規則を立て、之を理學の根據として各學科が研究を進むるなり、而して物質の變化には一定の規律ありて毫も軌道の外に出ることなし、

例へは水素酸素の二元が凝集して水なる液體と成り、更に冷却して氷なる固體と成る、之れが蒸熱すれば元の水と成り、更に蒸發して氣體と成る等、天地萬物皆な一定の規律の下に支配せられて、決して亂るゝことなし而して此規律は物質の固有にして習慣性なりと云ふに至つては、唯だ眞理の表面を摸索して未だ其裏面の奥秘を究めざるの皮想論なり、凡そ規律なるものは甲と乙との間に介在して雙方の運動を支配し、離合進退の一致を保たしむるものにして規律其れ自身が自己を支配す可き理無し、されば物質變化の原因に伴ふ規律は物質と物質との間にありて行はれ、元素と元素との間にありて存し、決して各個の元素の體中に存す可きの理なし、若し其一致一定の點を說明せんとならば各種元素の外、又は其表裏の何れかに其原因を發見せざる可からず、或は言はん其規律は吾人の感覺上の實驗より生じたるものにして經驗以前にありては吾人の知らざる所なりと、是れ亦た甚だ不通の論なり、何となれば經驗其物は此規律の行はるゝ上に成立したるものにして此規律を離れて經驗の出來可き理無し、果して然れば此規律は經驗以前の一大原理たるは疑ふの餘地なきなり、

斯く論じ來れば唯物論の最も取る可き根據を有する物力の論理も其歸結に於て到底未了義の假說たるを免れず、更に步武を一轉し、物質以外に存する時間空間の問案を一言して唯物論者の最後を吊し、而して後本論の研究を進む可し、偖て時間空間は別に握る可き體なく、感ず可き象を有せず、されど其目前に存し、事實に行はるるは一點の疑を容る可からず、而して時間と空間は物質にも非ず、物力にも非ず、又物質や物力が之れより生じたるにも非ず、實に不可思議の一種なり、通常之を呼んで關係と云ふ、別に體もなく、象もなく、單に心物各體の間に亘りて存す、而して此時間空間の問題は理化學に於ても決して論せざるを以て、理化學を根據とし生命とする所の唯物論者は、之に對して殆んど盲目の姿なり、併し物と物との間に於て、堅に一物の變化變遷を見る場合に時間の名を生じ、横に諸物の並存並立を見る場合に空間の名を生ず、委しく言へば物體の存立及變遷に於て堅の關係即ち續起を時間と云ひ、横の關係即ち並存を空間と云ふ、唯物論者は云ふ、時間空間は物質の關係より生じたる結果に外ならずして別に時間空間の如き殊特の物が存在するに非ずと、是れ亦頗る不合理の言なり、何となれば物質の定義は延長を性とすと云ふ

にあらずや、苟も延長ならば空間の幾分を占有するや論なし、若し物と物との間に空虛なければ長幅方圓等の形象は認むることを得ざるのみならず、物質の存在は消滅に歸し了らざるを得ず若し又空間の思想は物質より得たりとせば、宇宙間より物質を取去らば之れと同時に空間は消滅す可き理なるに其實吾人は如何に目前の物質を破壞し、或は移動し去るも空間の上に何等の變動を生せざるのみならず却て本來無一物の想像を生じ、空間其の物の思想は彌、確實となる、吾人が實際上の經驗に照すも物質の存在に由りて空間の存在を知るには非ずして、空間の存在に由りて物質の存在を認むるなり、物質の特性たる延長其物は空間の關係に由りて成立し、空間を離れては全く物象を認むること能はざるなり、物質の存在を否定するの思想は浮ぶことある可きも、空間の恒有遍在に對する思想は到底動かすことを得ず時間も亦然り、時間其物は無限且つ遍在にして物質と全く其性質を異にし其狀態を異にするものなれば、物質の關係より得たる思想に非ず、凡そ時間は前念と後念と相續する狀態にして事物の變化には缺く可からざるのみならず、何の變化も時間に由りて現はれざるはなし若し時間を除き去らは物質の變化も世界

の進遷もなかるべし、此明かなる事實を敢て否定せんとする唯物論者の如きは未だ宇宙の大法を理解せざるの罪に坐せざるを得ず、

茲に本論は宇宙の大法より說き起して萬有に於ける變化作用の根本的規律の存在を示し、現象本體の表裏兩面に涉り、之を實驗に照らして心識の妙諦に悟入せしめんとす、而して前提既に心識の體性を拈起したれば、論は一歩を進めて其大法の名分を說けり、曰く

(二)其爲名義也甚多矣。或名心意識知、又立覺法智身之義、其實一體而已矣、

心識とは謂ゆる靈界の總名にして、之を細別すれば其名義も亦甚だ多し、佛敎經論中之を大別して一心を三義に分ち、過去を意と名け、未來を心と名け、現在を識と名く、或は集起を心と名け思量を意と名け了別を識と名くる等、心意識の三義を根本として他の諸心識の相と用とを說く、而して所知を性と爲し三義一切に通ず、又覺の義を立つ、謂ゆる覺は、本覺、始覺、佛性、如來藏等是れなり、又法の義を立つ、謂ゆる法は法界、法性、眞如、涅槃等是れなり、又智の義を立つ、謂ゆる智は般若、菩提、無師智、自然智、自覺性智等是れなり、又身の義を立つ、謂ゆる身は法身、報身、應身、化身、十身等是れ

なり、此外染淨の緣に隨つて十方界を分つ等、經論中千差萬別なりと雖も、皆な心識無限の相用を細說したる者にして、其實は一體のみ、而して本論の要は其實體を簡明直截に詳かにせんと欲するに在り、故に名義の區區、訓詁の紛紜に拘らず、直ちに

(三)今分之爲三心、以攝一切之法、曰覺心、曰不覺心、曰和合心。

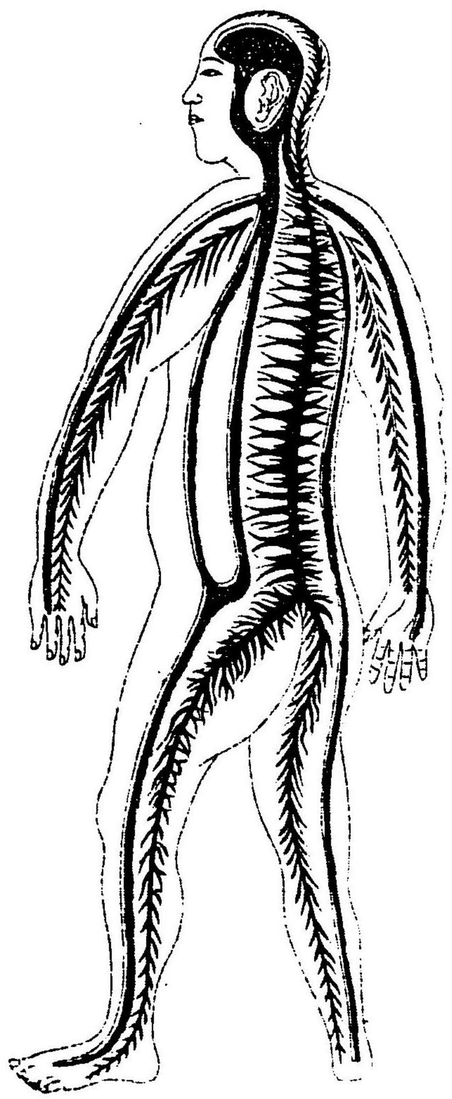
拈し來つて適切簡明、之を吾人身心上の實驗に照らさんとす、經論の謂ゆる十界の依正、其實は一體にして之を分開すれば、此三心を出でず、而して佛家の謂ゆる有情界は三心の合成にして其謂ゆる非情界は唯不覺心なり、此に有情界と云ふは人類及動物の一切を含み、其非情界と云ふは植物及鑛類等の一切を指す、但だ鑛類の全く無精物なると植物の含精物なるとの如きは問ふ所にあらず、今や實驗的心性學に於て之を奈何に說明せらるゝかは逐條の下に看取せよ、從來の經論師にして先入爲主の讀者は、已見に同じければ以て是と爲し、已見に同じからざれば以て非と爲すの通弊を脫却して、之を實驗に訴へて後本論の評價に及ぶ可し、論主を知り論主を罪するも亦唯だ此に在り。

第一圖

淨覺心圖解

鮮紅示覺性。
墨色表不覺部躰。
此心周遍法界非生滅至妙清淨。

覺心者、発源於腦之前膸腦底、支流生九對分泒無量彌蔓全躰分圖、其大經至其精微非圖書所盡。



心識界の總論を叙し來りて今は彌、本論の眞域に到達し、吾人が迷悟の分際を究明するの第一歩とはなれり、此に讀者に注意すべきことあり、覺心の名は相對を意味するは勿論なれども、いま云ふ所の覺は謂ゆる迷に對する悟りの意義にあらず、這は物象即ち不覺心に對する覺心にして、前に言へる絶對的本體即ち宇宙の一大勢力の波動に於ける其表面なる物象の裏面に相續する心象其物を云ふなり、されば諸經論の謂ゆる本覺にして始覺にはあらず、覺體畢竟一なれども此分堺を混ずる時は、本論三心の意義を誤ることなきを保せず、乃ち論に曰く

三、覺心

(四)覺心者、靈妙寂照、而具覺知分辨應動識智之法、其體非生滅、而遍法界、其性非一異、而有隱顯之相、

此心或は堅實心と云ふ、不壞の義なり、其體は法爾如然にして無始なり、故に生に非ず、恒存無限にして無終なり、故に滅に非ず、而も絶對にして宇宙に充滿彌綸す、故に遍在なり、其性は一に非ず、異に非ず、而して隱顯出沒、進化變遷の作用を有す、其靜や

靈妙にして寂照、明鏡止水の如し、其動や覺知分辨、緣に隨ひ感に趣き、識智思想應變極まり無し、諸聖此心を明らめて清淨法身を得、群生此心を覆ふて染汚色身に迷ふ此心不覺心に混入すれば則ち諸の煩惱を生じ、此心障を離るれば則ち諸の喜樂を成す、而して不覺心即ち物象より來る所の心的作用は則ち覺性にして生滅あり、覺心即ち本體より起る所の心的作用は即ち理性にして恒存なり、此等の道理は追て三心の總てを究めたる上ならでは分別し難きを以て今之を細說せず、如上は只是れ覺心の總論のみ、而して此覺心は吾人人類の身心上に於て如何なる作用を顯現せるか、論に曰く

(五)其於人機也。發源於腦之前髓。支流九對彌莖全躬。但除毛骨爪齒。

彌、本論の佳境に入り來れり、讀者は記臆するならん、論主の立脚地及對機の說明は首條に於て之れを悉せり、今や對機の人類に在ることを言明して其實驗を語るなり、蓋し佛敎經論中に於て、心識性相の論、迷悟修證の說、大小悉く備はり、到底異學の及ぶ所にあらず、而して未だ詳かに其心識の所在を說かざるは、蓋し是れ我の缺典なり、泰西の理學其部所を說くこと甚だ詳かなり、而して未だ心識の體性を知らず、

唯だ心相を認めて以て其本性と爲す、蓋し是れ彼れの缺點なり、

惟ふに佛敎の心識を說くや、一切に通じて說を立て、特に個個に就て顯說なきものは、謂ゆる法身五道に流轉すとの筆法に由る、故に人機に就ては謂ゆる求心不可得の旨修暗證を以て足れりとせり、古人多くは此筆法に依つて旨修し暗證したり、是れ必ずしも不可に非ず、要は悟入に在りと雖も、奴を認めて郎と爲し、謂ゆる無始劫來生死の原、癡人は呼で本來人と爲す者十に八九は皆然り、今經論の上に一瞥せよ、心若し五蘊と相應すれば欲界の果報を現ず、欲界とは吾人人類の現在する處なり、而して蠢動含靈皆此中に居る、經論之を一概に見て說くが故に、心の所在はと問へば、五蘊界皆心なり、個個に就て部所を論ずることを許さず、遂に求心不可得なり、心若し禪定と相應すれば色界の果報を感ず、謂ゆる初禪天には鼻舌兩識を缺き、二禪以上は五識皆無なり、無想天中には五百大劫を經て第六意識を沒す、此等の天中には五根あつて五識無しと說く、心若し虛空と相應すれば其報や無色界なり、五蘊總て斷滅して唯だ四蘊空と相應し、身體無くして心は空中に流行すと論ず、蓋し如上の三界說中、第二第三の境界の如きは單に心の本體即ち無限界宇宙の大勢力に

於ける活動の趣きを明かしたる者ならん、但だ第一の欲界は即ち物象と心象との關係を說きたるなり、佛敎經論の心識を說く概ね斯の如し、而して吾人は謂ゆる欲界中の生物なり、故に先づ欲界に就ての心性を究めざる可からず、而して吾人は生物中の動物なり、先づ動物に就ての心性を究めざる可からず、而して吾人は動物中の人間なり、先づ人間に就ての心性を究めざる可からず、然り、人間の心性其起動其顯現、事實に於て果して如何、之を眞證實驗するは最も適切肝要なり、然るに古今東西の經論師、唯だ經論の如く經論を說明し、漫然空漠、但だ其廣說を以て誇りと爲し、吾人身心の實際に於て甚だ不得要領に了らしむ、本論主は則ち然らず、直ちに人機に就て心性を說き、實驗に依つて其心識顯現の部所を明示したるものは實に古今獨步の卓識卓見といふべし。

夫れ人間微妙の作用たる心神の本源は何れの處に存するや、曰く源を腦の前髓に發すと、蓋し心源腦に在るの論、其支流の說、是れ本論主の新發明に非ず、泰西生理學の定說にして古來學者の研究に依つて其大腦に在ることは疑ふ可くも非ず、されど皆是れ動物試驗の結果と腦疾病又は死體解剖等に由れる推測の判定に過ぎず

して、心神其物の本體本性の如きは未だ人智を以て推定し能はざる者とせるが如し、是れ活ける人間が內觀法の實驗に由るにあざれば得て知り能はざる者、固より然る可しと雖も、心識作用の淵源は腦樞に顯現せるの事實は一定の學說たり、佛敎亦た然り、涅槃經序品に於て『頭爲殿堂、心王處中』との明文を見る、而して昆蟲類亦必ず腦に藉つて動覺あり、但だ人類の腦と昆蟲類の腦とは其形狀を異にし、其部所を同うせず、或は數腦珠の如く相連る者あり、百足は節々是れ腦にして其身兩斷すれば左右に走動するが如き其一例なり、是れに依つて之を觀れば、足々皆腦の體ある可く、鱗鱗皆腦の蛇ある可く、羽羽皆腦の鳥ある可し、腦は實に心神の中樞たるに相違なし、而して

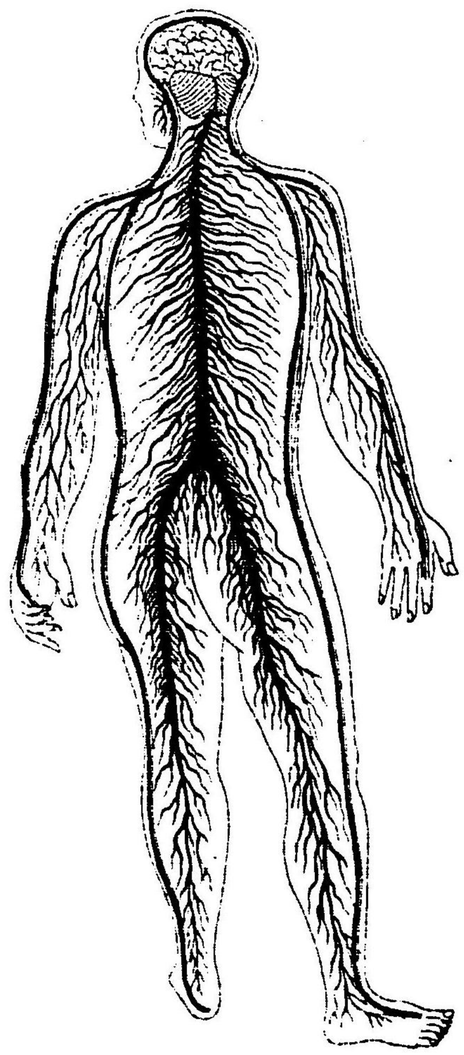
人間の腦組織は、頭蓋腔內に在つて其狀恰も豆腐の如く其表面に位する處は灰白質にして其中樞に位する處は白質なり、厚膜に包まれ頭蓋骨に據つて保持せらる、腦筋分派して繩の如く線の如く絲の如し、而して全躰に彌蔓す、之を腦神經と謂ふ、又腦氣筋と譯する者あり、而して初生小孩の腦無き者は則ち死す、腦少き者は則ち癡なり、腦中は膿血水漲あり、或は熱を生じ、或は腦骨を壓し、或は震動することあれ

ば則ち其本性を失して矇昧不省と爲る、眼に腦氣筋無ければ則ち視ること能はず、耳に腦氣筋無ければ則ち聽くこと能はず、鼻に腦氣筋無ければ香臭を分たず、舌に腦氣筋無ければ甘苦を知らず、而して遍身手足の機能、痛痒冷熱澁滑を辨じ、能く古今を記し、萬事に應ずる者は悉く是れ腦の權能に非らざるは無し、譬へば腦は中央政府の如く他は地方諸官省の如し、而して心王は腦の宮殿に藉りて政令を布く、今本論主の開示せる者即ち是れ、謂ゆる覺心種子の源府にして頭腦頂骨の前髓にあり、而して其支流其機關は則ち左の如し

(六)何謂九對、曰一對支流入鼻根起嗅覺、二三四對及六對入眼根起見覺及轉運、五對數支散布頰面、七對入耳根起聞覺、八對數支入胸腹肺胃等、九對入舌根起味覺轉運、若夫至筋肉皮膚及四肢之末有覺知轉運之用者、皆此心之支流而已矣、

九對支流、凡そ一對と稱するは左右兩條、或は數條、必ずしも一定ならず、西書或は十對と爲し又十二對と爲すあり、斯は細分を別說せるのみ、其實は腦、脊、腰、合して四十對、其體別あるに非ず、他の文面は讀んで字の如し、詳細に論釋するまでもなし、宜く讀者の自究に一任す可し、但だ泰西生理の學に於て腦髓神經及脊髓神經等謂ゆる

第二圖



神經全系の說甚だ精詳ならざるに非ず、されど彼れ唯だ和合の心相に執して未だ覺不覺の實體及迷悟の本性を知らず、本論先づ淨覺心性の大要を辯明す、更に第一圖解について其梗概を審究す可し。

四、不覺心

無限界の中より宇宙の大勢力が活動して漸く進行する間に進勢退勢の別を生じ、其表面に波動を起したる者即ち物象にして其裏面に相續する力即ち心象なりとは、心識本體論の條下に於て既に之を說叙し、而して心象は即ち覺心の其れなることを究明したり、今此に叙述せんとする所は不覺心即ち物象の體性是れなり、此物象に心の名を附するは謂ゆる並行一元論の原則なりとす、其は心物表裏兩面一體にして心の方面より說く時は萬法皆な心識に攝するが故なり、而して此不覺心も亦た一切の物象に通ずと雖も、今の要は專ら人機に在ることを忘るべからず、前條の覺心は即ち吾人の身體の上に顯現する所の心性に就て言ひ、本條の不覺心は即ち吾人の心性が依止する所の身性に就て言ふなり、語を換へて之を云へば覺は無

四、不覺心

形の心體にして不覺は有形の肉體なり、而して此不覺心即ち肉體は生理學上の謂ゆる微分子乃至細胞より成るは勿論なれども其根本的原理に於て吾人は何に由つて此身を受け此世に生れ得たるやと云ふ問題に於て佛說は之を業力相續の惹習性に由ると云ふ今本題に入るに先立ち謂ゆる業力相續の論理に就て聊か其一斑を叙す可し、蓋し是れ肝要の問案なればなり、

寰宇の萬象は有形と無形との二種に外ならず、而して無形は即ち勢力なり、有形は即ち物質なり、此二者は俱に獨立して存在す可きにあらず、而して物質は絶對的大勢力の活動に於ける波象的凝集體なり、既にして物體あれば必ず物力あり是故に物あれば必ず力あり、力あれば必ず物あり、物無くして力有ることなく、力無くして物有ることなし、而して物質は無盡性なり、其生滅は只其變化にして其體性は永久不滅なり、例へば水の變化して水蒸氣と爲り、空中に冷却して復た元の水と爲り雨露と成るが如く、又薪の燃燒して炭酸水氣及び灰と爲るも植物之を攝取して發育生成し、再び元の薪炭と爲り、火熱と成るが如し、其體性固より不滅なり、物質既に無盡性にして永久不滅なれば、物力も亦無盡性にして恒存不增不減ならざるを得ず、

而して其生滅あるは亦只だ變化にして其體性固より不增不減なり、例へば石を投ぐるが如し、吾人の筋力變じて石の運動と爲り、地に落ち或は物に觸れば運動變じて氣温と爲り、氣温復た變じて動植物の發育を助け、動植物は人間の食物と爲り、食物變じて終に還た元の筋力と爲るが如し、今吾人の肉體即ち不覺心は集質の物體なり、既に此物體あれば必ず其物力なかる可からず、此物力の運動之を名けて業力と云ふ此業力善惡の因緣に隨つて善惡の作用を起す、其善惡の因緣は次條に看る所の覺と不覺の和合心より來る所の謂ゆる無明に由る、乃ち業力は甲より乙、乙より丙と變幻し、乙の業果は則ち甲の業力其因と爲り、甲の果は則ち乙丙の力其因と爲り、三法轉展して因果同時の業相を成就し、業相續を爲す、其業力或は張力と爲りて隱存し、或は活力と爲りて顯現す、斯の如くにして變幻生滅窮極なきもの之を業力相續と謂ふ而して身心運動の業力に善惡の原因あれば其變幻作用の結果に善惡の體相を顯現するは理の當然なり、古哲曰く濕性不變の水無くんば何ぞ虛妄假相の波有らん、若し淨明不變の鏡無くんば何ぞ種種虛假の影有らんと、蓋し濕性不變の水とは即ち無限界宇宙の一大勢力を謂ふ、淨明不變の鏡とは即ち覺心の妙體

を謂ふ而して虛妄假相の波とは即ち不覺心たる物象を云ひ、種種虛假の影とは即ち和合心たる無明を云ふ、經に曰く我無く造無く受者無けれども善惡の業亦亡びず、因緣會遇の時忽ち感得すと、蓋し善惡業報因緣會遇即ち是れ不覺心の現相なり、論に曰く

(七)不覺心者、集質造形之心也、其體不具覺知、起滅變幻現十界依正之相、華嚴經曰、彼心不常住、無量難思議顯現一切色、各各不相知、一切世界中無法而不造、經中或謂之質多耶、阿陀那、又稱不覺不知不動器世間識、

覺知無くして集起執持等の法を具ふ、故に不覺心の名を得たり、經中の質多耶は即ち集起の義、阿陀那は即ち執持の義、其他此の心の異稱多し、唯識論の謂ゆる能く諸法の種子を執持し、能く色根の依處を執受し、亦能く結生相續を執取すとは即ち阿陀那の義釋なり、又業緣の薰習に隨つて變幻無量、十界依正の相を顯現すとは即ち質多耶の義釋なり、而して器世間識の名に依れば無機體にも通融す、此等は物象界全體上より見たる時のことに屬す、適切には動植物の生活力即ち有機體が不覺心の本領なり、今は有機體中の人類に就ての說示なりとす、再言すれば專ら人類身體の

生活力を司る者之を不覺心と云ふ、更に換言すれば覺知無き唯生活力即ち此心なり、草木の其れの如き生成物其物が此心なりと了知すれば可なり、茲に一言す可きは例の唯物論者が精神は物質其れ自身の固有せる物力作用にして、此物的作用の外に心神無しと云へるが如きは、彼れ唯だ本論の謂ゆる不覺心を認めて之を心識の本體本性と爲し、而して我が覺心の其れの如きは未だ夢にだも知らず、況んや覺と不覺との和合心の狀態を知らんや、然れども彼れも亦既に不覺心を認め得たれば聽て本論の三心に學び及ぶの時ある可きを信ず、問ふ不覺心源の所在は如何、

(八)其源亦在後腦及脊腰、而發三十一對、支流集取諸質之精粹相續形體、此心の本源は後腦及脊腰に在りとすれば、恰も百足の節節に腦を有し其腦に心神を有するが如く、不覺心は後腦より脊腰に涉りて其原動力を具ふるなり、而して專ら形體の養殖運化を司宰するものとす、而して其腰髓は樹根の如く、其脊髓は本幹の如く、後腦は頂心の如し、之を要約すれば人類生活力の本源の腰髓より起りて脊髓に涉り、脊髓より後腦に涉りて存在し、其間左右に三十一對の支流を生じ、之れに依て全軀の營養を爲す、委く言へば覺心は頭腦を以て根源と爲し、四肢を以て枝末

と爲す、而して不覺心は脊腰より後腦部を以て本源と爲し、頭腦四肢を以て支派と爲し、其支派の起る所は三十一對にして更に之れより分條無量纏綿羅織、以て身體を集造し、始終其闕損を補益して形體を相續し生存せしむるなり、生理學の通說に據れば脊髓を以て腦條支末と爲し、或は腦髓と同性同用と爲す、而して本論は前述の如し、蓋し是れ衆議の惹起する所以、而して本論の獨得實驗に係る所と爲す、此等の究明は次章の腦脊異性論に於て細說するを以て今は且く措く、要するに覺心と不覺心とは其源府を異にし、從つて各其主宰を分つ、卽ち腦髓と脊腰髓とは全く其性質を異にし、各其作用を別にすると云ふに歸着す、然り千聞一見に如かず、第二圖について其梗概を審究す可し。

五、和合心

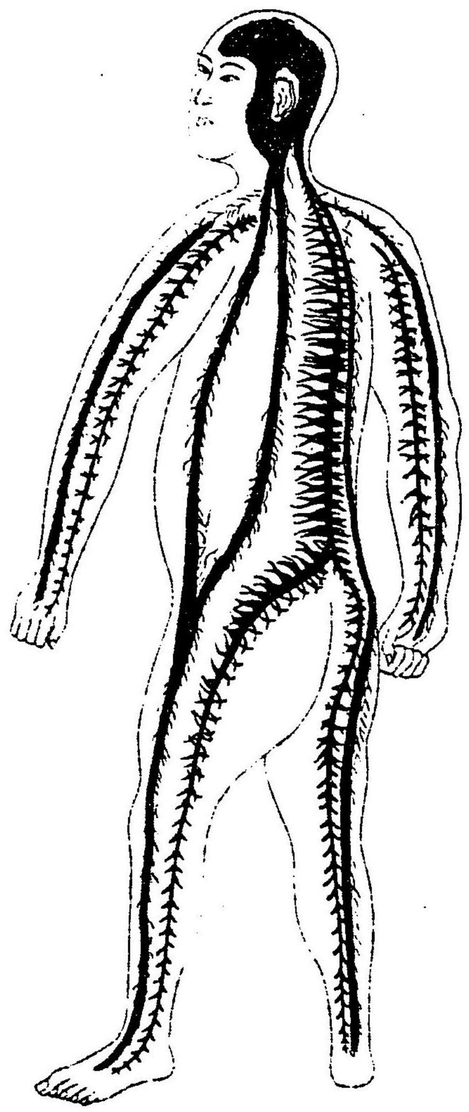
古今の經論師、東西の諸禪客、喋喋辯を費し、喃喃說いて止まず、而して遂に不得要領に了る者は、謂ゆる無明論なり二十年乃至三十年晝夜工夫を凝らし、知識に飽參して遂に不可解に歸する者は卽ち無明論なり、本著は前章に之を提起して無明の何

第三圖

和合心圖解

淡灰赤色示和合覺性。
墨線纖維表不覺混入。
此心無自體覺不覺混淆成此心。

不覺心上流入覺源混濁和合。
起九對之瓜流爲無明惑障今圖其大經



物なるかを瞥見したりき、歩武は彌、佳境に進入して今や箇の無明てふ一大怪物を捕獲し之れが解剖の刀を執らんとす、而して執刀の前、先づ例に依つて審問す可きは其物の年齢及出産の父母等是れなり、讀者は前條に於て覺心と不覺心なる者に邂逅し、其體性の如何なる者かを究め得たり、焉ぞ料らん、彼等は即ち此一大怪物を産出したる兩親たらんとは、而して其年齢を問ひ其性質を糺だせば則ち曰く、無始劫來の熏習性と、而して其怪力隱顯出沒變幻無量、三界の群生を惱殺す、此一大怪物、試みに執刀一番して其内容を解剖せんか、論に曰く

(九)和合心者、念想情慮之心也、此心無別體、覺心和合於不覺而成此心也、蓋不覺心流動而入覺源則覺心與之和合、譬如豆汁之和於鹽液而爲豆腐、清水之合於塵土而成濁水、是故如如之覺性變而成念慮生滅之心也。

此和合に内外の二相あり、其外相は緣慮の心にして之が外境と相應して種種の業相を造る、其内相は煩悶、惱動、順逆の内境に對して憎愛、愁鬱、怖畏、瞋嫉等の苦想を起す、此心元來生滅性にして而も自體あること無し、覺心が不覺心と混淆して此心を構成す、故に和合心の名を立つ、不覺の心液が流動して覺源に浸入する時、覺心の擧

體が皆生滅の心相と爲る、不覺心が流動して覺源に入れば則ち、細には之を無明と名け麁には之を煩惱と謂ふ、覺心が已に不覺と和合すれば則ち、細には之を黎耶、末那と名け、麁には之を意識と謂ふ、言を換へて之を云へば、和合以前の不覺心は和合の後に於て無明煩惱と名け、和合以前の覺心は和合の後に於て黎耶、末那、意識等の名を得、尙之を要約すれば不覺なる脊髓の髓液が上流して覺心元府の腦底に浸入し腦氣に和合して混濁性と爲り、謂ゆる繰慮心を構成し、之れが全身に派流して變幻惱動の作用を起すもの是れ和合心の性相なり即ち之れ一切衆生の心相なり、和合心の性相既に然るが故に、一たび之れが和合を解離すれば此心の體相は全く無となる、世の唯物論者は則ち言ふ、凡そ元始は一致結合することあるも、分散すれば則ち元始に還る、然るに精神は元始に還ることなし、故に精神の實體なしと、此斷案は論理に於て敢て不可なし、然れども彼れが認めて以て精神と爲す所の者は則ち精神其物の本體にあらずして其影像なる繰慮の妄心、即ち此和合心の幻相たるを奈何せん、世の精神を論ずる者其多くは皆此心の範圍を出でずして云云し、未だ其眞諦に造詣せず、佛徒の心識を談ずる者其多くは皆眞諦の名義を云云して未だ其

現實に實詣なし、本論主之れが兩面を打得し、之を實驗に照らして其眞諦を了せしめ、其現實に接せしむ、何ぞ夫れ甚だ深奥にして而も洵に適切なるや、

或は言はん、無明の本源を知るは唯佛の境、馬鳴、龍樹未だ顯說せず、今妄りに之れを論ずるは寧ろ謬らざらんやと、夫れ然り、或は其れ然らん、然れども近古異道實驗の學、日に熾んにして佛祖の正道將に亡びなんとす、此際に於て精究實驗、而も三心の體性を發明し、之を人間に流布したる者は本論を以て嚆矢と爲す、此發明は實に我日本安政六年、論主が四十二歲の時にして本論は其發明の翌年、即ち安政七年の撰に係る、而して明治二年師が五十一歲の時に逮んで更に其遺漏を補ひ、前後三十餘年間の推敲商搉を重ね、鍛練啄磨を經て玆に全く了義の經典と成りたる者なり、他の毀謗の如きは敢て關する所にあらず、師を知り師を罪するも實に此論に在り、

(十)在凡名意識、在二乘爲無漏智、菩薩之般若、諸佛之菩提、皆此心之染淨而已矣、

和合心元來別體なし、其名の如く覺と不覺と結締和合して此心を成す、引寄せて結べば芝の莖なり、解くれば元の野原にして明皎皎の眞如の覺月は、千籠千籠草の露までも其影を宿しつゝあり、故に菩薩未だ成佛せざる時は菩提を以て煩惱と爲し、

已に成佛すれば煩惱を以て菩提と爲す、但だ引寄せて結ぶ意識の委に迷ふ者之を名けて凡夫と云ひ、諦めて省みざる者之を呼んで二乘と云ふ、凡そ三賢十聖、皆之を轉じて眞淨界に遊ぶ、其實は唯だ覺不覺の離合のみ、染淨隨緣の異名のみ。

(十)在腦名八識、在胸腹名六識七識。

八識は心と名け、謂ゆる阿黎耶識にして含藏を義とす、即ち腦は覺、不覺、含藏の淵源にして和合心の腦底に潛在する者、經論之を說て第八識阿黎耶と名く、而して既に腦底に派流を起す、之を第七識末那と名け、流注して胸腹部に至る之を第六識又意識と名く、而して第六意識は即ち分別計度の心、第七末那識は即ち思量情想の心なり、經論中、心・意・識の名義を說くこと同異あり、今は六七同依の說を取る、又其部位の如きは經論未だ全く顯說せず、而して今其部位を論定し顯說したるは、古今獨步の確說精究實驗の眞證なり、且つ其の所依に從つて名義を異にすと雖も、其實は齊しく是れ覺・不覺の和合心にして體性不二なり、且く去つて之を第三圖解に看よ。

(十一)且夫三心有純有雜、純覺者眼睛舌根及耳鼻之浮根是也、純不覺者毛骨爪齒及草木等是也、餘皆三心之所合成而和合心消則惑障隨滅矣、覺心離則動類則死矣、不覺心

廢則形質從壞矣、若夫佛氏之道在斷和合心焉耳。

是れ三心の結論なり、而して三心に純雜の相を言ふものは唯だ人體に就て其梗概を說きたるに過ぎず、蓋し身體中に於て不覺心の混淆を受けざるは眼睛及耳鼻舌根等の浮根のみ、或は言はん、覺源既に不覺の浸入を受けて染濁ならば其支流たる眼等の根體も亦自ら其混淆を免れざるの理なり、然るに事實は之れに反す、豈謬らざらんやと、然り、若し病老等に至れば則ち亦免れず、されど眼等浮根の本性として其健全の時に在りては自ら其混淆を防遏するの機用を有す、譬へば濁水汚流の土砂を通過して清泉を湧出するが如し、以て其理會を得可し、純不覺は即ち唯生成力ありて心神の感受なし、其人身に在りては毛骨爪齒等是れ、今草木等を一言したるは其生成力のみにして心神の感受作用を有せざる者は皆純不覺心の屬類なりとの汎說を約示したるに過ぎず、苟も心神の作用ある者は皆三心の合成せる者、若し和合心を消滅すれば則ち一切の妄惑は自ら滅盡して眞智を開發し、三賢十聖の妙境界を打得す、而して若し覺心身體を離却すれば則ち一切の動類は即ち死す、若し不覺心廢たるれば則ち形質の總ては壞滅す、爰に一言す可きは生理學上の死なり、

生活體は凡て蕃殖の作用を有し、而して細胞の新陳代謝は以て形體を相續す、若し夫れ老衰及疾病等は則ち蕃殖力の減退にして、死は則ち新陳代謝の休止なり、且つ夫れ物質作用は心的作用を要せずして唯物的に自働する者、催眠術に由る物的作用の如き以て之れを證するに足る、水中に游泳するが如きも亦た唯物的作用なり、今夫れ死を論ずるに心神の離廢を云云するが如きは人智未開時代の妄想にして生理學の何たるをも辯せざる極めて迂愚の說なりと云はんか、夫れ然り、豈其れ然らんや、如上の辯難の如きは唯物質作用の表面に執着して未だ物質作用其物の裏面の本體を究めざる者、即ち本論の本體說に於て既に之れを叙述し置きたれば今復た之を再說せずと雖ども、物質其物の本原が心識渾體の中に漏れずとせば、前顯生理學上より、將た唯物萬能論者よりの難の如きは殆んど其枝葉の論たるに過ぎず、且つ今言ふ所の覺心離るれば動類即ち死すとの語端を一轉して動類死すれば覺心離ると云はゞ如何、或は物質變すれば心神其作用を休止し、又は動類死すれば覺心現はれずと云はゞ如何、今は心識の方面より立論したるが故に覺心離るれば動類即ち死すの語あるのみ、復た何ぞ怪むに足らんや、況んや目前の事實に於て心神

なくして長く活けるの動類なきをや、三心の論釋も且く茲に結着を告げぬ、餘論は識者の自究に一任し、實詣に委す可し、若し夫れ和合心を斷ずるの工夫に至つては實に是れ修道の肝要なり。

上來の五節、詮し來れば果して如何、論主が學究の立脚地より出立して心識の本體論及三心の體性論を通過し、今や修證の要道に到着したれば、且く後方に顧みて要領を取得するの便益たるを感ず、抑も心識の本體は無限界宇宙の一大勢力に基因し、物象界の裏面に相續する自然的規律作用の其れなることを知れり、而して至妙清淨の覺心は其本體理勢の活動にして其源を吾人の腦髓組織の上に發現し、其支流は全躰に彌蔓して專ら覺知分辨應動識智の妙用を顯はす者なることを了し、物象界唯生活性の不覺心は其根幹を吾人の後腦及脊腰組織の部所に有し、其枝葉亦た全躰に纏羅し、專ら形體の蕃殖滋養を營む可き生成力の其れなることを知れり、然り、而して前記の覺と不覺の二者が吾人の腦底に混淆して即ち一種の和合心なる者を構成し、此心は緣慮念想の作用を爲起して三界の幻相を現はすと云ふが即ち本論の要約なり。

而して不覺心が流動して覺源に浸入すれば、細には之を無明と名け、麁には之を煩惱と稱す、覺心が不覺の混入を受くれば、細に腦底に在つては之を第八阿黎耶識と名け、麁に胸腹に在つては之を第七末那識及第六意識の稱を得、其所在に依つて名稱を異にすると雖も其實は、體性不二なり、然り而して若し此和合心を消盡すれば至妙清淨の覺心其本性に立戻りて無明即佛性と爲り、形體營養の不覺心其本體に歸復して煩惱即菩提と爲る、澁柿の澁こそ好けれ其儘に、變らでかはる柿の甘さよ、此に始めて三賢十聖の妙境界を打得す可しと云ふが即ち本論の結着なり、而して三賢十聖も六凡四聖も畢竟是れ一心の染淨のみと云ふに歸局す、一心の染淨、吾人は如何にして眞淨界に投入す可きか、待て節を次ぎて聊か其梗概を瞥見せん、

六、一心の染淨

覺心叙し去り、不覺心叙し來りて、和合心叙し了る、三心の要既に盡きぬ、而して吾人の最も難とする所の者は則ち和合心の消盡即ち無明煩惱の滅絶、果して如何の問題なり、摩尼珠人識らずと雖も如來藏裡に親く收得しつゝあり、自ら慨む我れ何人

ぞ、三賢十聖も唯一心の染淨のみと知らば我れも亦た別人に非ず、賢聖と言へば嘘だ理想的影像の如く思惟せるは祖門の本領にあらず、遠き影像吾れに於て要不着、噫我れ何人ぞ、但だ未だ實詣なきが故に碌碌たる凡夫の名を得たるのみ、迷と云ひ悟と云ふ、頗る難解の語なるが故に、却て難を加ふるなり、曾だ脊腰髓の上流を斷盡して腦底を淨潔にするの意のみ、染淨の名最も吾人の意を得たり、古哲曰く修證はなきにしも非ず、染汚することを得ずと、大いに吾人の意を得たり、盲修か暗證か、何ぞ早く吾人をして其端的を得せしめざる、楞伽、起信等の經論、水波の譬喩を以て動靜の心性を說く而も未だ人機の上に其部所を指摘せず爲めに甚だ簡明直截の機用を缺く、古今の經論師徒らに名義を談じて白髮途に迷途の鬼類に化す、豈愍笑に堪へんや、任他吾人は精進して一心の染淨を究めざる可からず、

(十三)證契大乘經曰、識體至妙清淨、而爲客塵之所染汚、

謂ゆる識體は即ち覺心なり、謂ゆる客塵は即ち不覺心流入の內因及六塵起滅の外緣なり、而して其流入の內因を斷ずれば外緣自ら忍むは起信論等の說の如し、但だ從來の經論師空しく名義を談じて之を現實に索めず、本論が其名を異にするを明

き其實の餘りに適切簡明なるに驚愕し、或は異道を以て本論を目するは抑も迂と言はざるべけんや、結論に曰く

(十)定慧堅明、能斷流入則煩惱菩提猶如昨夢也耳。

定に、金剛定、首楞嚴定等の名あり、皆な堅確、剛强、猛利を義とす。慧は金剛般若、無分別智等の名あり、皆な眞空、無着、勇猛等の意なり、蓋し覺源即ち腦底に堅剛、猛利の心機力を發起すれば、不覺心即ち脊髓より上流する髓液は腦底に浸入すると能はずして和合心即ち混濁汚染の緣慮心は終に解離消絕するをいふ、而して至妙清淨なる覺心の體性は宛然として其眞面目を顯現す、涅槃經に曰く定慧等學明かに佛性を見ると、又曰く我れ摩訶般若を以て偏く三界の有情を觀るに、一切人法皆究竟す、繫縛者無く、解脫者も無く、主なく依なく煩惱なくして虛空と等し、平等に非ず、不平等に非ず、諸動念を盡して思想心息む、是の如きの法相を大涅槃と名く、眞に此法を見るを解脫と名く、凡夫は知らず、名けて無明と云ふと、即ち是れなり、法華經に曰く如來は實の如く三界の相を知見す、生死若くは退若くは出あると無し、亦た在世及滅度者無し、實に非ず虛に非ず、如に非ず、異に非ず、三界の如く三界を見ずと、諸經論の

說く所概ね皆斯くの如し、文言甚だ巧妙にして簡明ならず、意義甚だ深奧にして適切ならずと雖も、詮し來れば和合の心念を消絕すれば則ち周遍法界至妙清淨の覺心自ら顯現して一切の法は猶ほ昨夢の實なきが如くなる可しとの趣旨に外ならず、世の迂腐なる經論師皆唯だ文言の如く文言を弄し、空く名義を談じて實詣の技倆なきは憐れむ可し、古德曰く此心を證するに遲速あり、法を聞て一念頓に無心を得る者あり、三賢十聖に至つて乃ち無心を得る者あり、長短無心を得て乃ち休す更に修す可く證す可きなしと、然り抑も無心とは何ぞ、起信論之を說いて無念と謂ふ、蓋し同意義ならん、凡そ轉迷開悟の法、開示悟入の道、其說く所其敎ふる所、機に應じ類に隨つて各別なりと雖も、心を鎭め念を除くの要に臻りては其揆皆な一なり、而して其心と云ひ其念と云ふ者は則ち皆和合の心念を指すものにして、其部所に隨ひ、其作用に由つて各其名相を異にするに過ぎず、又祖門に於ける機關轉換、拂拳捧喝等の作略も、唯其學人眞證の實否を驗するの手段に外ならず、然るに未だ實詣なきの徒が猥りに閑手段を弄して得たりと爲すに至つては則ち論ずるに足らず、今夫れ無心と謂ひ、無念と謂ふも、死灰枯木の其れの如きを云ふには非ず、又無意と謂

ひ、無想と謂ふも強ち墻壁瓦礫の其れの如きを云ふには非ず、但だ和合心の消絶を意味するの語なるのみ、應に住する所なくして其心を生ずべしとは佛家の大憲にして即ち非思量の端的なり、然り、其住ずと謂ふは即ち不覺髓液の腦底に滯住して覺源と混淆し、之れが派流して諸妄念を起す、蓋し是れ所住なり、此所住なく而して生ずるの心、此心即ち是れ至妙清淨の覺心なり、謂ゆる求心不可得も亦然り、和合心元來自體あること無し、且く和合して此心を成す、而して若し既に之れが消絶の身心ならば則ち已に得道の人にして遂に求心不可得にあらずや、古哲安心の機要皆此に在り、然るに覺源腦に在り、不覺上流混濁等の顯說なく、唯だ或は云ふ煩惱即菩提と、或は云ふ生死即涅槃と、又云ふ無明實性即佛性、幻化空身即法身と、何ぞ其れ茫洋として而も謎の如くなるや、後世の徒其の言句に昧却せられて自得の分なきは甚だ哀む可し。

佛の說き給ふことを見ずや、集は眞に是れ因なり、更に異因なしと集とは抑も何ぞ、不覺髓液の流動して腦底の覺源に浸入し、混淆集結して無明を熏起すること、恰も豆汁の鹽液に和して豆腐と爲り、清水の塵土に合して泥濁と爲るが如し、之を是れ

集とは云ふ、而して此集より流派して種々の苦想を起し、無量の煩惱を現し、三界の相を變幻す、集は眞に是れ因なり更に異因なし而して若し集因滅すれば則ち苦果從て滅す、滅苦の道は實に是れ眞道なり。

要するに清淨純覺の顯現、即ち是れ三賢十聖の境界なり、不覺混濁の心念、即ち是れ六凡四生の分際なり、而して凡聖元來不二、體性畢竟不異、唯だ一心の染淨のみ、若し夫れ佛家の要道ならば、箇の混濁和合の心念を滅斷するに在り、斷の工夫滅の實詣、是れ耳食名義の敎に非ず、精究眞證の人にあらずんば得て談ず可からざる者、此に至つて親切ならば迷悟凡聖豈其れ昨夢の實なきが如くならざるを得んや、空義高論は弄禪客の能事、實驗眞證は本論主の獨得なり、論主偶あり且く去つて含元殿裡宜しく長安に問ふ可し。

身心滅盡了、覺性滿虛空、其月非去來、影光西又東。
一念心明暗、無量劫苦辛、機輪展轉妙、楚庭抱璞人。

第四章　腦脊異性論

一、解剖生理

凡そ生理學は有機體即ち動植物が生活する所以の道理を究明するに在り、而して其區域は至つて廣く、其種類は甚だ夥多なり、さあれ今茲に論述せんとする所は他なし、萬物の靈長たる吾人人類に就ての生理を究明し、之れに由て本論の目的たる心性を知り、以て吾人が迷悟の分際を事實に究めんとするにあり、有機體は凡て複雜の構造を有す、就中最も複雜なるは動物にして此動物中更に極めて高等の發達をなせる者は則ち人間なり、而して此人間たるや、謂ゆる萬物の靈長なれば其身心も亦從て微妙なる機關を備ふ、方今學術の進歩は駸々たるも猶未だ穿鑿し能はざる者甚だ夥し、然れども他の學術に比して第一位の精究を遂げ得たる者は則ち醫學にして其醫學の基礎たる者は則ち解剖生理學なり。

世の解剖生理學、其審理の精は甚だ精なりと雖も、其活命の要粹たる心神を言ふに至つて甚大なる誤謬あるを奈何せん、而して其誤謬の由つて起る所を省察するに

皆な何れも動物の試驗に依て其現狀を推定し、又人間の死屍を解剖して只其心識流行の跡を推究し、以て謂ゆる實驗の定說と爲すにより、抑も人間微妙の作用たる精神は其淵源何れの處に存するや、古來學者の研究に依て大腦に在ることは疑ふ可くもあらず、さりながら其本性の果して奈何なるかの問案に至つては未だ人智を以て測知する能はざる者と爲すが如し、或は例の唯物論を以て猥りに精神の存在を否定せんとする者あり、要するに心性其物に就ては、世の醫學者未だ眞實の確說を持せず、哲學上の推論も亦空漠にして未だ全く其津涯を得ず、一粟を滄溟に求め、亡羊を岐途に逐ひつゝあり。

原坦山老師は斯學の爲めに研磨五十年間の精力を耗費し、實驗精覈、以て毫釐の疑惑なきに及んで之を世に公布せる者は即ち腦脊異性論是れなり、而して前章既に詳述せる所の心識論は之れが結果に出でたる者にして、本論は其前身たり、故に本論の咀嚼が充分ならざれば、夫の心識論の意義を得る能はず、茲に一言を要するは本論は明治二年師が五十一齡の撰に係り、腦脊異體論と稱せり、其後帝國學士院等に於て專ら之を講演し、普く十方の碩學大家に質す所あり、而して未た之れが可否

の答案を得ざりしも、師が獨得の本論は漸く學者の注目を促がしたりしが、師自ら惟ふ所あり明治二十年に遠んで異體の體の字に替ふるに性の字を以てし、爾來異性と唱ひたるは甚だ深意を含む、さあれ從來實驗上の實體に於ては固より毫も替はることなく、但た世の本論に對し其意義を誤錯することなからんことを期したるに過ぎず、然り、異性論其れ果して何の消息をか傳ふる、今試に叙せん。

解剖生理固より單一ならず、第一有機體と無機體との殊別、第二物質論、第三物力論、第四人體の構造、第五細胞說、第六組織論、曰く骨系統、曰く靭帶及關節、曰く筋肉系統曰く皮膚系統、曰く內臟諸器、血脈、呼吸、體溫、是等總ての問案は生理學必須の條件なりと雖も、本論の要題は精神及諸神經の體性、幷びに生活機能、此二大問題を精究するに在り、其他の諸問案は必ずしも今の所要にあらず。

偖て人間微妙の作用たる精神即ち心識の靈體、之れが身體の上に顯現する淵源は吾人の前腦部に在ること勿論なれども、生活營養の機能即ち肉體運化の根元が、後腦及脊腰に在りて心神と生力、此二者各其性格を異にするの眞理實驗は、世の學者未だ之を精究するに至らず、二者を混說して各其體性を誤りつゝあり、今之れが大

要を一瞥するに、精神の淵源は腦に在りとし其諸神經に依り意思の運爲作用を論するは則ち可也、而して脊髓を說くに、同じく神經の名稱を以てし、知覺作用亦た脊髓に在ることを言ふは甚だ否也、思ふに脊髓に於ける所謂神經、所謂知覺なる者は、精神と自ら別種なりと云ふに在るが如きも、其實は精神と知覺神經との別を明確にせず、殆んど同一の作用を說き、其甚だしきに至つては脊髓を以て腦餘支末と爲し、或は同性同用と爲す、泰西百般實驗の學、殊に第一位の發達精緻を遂げたりと云へる生理に於て此甚だしき錯謬あるは、蓋し心神と生力との作用稍異なる所あるを知るが如しと雖も、其未だ腦脊の性用確乎として別異なるの理を知らざるに由る、以下條を次で之れが然る所以を辯明せん。

二、腦氣筋

腦は頭蓋腔內に在りて其狀恰も豆腐の如し、其質は灰白質を外表とし、白質を中心とす、而して四位に區劃せられ、大腦、中腦、前腦、後腦と分たれ、其前腦に屬する者は大腦及脁胝體是れなり、其後腦に屬する者は小腦及延髓是れなり、前後兩者の中間を

中腦と謂ひ是れ亦前腦に攝す、而して前腦は實に是れ心神の中樞器官なり、而して神經は此中樞と身體各部との聯絡を保ち、其中樞よりの命令を各部に傳達し、復た各部よりの報告を中樞に送進す可き道路機關となる、而して其中樞より命令を各部に傳ふるを遠心作用と云ひ、各部より報告を中樞に送るを求心作用と云ふ、此兩作用の機關に名けて遠心神經、求心神經と呼ぶ、神經の名敢て不可なるに非ず、されど心神は固より形質の見る可き無きが故に、電氣、心氣等の名に因みて寧ろ氣筋と譯するの甚だ穩健なるを覺ゆ、乃ち本論は之を腦氣筋と命名せり、而して人機に於ける心神は其淵源を腦の前髓に發現し、其支流九對となり更に分派して全軀に彌蔓し、身體各部の諸器官に涉る、是れ謂ゆる腦氣筋なり、而して分派無量其細微なる者に至つては、解剖の得て能く知る可きに非ず、而して身體各部の諸器官及組織、悉く其支配を受けざるは無く、其細微なる者或は脊髓機關の內外をも通じて其作用を現はすが故に一瞥之を觀察すれば、其作用は其部其物の固有せる作用の如く思惟せらるゝは無理ならざれども、其實は皆是れ心源即ち腦の中樞より流通する腦氣筋其物の作用にして知覺分辨識力の苟も心性ある者は、悉く心神の起動に基く

者なることを了知す可し。

人は一小天地にして其機用は一の國家に相似せり、最近の政治學は國家も亦た一種の有機體に屬すと云ふに至れるもの其故なきに非ず、腦は恰も國家の內閣即ち中央政府なれば身體萬機の發動する所にして、其氣筋は各府縣郡、陸海軍團に通ずる電線の如し、而して腦中に各自宰の部位あるは、恰も中央政府に各官省局課あるが如く、四肢五官は腦の命に應じて活動し、腦認識の裁可を得て感覺を定む、若し腦にして健全ならざれば、各部は其感覺識別を誤り、四肢の進退、五官の活動を缺く、恰も內閣の暗愚にして國家の機關、皆其の正鵠を失ふが如し、例へば一指に刺戟を受くれば、指神警察署忽ち氣筋の電信に依つて外敵の侵入を脊髓の地方廳に報し、地方廳は時を移さず之を腦の中央政府に通ず、政府は視官省に命じて外敵の狀況を視察せしめ、視官は其外敵の竹なるや木なるや將た針なるやを見て之を內閣の心神に復命し、內閣は更に陸海何れかの軍團即ち左右の手に傳命して之を拔除せしむるが如し、而して其命令の總ては氣筋なる電信に依るが故に極めて迅速なり、腦氣筋傳導の速力は、遠心求心共に大凡そ一秒時間に二十五乃至三十メートルとす、

今腦氣の實體を解剖に依て審査すれば其大經の進路は視察し得るとするも、其細微なる者に至つては最高度の檢鏡に依るも、其形質の視線に屬する者なし、元來心氣は形質あることなく、謂ゆる形而上の研究に由る者なれば、之を死屍解剖の形而下の推測に依つて活ける心神の本體を思索せんとするは、恰も電氣の實體を其線針に依つて目擊せんとするに異ならず、故に心神の性用を實際に究明するは、活ける人間が自身に現働しつゝある所の心神の內觀工夫に依つて精究實驗するの一法あるのみ、さあれ此心神の作用は筋肉組織の上に發現しつゝある者なるが故に其發現機關の氣筋に就て究明するを要す、此機關の中樞は即ち腦髓にして身體各部の知覺作用の總ては其末稍機關なり。

要するに身體各部の何れを問はず、苟も知覺分辨識力の作用の發現する所は、悉く是れ腦心源の流派に屬し、此心源の系統に出ることを知る可し、從ひ而して此れ以外復た他に知覺等の作用を有する者あること無きを知る可し、而して心神系統の幾多の細流に亦た幾多の名目を附せる者は細流其重なるものにして、中に就て所謂迷走神經なるものあり、或は心臟部に入る者、或は肺臟胃腑に入る者、食管に入る者

等なり、又腦と直接に連合せざる所謂交感神經なる一種あり、是れ亦腦の流派より分岐せる者、是等は少しく細說の要あるに依り、別に一節として次條に叙述す可し、兎に角知覺分辨識力の作用ある者の總ては腦心神の獨占作用なり、之を詳論するは則ち心理學の一科にして冊を重ぬるにあらざれば盡くすこと能はず、本論の要題は腦心神の特性を一瞥して以下叙せんとする所の脊髓の特性作用と簡別し、腦脊異性の實驗義を究明するに在り、讀者請ふ且く去つて之を脊髓の說明に對照せよ、而して自ら理義の深蘊に接し、自ら實驗の眞諦に逢着せんか、

三、脊髓筋

脊髓其の質は稍〻腦と等しく、灰白質と白質とより成る、但だ其白質を外表とし、灰白質を中心とせるが故に、其構造は表裏內外全く腦と正反對なり、而して指環の如く中央に大なる孔を有せり、謂ゆる椎骨の數重なりて柱狀を爲せる者即ち其孔の重なりて管形に聯絡せる者之れを脊髓管と謂ひ、此管中に貫通し在る灰白色圓柱狀の長繩之を脊髓と謂ふ、此脊髓管の兩側に各一個の小孔を具へ、此兩個の小孔より

三、脊髓筋

三十一對の髓筋を派出し、之れに由つて脊髓釀起の液流を身體に配分す、而して脊髓內容の灰白質は即ち其中樞器官にして其本性は毫も神氣を有せず、其外圍の白質は謂ゆる神經纖維の聚りたる者にして多くの神經細胞を含み、後腦に聯關して全く腦より來るが如くなれども、是等は脊髓其物の眞體には非ずして唯だ其外皮の腦部に連絡して腦性を含有し、腦氣に密係せるに過ぎず、身體各部を分つと雖も元來一身にして同體同生の身心なれば、固より一も單獨孤立の者のある可き筈なく但だ各部天然本性の機能は自ら規劃せられて、毫も亂る可からざる者あることを知らざる可からず、而して後腦に屬する者は即ち小腦及延髓にして、其延髓は小腦と脊髓との中間に位し、腦脊に連通を營みつゝあり、其小腦は延髓の上位に在りて延髓の媒介せる脊髓液の昇流を受取りて腦氣と和合せしめ、心識論の謂ゆる和合識を成生す、されば其和合識の本據は此小腦に在り、然り此和合識問題は本條の主要にあらず、今は專ら脊髓其物の本體本性を究明するに在り。

偖て普通生理學の言ふ所は、脊髓も亦心神作用を有する者とし、謂ゆる脊髓神經なる者を說き、其神經は脊髓より前後二根を以て脊髓管より出て軀幹及四肢內臟等

に分布し、其前根は即ち運動神經にして、其後根は即ち知覺神經なりとなす、是れ大なる錯謬なり、脊髓の本性は身體の營養運化を司宰する者にして腦氣の如く心神作用を有する者に非ず、從て其分派に名くるに神經の稱を以てす可き者に非ず、名は實の賓なり、其名稱正しからざれば其實を誤ること多し、宜しく脊髓筋と稱す可し、決して脊髓神經と名く可からず、然り而して脊髓の淵源は後腦及脊腰に在りて其腰部は恰も樹根の如く、其脊背は本幹の如く、後腦は頂心の如し、而して其流派は頸椎より發する者八對、胸椎より發する者十二對、腰椎より起る者五對、薦骨より出る者五對、尾閭骨より一對、總て三十一對をなす、而して此等は四肢及胸腹より全軀に纏綿羅織して諸質の精粹を集取し、之を以て身體の滋養運化を營む、故に脊髓は針刺の如き小害を受くるも忽ち死を來す、然れば則ち脊髓は唯だ身體の生活を司宰する者にして心神の作用即ち、知覺、分辨、識力を有せず、其或は知覺作用を有するが如く見ゆる者は、脊髓の外圍たる白質が神經纖維より集り、多くの神經細胞を含有せると、又腦氣より來る所の心神流派が全軀に彌蔓し、其微細なる者が脊髓器管の內外に通ずるに由る者にして脊髓自身の本性本體は腦の其れとは全く別異の

者なり、其實驗的立證は次條に叙す可し。

脊髓の運動作用、亦た決して運動神經と云ふ可からず、其運動は即ち反射機能なり反射機能とはゴム球を壁に打ち付けたる時其球の飛び返るは即ち反射作用にして、脊髓の機能も亦然り、身體の一部に刺戟を受くる時、其刺戟が脊髓に達し、灰白質内細胞の媒介に依つて身體の其部に反射運動を起す、此際腦髓は關係せざる故、吾人は知らず識らずの中に其運動を營む、而して筋肉の運動は多く此反射機能に屬す、分泌其他の機能も亦固より反射機能に依つて營まるゝ者なり、此作用に種々の別あり、或は單一の反射あり、或は複雜の者あり、又反射痙攣と稱し其區域廣くして順序なき反射あり、又順序ありて其運動の目的恰も意思より出るが如き者もあり、反射運動に就て彼のプリユーゲル氏は五個の規則を作れり、其第一、反射運動は其刺戟と同側に起る、第二、刺戟强き時は他側にも起る、但し同樣の部分、例へば左が足なれば右も亦足なるが如し、第三、反射運動の勢左右異なる時は其刺戟と同側のもの强し、第四、刺戟更に强き時は反射運動は漸々に上方に進む、第五、終に延髓に到れば全身の運動を起すものとす、此五個の規則は反射機能を究め得て甚だ妙なり、試

に此規則を再視せよ、脊髓の反射機能は固より腦の關係せざる所なるが故に、毫も意思なくして一定の規律の下に自運自動す、然るに其刺戟非常に强き時は反射運動の區域は追々に擴張せられ漸々に上方に進み、終に延髓即ち腦脊聯絡の媒介者に達するに及んで此に始めて腦氣に交渉せらるゝが故に其全身に運動を起す、脊髓にして若し知覺作用を有する者ならば、其刺戟每に全身に運動を起す可き筈なるに事實は如上規則の順序に從ひ、物質的反動の其延髓に到るに及び、腦氣に交渉するに至つて此に始めて全身に運動を起すと云ふもの、以て腦脊の體性全く其別異なることを證するに足る可し。

然り而して反射運動の制止作用は全く意思に在り、されど此制止作用は一定の度ありて、若し其度を超ゆる時は意思の力及ばずして反射運動を起す、此に一の注意す可きことは、常に意思に因りて自由に運動を起し得ざる所の器官の反射機能は、復た意思に因りて制止することは能はざる者なり、例へば陰莖勃起、分娩、瞳孔縮張等皆意思の制止することは能はざる者、而して意思は固より腦に在り、故に若し腦を切り取るか又は頭首を切り落すときは制止作用は全く絶えて容易に反射運動を起

すことを得、例へば腦を取出したる蛙に就き其背部の外皮を摩擦する時は其度毎にギャーギャーと鳴くが如し、人の身體にも斯る反射運動を見る、殊に其睡眠中又は病疾に疲勞したるときの如き、意思の制止作用弛びて或は動搖し、或は知らず識らずにウナルが如き、催眠術に於ける運動作用の如き、大小便排泄の時の如き、睡眠中に漏出することあるが如きは即ち、其例なり、是等皆な腦の制止作用を減し或は弛緩し休廢したる爲め、獨り脊髓の反射機能盛んなるが故なり、要するに脊髓の反射機能は知覺作用に交渉せず、寧ろ意思に背反する運動を爲す者即ち脊髓固有の機能にして腦の關與せざる者なり、然らば則ち脊髓の中樞作用は生力自然の活動、其他は反射機能の運爲にして腦に於ける心神機用の其れとは全く別異の者なり、而して單純なる知覺作用は意思分別計較の作用とは其趣きを異にこそすれ、五官の其れと同樣凡て腦心神の系統に出ること勿論にして全く脊髓機能の關與せざる者なるを知る可し。

叙して茲に至れば、脊髓神經の稱は其當を得ざること勿論なり、脊髓は常に諸質の精粹を集持し、以て髓液を釀起し三十一對の液筋を分布し身體を滋養するの機關

なるが故に、之を脊髓筋又は液筋と呼ぶ可し、若し夫れ反射機能即ち運動作用を起すの故を以て神經の名を得んか、反射機能は脊髓固有の活力即ち生成の作用にして心神の關はらざる所なれば、機能の名既に其實を得たり、何ぞ更に神經の稱を要せん、謂ゆる神經は則ち心神作用を意味す、其名稱正しからざるが故に其實體實性を誤る、若し又世の生理學に於て精神と知覺とは自ら別物ならば、宜しく其別種なる所以を明白にして混淆の誤謬なからんことを期す可きなり、若し又知覺は單一の感覺にして意思識別念想等の作用には非ざるが故に、精神作用に非ずと云はゞ眼耳鼻舌觸等五官作用の其等も亦た精神以外の者とせんや、而も世の生理學は此等五官を以て腦神經の本能と爲す、而して脊髓は別に其中樞を說くに拘らず、其作用の說に於て腦脊異性の區別を泯滅し、之を混視するが如きは、腦脊の其れに於て未だ其精究に達せず、故に謂ゆる神經病、熱病等の病原に暗く、往々人命を誤ることあるなり、豈恐れざる可けんや。

四、交感神經

腦、脊、兩、性の大要を叙し來りて、各其本能を究明したれば、更に歩武を進めて其が異性の實驗を説示し、以つて本論の眞髓を括捉せんとす、吾人の身心作用は則ち心神器官の靈能作用と身體營養の運化作用との二種に外ならず、而して腦髓は即ち心識作用の本源にして脊髓は即ち運化作用の主宰なり、然るに謂ゆる交感神經の一種は脊柱の前兩側に配置し、前顯二者の外に在りて特殊の作用を營むが如く思惟せらるゝ、されど是れ亦全く腦氣より來れる支別の神經に外ならず、蔓延對神經等の支梢が頸、胸、腹の諸部に於て互に相聚結し、小節を成す者之を神經叢と云ひ、其錯綜して網狀を成す者之を神經叢と云ふ、此れより更に幾多の神經を分ち、胸腹の諸臟、諸器内外筋膜等の諸部に彌蔓して別域を爲す者、是れ謂ゆる迷走神經なり、而して腦髓は實に諸神經の根本なるが故に、身體諸部の知覺、五官の機用等一も之れに交感せざる者なし、而して脊髓の機能は知覺に關係せず、意思に背反せる運動を營む者なり、而して交感神經は直接には腦及脊髓に連合せず、其中樞は胸部に在りて不

隨意筋に動力を與ふる者なり、其腦及脊髓に直接の連合なきは腦氣筋の眼根に入る者の餘派が胸部の筋肉に集叢し、下りて小腹陰器等に至り精水情慾等を醸起するなり。

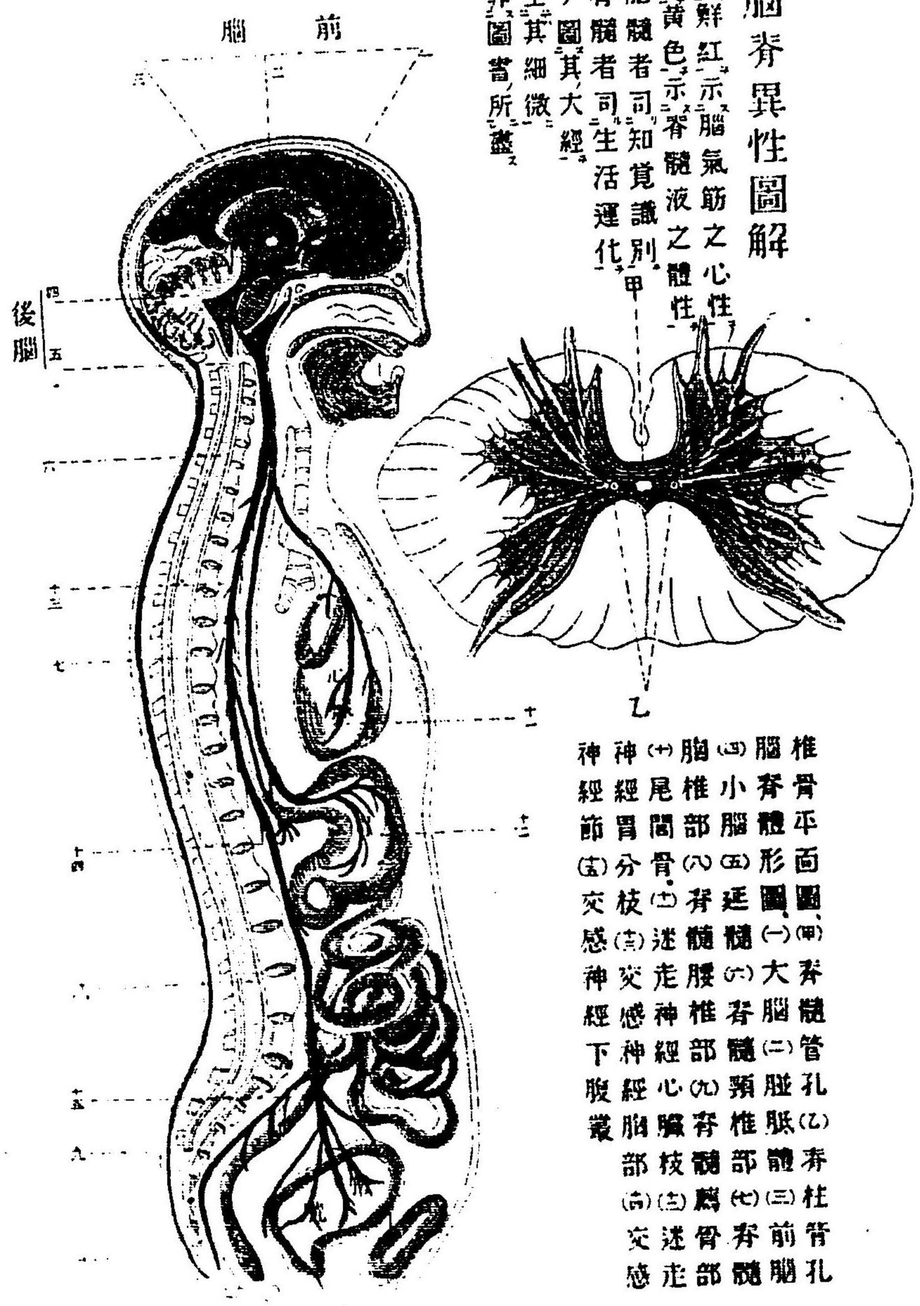
要するに交感神經は一小中樞の働きを爲す、腦は恰も中央政府の如くなれば、此神經節は恰も郡市役所の如く或る權限内に於て其政務を處理する者なり、然れども其根本的命令は全く腦の中央元府より來る者にして、詮する所は腦氣筋の系統下に屬するなり。

更に一言を要するは小腦なり、腦髓は其主塊の後部に於て一小片を分つ、此小片を名けて小腦と謂ふ、即ち後腦の一部なり、此小腦は延髓の媒介に依りて脊髓孔を下る所の長繩に連り、而して脊髓より上りて浸入し來る所の脊髓液を腦に輸送する者は即ち此小腦にして謂ゆる腦項接續の筋結なり、故に前腦は心神の淵源、後腦の小腦は則ち和合識の元府、而して和合識の説示は前の心識論之を詳叙して餘蘊なければ、讀者の既に了知する所ならん、今は腦脊の本性と其屬性とを究明して、茲に彌〻腦脊異性の實驗談に入るの前提と爲す、此實驗談は是れ本論の眞諦なり。

如上の說叙之を要約すれば腦脊二性の辨明に外ならず、さわれ諸般の關係は頗る複雜の論議を要したり、今之を視官に附せんとして圖解を製す、看者試に之を前述に對照して腦脊異性の大經を辨し、而して後ち徐ろに行いて本論主の文言に參せよ、而して後ち虛心に本論の妙諦に學び、而して後ち靜かに自ら實驗實證す可し。

五、腦脊異性の實驗

涅槃經序品曰く、頭爲殿堂、心王處中と、故坦山師曾て自家獨得の心識論を演ぶるに、佛敎中未だ心神腦に在るの顯說を得ず、故に佛頂金剛頂の髻珠額珠等の說を以て心識腦に在るの密意を暗示したる者ならんとの推測を爲せり、然るに偶ま此明文あることを發見し、且つ泰西實驗の學說亦皆な精神腦に在るの定論を見聞し、彌、以て吾が實驗の誤謬なく臆斷にあらざることを確信し、爾來四十餘年間實查實證、以て自身に之を眞究精覈し、毫釐の疑滯なきに至りて之を世の識者に公布したる者は即ち本論なり、然り而して中古以來の佛徒、心王は肉團蓮華心臟の中に在りと云ひ、又心をむねと訓する等皆支那已來の傳襲に固執して未だ佛說の眞諦に達せず、



泰西の理學は專ら實驗を旨とし、能く心王居處の殿堂を覗觀することを得たり、但だ惜い哉論主の謂ゆる三心の實體を知ると能はざるは畢竟活ける人間の內觀力に實詣なく、未だ腦脊異性の眞理に暗く、唯た解剖皮相の觀察を以てしたるに由らずんばあらず、今論主の實驗に就て其異性の立證を叙述せん、

或は問ふ、腦は即ち人の心神なるか、曰く腦は人の心神に非ず、乃ち心神所現の器なり、以て其思慮行爲を顯はすのみ、初生小孩腦無きは則ち死す、腦少き者は痴なり、四肢五官の知覺、分辨識力の作用、能く古今を記し萬事に應ずる者は悉く是れ腦の主權に歸す、或は問ふ、腦は頭顱の中に在り何ぞ能く渾身に運用あらん、曰く腦は至高に在りて一身の主と爲る、但だ其氣筋分派して繩の如く線の如く絲の如き者、之れが遍身に纏綿羅織し、五官百體皮肉筋骨臟腑內外、處として到らざる無し、以て渾體の運用苟も心氣の含む所、悉く是れ腦の司宰に屬することを知る可し、然り而して心神の性たる至妙清淨にして明銳の如く止水の如く、漠來れば漠現じ、胡來れば胡現ず、而して機氣俊敏、識別裁理、毫釐を過またず、然るに其依所の機たる白質純正の腦髓が一朝、外敵即ち脊髓不覺性の醸液の浸入を受け、溷濁粘染の惡體と化し去る

に於て、至妙清淨の心性は遂に妄識苦惱の惑性と變じ來るなり。

或は問ふ、脊髓の反射機能も亦一種の知覺作用にはあらずや、曰く豈焉ぞ其れ然らんや、脊髓は全く知覺作用を有せず、乃ち身體の生養滋殖を司宰するの機なり、以て其生活運化を遂ぐるのみ、故に脊髓若し針刺の如き細微の傷害を受くるも忽ち死を免れず、其が反射機能の作用は生力自然の運動にして常に心神意識の反對に出で、意思制止の作用僅かに弛緩すれば獨り自ら其運動を擅まにする者なり、或は問ふ、凡そ生物の生活を遂ぐる者は必ず多少の知覺作用を有す可し、苟も有機體の其れならば動植皆心氣あらん、覺不覺は唯だ其多少の程度論にあらずや、曰く有機と無機との區別は決して心神の有無に關せず、但だ有機體は所謂類化作用を有すれども無機體には此作用無し、然り類化作用是れ有機體の特性のみ、而して植物亦多少の心氣ありとするも、其心氣を含むの故を以て生力と心神とは同性同用なりと爲す可からず、又同一視す可きに非ず、動植物にして苟も心神所現の機質即ち腦性組織の細胞纖維を含有する者は則ち或は多少の心氣を含有す可きも、其は矢張り心神の屬性にして脊髓性の其れにあらず、凡そ心神は動物體中に顯現して識別を

性とし、植物性の生力とは自ら種を異にす、故に生力盛んにして心神なき者は草木を始めとし、或は動物の一種にして彼の剝列編の如きは腦髓なく心神なく、唯た生力のみありて長育活動す、人間も亦癇卒厥睡痺の類に於ては辨識なくして生活し、手脚の頑麻不遂せる局部も、知覺感動なくして保生し、齒髮爪骨靱帶等は辨識觸覺なしと雖も長生して形質を保全するにあらずや、以て心神と生力とは自ら其性質を異にし決して混視す可からざるの理を解す可し。

之を要約すれば脊髓の作用は總て身體の生養運化を司宰し、腦氣の性能は總て知覺識力の統監にして腦脊二者の本性は全く別異の者なりと云ふに歸結す、然れども之れを實際に辨識するは死屍解剖の憶測又は單一皮相なる動物の試驗を以て成効すべきにあらず、活ける人間が內觀の定力に由つて腦脊交渉の接路を斷絕し、遍身の妄識即ち和合心を除盡したる結果に觀るにあらざれば明瞭なり難し、本論主坦山翁、觀察研究數十年、之を斷絕除盡して餘りなきに至る、而して毫も生養を妨ぐること無きのみならず、躰軀益々肥壯にして健康無恙、識力彌、明敏を加へて心機活達、牛飲斗酒を浴びて齣々又便々、七十の老眼鏡器を假らずして細微を分く、意氣

俊敏、閑吟秋野に歩し、冷笑春筵に坐す、恰も長空に游泳するが如し、而して末後の一段、些の病徴を見ずして衆醫を愕かしめ、最後の一句謂ゆる拙僧即刻臨終敢報の自裁は能く平生の持説を立證したるものと謂ふ可し、世の身心以外漫りに高遠を談じて心意識智の依所をも知らざる盲修暗證の禪客、荒誕無稽徒らに空理を論じて正念眞覺の本據をも辨せざる耳食名義の敎徒が、實際妙樂の道を蔽塞し、大覺至聖をして兇主妄魁と爲らしむる者は、如上の眞理に實詣なきに由る、豈猛省せざらんや、今左に本論の全編を拈出す、靜坐精究其眞諦に參じて實詣する所あれ、論に曰く

我佛法ノ敎理ニ依テ人體身心ニ於テ一大事件ヲ發明セリ、尙敢テ自ヲ是トセズ以テ普ク十方ノ碩學大德ニ問質告知セント欲ス、夫レ我佛家ノ說、心識三種ノ別アリ、一ハ靈覺淨智ノ眞心、二ハ集造執持ノ心體、三ハ念想思量ノ情識也、此理ニ依テ觀察研究數十年其實體ヲ發明セリ、是ニ於テ醫家偏行ノ書ヲ閱スルニ一ノ大錯アリ、所謂頭腦ヲ以テ心識神魂ノ本原ト爲スハ確論ト謂フ可シ、脊髓ヲ以テ腦ト同性同用ト爲スハ非也、蓋シ頭腦ハ靈覺心識ノ本原ニシテ九對ノ筋ヲ起シ聞見覺知應動記識ノ妙用ヲ具フ、脊髓ハ集造執持ノ心體ニシテ覺知ヲ具セズ、三十

一對ノ筋液ヲ醪起シ全身ヲ生養補益ス、此二種ノ筋全身ヲ羅織スルガ故ニ分辨シ難キノミ、且ツ腦ヨリ起ル所ノ九對ノ筋ハ脊髓液腦中ニ流入シ、腦氣ニ和合シテ起ス所ナルガ故ニ、佛家ニ此ヲ和合識ト名ク、此心識通身ニ偏行スルガ故ニ、庸人ノ身體ニ純覺淨智ナシ、故ニ佛家ニ此ヲ觀察學斷シテ念想思量ノ心識ヲ滅盡スル時ハ純覺眞心ノ體顯現ス、其學斷ノ法ハ佛家ノ專務ナレバ之ヲ略ス、今唯和合心ノ心體ヨリ起ル所ノ病原ヲ論ジテ確證トス。

熱病、瘧疾、頭痛、勞瘵、癲、痲、脚氣、

夫レ腦中ニ流入スル所ノ脊髓液腦氣ト和合シテ諸部ニ流行シ、其廢液身外ニ泄除シテ滯碍ナキハ健康無恙ノ身體トス、若シ通身ニ滯碍スル者一時ニ發動スレバ熱病ト爲リ、其勢稍々弱ナレバ瘧、疾ト爲リ、腦中ニ滯碍スレバ頭痛ヲ起シ、胸腹ニ滯結スレバ癲痲ト爲リ、肺中ニ滯塞スレバ勞瘵ト爲リ、脚部ニ滯腫スレバ脚氣ト名ク、是レ皆同因ニシテ其所部ニ隨テ異相ヲ現スル者也。

大凡ソ西洋人體ノ說、二千年來解剖究理ノ實驗ヲ以テ立スル所、予唯佛敎內觀ノ說ニ依テ之ヲ破セント欲セバ恐クハ人信シ難タカラン、故ニ予又實驗親證數件

ヲ擧テ効據トス。

予初メ定力ニ由テ腹部ノ心識ヲ斷スル時、頭面胸腹心識ノ部ハ暴漲溢滿ヲ覺エ、胸部ノ心識ヲ斷スル時、胸腹ノ部ハ空淨ニシテ頭面ノ部ハ暴漲シ、腦部ノ心識ヲ斷スル時、頭面胸腹ノ部ハ皆空淨ニシテ後腦及脊髓液流行ノ部ハ暴漲ヲ覺ユ是レ一證也。

又腦項接續ノ路ヲ斷ズル時、腦胸腹ノ部ハ念想思量皆空淨ス、若シ脊髓ハ腦ノ同體支末ナラバ、九對ノ部ハ皆暴漲スベシ、今之レニ反ス是レ二證也。

且夫レ腦項ノ接續ヲ斷ズトハ、精妙如實ノ觀智ト勇猛剛强ノ定力トニ由テ、項脊ヨリ腦髓ニ蔓延スルノ筋、脫然トシテ拔出スル也、而ルニ脊腰ハ毫釐モ動搖セズ但タ腦ニ輸送スル所ノ脊髓液轉シテ別處ニ流行スルノミ、是レ即チ執持ノ心體ハ脊腰ヲ根元トシ、腦ハ其支末ナルコト顯然タリ、然レドモ項脊ヨリ起リテ腦中ニ蔓延スルノ筋ハ一條二條ニ非ス、故ニ此ヲ拔出スルハ一大難事トス、善師ニ逢ハザレバ種々ノ心病ヲ發スルコト多シ、若シ脊髓ハ腦ノ支末ナラバ其接路ヲ斷セバ三十一對ノ部枯渴スベシ、而ルニ其接路斷ズル時、脊髓液流行ノ部ハ皆煩悶

ヲ覺エ、後却テ滋蔓肥壯ヲ加フ是レ三證也。

大凡ソ佛家心識ノ法義、至妙至精而シテ其部位ヲ詳說セザルハ一ノ缺典ト謂フ可シ、西洋ノ理學內外皆實驗ニ出ツ而シテ心識ノ一事ニ於テ其本末ヲ誤ル、豈各一得一失アリト謂ハザルヲ得ンヤ。

以上は是れ其全提なり、渾編の理義、簡明直截、些の粉飾を施さず、以て參す可く、以て究む可し、焉ぞ復た加ふるを要せんや、今敢て蛇足を畫かんと欲す、詞藻愈繁くして眞義益遠きに隔つの虞れなきに非ず、さあれ一たび論主に就て親參實修を經たる者にあらずんば其眞歸を得るに難からんか、著者僅かに本師の鞭影に逢ふ、而して未だ全く痛痕身に徹するに至らずと雖も、初心の者の爲めに聊か婆說を試むるも亦た師の爲めに涓滴の報謝たらずんばあらず。

靈覺淨智の眞心とは即ち腦の殿堂に處する所の心王是れなり、集造執持の心體とは即ち脊髓不覺の釀液にて、之れが諸質の精粹を聚取し、身體を造起し、又執持して壞爛に歸せざらしむる者、西醫の所謂生力なる者是れなり、念想思量の情識とは即ち心意識又は妄心煩惱識等の名ありて、前顯二心の和合より成る者にして、細には

無明と稱す即ち腦脊交渉して混濁枯染、無明を薫起す、所謂無明とは暗昏痴疑の迷相なり、此心固より自體無きを以て斷盡することを得、其斷盡とは和合を解除して各其本性に歸復せしむるをいふ、乃ち定力に由て腹部の心識を斷すと云ふ、凡そ斷とは知覺眞心の本體を斷するには非ず、所謂和合識の身體に流行する者を斷するの意なり、涅槃經の所謂先づ定を以て動き、後に智を以て拔く者是れ謂ゆる無明滅するが故に動相即ち滅す、心體滅に非ずと是れなり、定力とは佛法の惑障を斷ずる方法に名く、項脊より腦髓に蔓延するの筋脱然として拔出すとは起信論に一念相應の慧を以て頓に無明根を拔くと謂ふ者是れなり、又腦に輸送する所の脊髓液轉して別處に流行すとは定力を以て腦に浸入する所の脊髓液を拒絶すれば、其腦に浸染して和合識を成す可き脊髓液は自己固有の機能たる身體生養の本務を營む可く、腦氣以外の身處に轉流して筋肉滋殖の作用を遂ぐ可しとの意義に外ならず而して若し脊髓は腦の支末ならば其接路を斷せば卅一對の部枯渇す可しとは、世の生理學に於て脊髓を混視し、脊髓も亦腦氣と同性同用の如く知覺作用のある者となし、脊髓其本源は腦より來るが如く論ずるを以て、若し脊髓が腦より出づる所

の支末ならば其腦脊交渉の接路を斷絶せば、脊髓其れ自身の梢派たる三十一對の部所は皆其中樞即ち源據を失して忽ち枯死し、身體の生養頓に遏む可きなり、然るに事實は之れに反して營養運化の作用は却て其本務に活動を現はすの實際に徵せば、腦脊の兩性は全く別異にして但だ且く混淆和合の交會を爲し、妄識無明の一子を產出せるに過ぎずと云ふに在り、而して古來の佛徒は强ち高遠を談じ、吾人身心の上に其部位を詳說せざるが故に修證に錯謬多く、泰西の理學內外皆實驗に出づと雖も、心識の一事に於て其本末を誤り、腦脊の異性即ち覺不覺の實體眞性を知らざるは惜む可し、和合妄識は吾人が無始刼來生死の本にして初生の當時より皆此和合識に由つて運爲しつゝありと雖も、一たび瞿曇の開發に値ふて之を學斷するの妙術を知り、法の如く修習せば此和合識は元來自體無きが故に、終に之を斷盡して眞淨界の聖域に達することを得べし、佛法元來空理に非ず、さるを所謂其高きこと大學に過ぎ而して實なし等の譏謗を招くものは實に是れ學佛徒の罪過なり、本論主之れが謗罪を償はんとして萬死を顧みざる者向來の徒豈猛省一番せざらや。

ん論主曾て醫學を兼修す、故に其病原を論ずるや、內觀法と相俟つて亦甚だ適切簡明なり、而して論中の病名を擧ぐるが如きは全く通俗解し易きを旨とし且つ唯だ其大綱を取つて其他の類性を省略したるなり、而して是等の詳說は次章の惑病同體論に於て究明するの便なるを知る、宜しく行きて斯教に參す可し。

第五章　惑病同體論

一、惑體

生也幻幻、死也幻幻、カセギても食ひ、カセガでも食ふ、空空寂寂の夢の世の中、迷ひもなく、悟りもなし、さるを强て迷はざらんと分別し、敢て悟らんと焦心す、抑も是れ惑相なり、生れて五尺の形骸、死して一片の雲煙、厭はずとも死し、欣ばずとも生る、生死元來思案の外なり、さるを煩悶厭ふて死し、執愛欣びて生る、蓋し是れ惑性なり、宇宙は廣く萬物は夥し、而して吾人も亦一小天地なり、此一小天地詮じ來れば色心の二法に外ならず、五蘊皆空なりと聞けるも、色蘊現に一身を持し、一心の四蘊依然として有り、即ち是れ惑體なり、然り而して色蘊不調此れを病患と謂ひ、心蘊和合此れを惑障と謂ふ、今夫れ惑の體性を究めんと欲す、且く左の條文に看よ。

般若心經に曰く、五蘊皆空なりと照見すれば一切の苦厄を度すと、肉身は即ち色の一蘊にして、惑心は即ち受想行識の四蘊なり、此五蘊元來空なりと徹證すれば、法身般若の體性に契ふ、抑も色蘊とは吾人の肉體を始め、天地萬物凡そ形象あり色相あ

る物は皆此色蘊に攝す、乃ち蘊は集持の義なり、著者は前の心識論に於て物象界の起原を論明せり、其物象は即ち此色蘊なり、色蘊元來宇宙間の一大勢力の波動に於ける假相に過ぎず、引き寄せて結べば芝の巷なり、解くれば元の野原なりけり、之を心經には色即是空と云ふ、此理を照見すれば萬法は各法位に住して世間の相は常住なり、之を心經には空即是色と云ふ、然るに此空間の假相即ち大勢力波動の現象に執着して貪瞋煩惱の心象と化し來る者之を惑體と謂ふ、此惑體は即ち色蘊を離れず、即ち物象の上に顯現する所の心象なり。

其心象の第一を受蘊と謂ふ、受は納領を義とし、物を受け納るをいふ、眼耳鼻舌觸の五根は、物象の總てを受納す、而して其受領する所の物上に於て取捨を分別し、其取捨の上に苦樂顚倒の作用を起すもの之を第二の想蘊と謂ふ、想は思惟を義とし、即ち彼れを思ひ、此れを惟ふて已まず、爰に迷惑を生して終に妄想となる、妄は虛妄にして實無き者、有るに似て心象に浮ぶ、吾人の心中に於ける日々夜々の妄想即ち是れなり、蓋は即ち幻となりて貪瞋癡慢に煩悶し、夜は即ち夢となりて執愛憂悲に惱す、無始久遠の生死、千百億の世界、皆此妄想より起る、而して妄想元來實にあらざ

るが故に、時々刻々暫くも常態なし、刹那に忽生し刹那に滅却す、此生滅の心象之を第三の行蘊と謂ふ、行は遷流を義とし、心念の遷り變るを云ふ、諸行は無常にして是れ生死の法なり、圓覺經に曰く雲速なれば月運び、船行けば岸遷ると、心念の生滅は即ち萬法の生滅なり、常住法性の眞體は本より生滅に非ずと雖も、此行蘊の遷流が三界生滅を現ずるなり、天地森羅萬象と見るは此心念の影像に外ならず、金剛經に曰く三世心不可得と、法華經に曰く諸法實相と、是れ表裏の言說のみ、三世心不可得なるが故に諸法實相なり、諸法實相なるが故に三世心不可得なり、一心の本體より之を見れば眞に本來無一物にして一塵を立せず、諸佛も無く、衆生も無し、古今に非ず、天地に非ず、自にあらず、他にあらず、法界平等一相なり、之を心眞如門と云ふ、萬法の實相より之を見れば、天地日月其位を分ち、森羅萬象其品を異にし、花は年々に紅に、柳は歲々綠なり、鶴は長く、鴨は短し、諸佛あり、衆生あり、青黃赤白方圓寬狹あり、法住法位差別あり、之を心生滅門と云ふ、而して此心生滅は即ち行蘊に相當す、然り行蘊是れ那裡よりか起る、楞嚴經に曰く清淨本然、云何忽生山河大地と、忽生之を第四の識蘊と謂ふ、識は則ち受想行の根基にして即ち覺不覺の和合より起る、細には之

を無明と謂ひ、能には之を煩惱と謂ふ、是れ惑體の本源なり、清淨本然の覺心、不覺無明に依るが故に、識の名を得、既に識と云ふ、識は差別を義とし、善惡無記の三性を具ふ、此三性の事は今敢て煩はしく論釋せず、但だ此に注意す可きは、世の禪客にして幾かに此三性を透脫し、意は晴れたる秋の空の如く凉しく、心は虛空に等しくして法界胸の中に在るが如く覺ゆる時、打成一片と云ひ、一色邊と唱へ、大死底の人と叫び、我れは本來の面目を得たり、彼れは本分の田地に到れり、佛に見え、神に接せりと爲し、釋迦來也三十棒、達磨來也洗足了と、盡天盡地に第二人なきの思ひを爲す、如斯なる時を此識蘊といふ、楞嚴經に湛入合湛は識の邊際なりと說く即ち是なり、古德之を釋して內に幽閑を守る處、そこばくの賢聖を埋沒し了ると、宋儒の所謂喜怒愛樂未發の時に於て此氣象を見る、老子の所謂虛極靜篤も亦唯た此中に在り、設令ひ見聞覺知を滅して內に幽閑を守るも猶是れ法塵分別の影事なり、無始劫來生死の本、癡人は呼て本來人と爲す、實に識蘊は生死の本源、惑體の根據なるを知らざるべからず、楞嚴經に曰く陀那は微細の識なり、習氣暴流すと、其習氣とは即ち此識蘊にして、其暴流とは即ち受想行の三蘊なり、之を一心の四蘊と謂ふ、起信論に三細六麁

五意六染と說くも亦此四蘊の詳釋に過きず。

要するに蘊の體之を稱して無明と云ひ、無用の流動之を呼て惑體と云ふ、譬へば湖と江河との如し、湖に在りては湖水と名け、江河に在りては江水、河水と名く、名相異なりと雖も水性は不二、而して所謂無明は則ち一種の粘液體にして其質流注、且つ積結性なるが故に、身處に滯結すれば則ち疾病を發し、心地に積聚すれば則ち惑障を現はす、其靜や隱乎として測り難く、常に頭腦胸臆の際に潛伏し、其動や忽焉として制し難く、遂に妄迷諸惑の相を發す、何を以てか之を知る、或は危難諸苦に遇ひ、或は見愛、疑慢を發し、又は瞋恚、喜豫、驚駭、悲哀の切なるが如き、自ら其心地を察すれば、煩悶惱屈して自在なること能はず、是れ即ち無明の住地なり、而して此無明なる者は不覺の脊髓液が上流して腦氣の覺源に混入和合し、粘潤渾染して釀起する所の者なり、故に一念起滅の地に向ひ、禪定力を以て攝引張弛し、之を放ちて其適く所を視、之を捉へて其窮まる所を察すれば、歷然として其流注積結の狀を知ることを得、然るに經論の總てが無明を以て惑障の本と爲し、暗昏凝疑の迷相を說くに拘らず、未だ曾て其實體を謂ふ者を見ず、唯だ諸妙覺の後を推して無明の斷滅を說く、豈夫

れ慊焉たらずとせんや、獨り坦山老師ありて之を顯明す、傍難を惹起する所以なりと雖も、實驗眞證の結果なれば衆に違ふも亦辯なきを得ず、然り無明の實性既に之を得たり、惑體自ら瞭然たり。

二、病　原

病理を論ずるは醫學の專門なれども從來の醫の所謂病原とは、眞の病原には非ずして、其病の發生を促がす可き病緣たるに過ぎざるを奈何せん、今其れ眞の病原を究めんと欲せば、單に生理學、物理學、化學等、形而下の自然科學をのみ基礎とせず、哲學、心理學等、形而上學にも依據せざるべからず、而して心性實驗より來る本論は、其病原とす可きは全く內觸に在ることを證明するにあり、されど外觸時處亦固より發病の緣たるに相違なし、例へば外科の病に於ける創傷總ての患害、內科の病に於ける中毒、諸性の疾患、諸微菌の寄生、結核菌の侵襲、寒暑の胃戟より起る諸病、此等は皆外觸時處に由て起る所の病症にして心神內觸に關はらざるが如きも、深く其起因を精究すれば、是等の總てが皆內觸に原因するの事實を知り、其外觸は之れが助

緣に外ならざるを知るべし。

抑も人間の身體には自然に疾病を防禦する所の機關を備ふ、血液中には白血球と稱するものありて、其內には血清とて顯微鏡に檢すれば少しく黃色を帶ぶる透明體の物ありて微菌を破壞するの効力を有するものなり、又其固有の血清にて防遏し得ざる時は人造血清を注射して微菌の撲滅を計ることあり、而して血液の循環を司る者は心臟及脈管なれども、之を主裁する者は神經即ち精神なり、故に精神に異狀ある時は血液の循環に障碍を來たすを以て、直ちに食慾食味に關し、又は顏色等に變化を顯はすは吾人の日常實驗して知る所なり、例へば甲の神經が興奮すれば脈管が收縮して其內容が狹少となり、血液の含量が減ずるを以て其部に貧血を呈し、乙の神經が興奮すれば脈管開張して多量の血液を注ぎ、其部に充血を呈す、而して喜怒愛樂羞耻等皆腦に含れる精神の感動して、此感動に際し脈管開張神經を興奮すれば顏面等に多量の血液を注ぎ、以て潮紅を起す、恐怖、悲哀等も同しく腦神經の感動にして脈管收縮神經を興奮するを以て顏面等に貧血を呈し、爲めに蒼白色となるが如し、此貧血充血共に身體に重大の變化を起し、其他一顰一笑苟も心神

の感動あれば必す身體に影響す、而して血液循環の通塞は直ちに身體の變化に關し、此變化の良否は直ちに身體の健不健に係る、而して其根基は專ら心神の感動に在りとせば、心神の作用其物は實に健康の礎因たると同時に、又實に萬病の本原なりと謂はざるを得ず、然り而して之を日常の實驗上に照せば彌以て其眞理なることを發見す可し。

凡そ人の疾病に罹るや、健全無恙の身體が俄かに疾病を釀すには非ず、外觸、時、處の患害も、謂はゆる弱身に祟る役病神にて、營養不良の結果、若しくは憂鬱或は恐怖神經、心氣の怠慢、貪婬、精神の弛緩、惰弱等に基因し、弱身に追込む侵襲に外ならず、天災地變等に由る避く可からざる不慮の損傷は別として、一般に見る創傷總ての原因は全く心神作用の內觸より來るを見る、折骨裂肉等は單なる結果にして、機械的作用に外ならず、之を統計に徵するに、負傷者の多數は橫着、不注意に基く、是れ卽ち精神の弛緩怠慢に原因す、又一般の疾病は惰弱に基くものにして、興奮勉勵は疾病を擊退するに足る、例へば日露戰爭の前半期、明治三十七年開戰當時に於ける我國民の衞生狀態は大いに見る可き好成蹟を擧げ、出征軍人の戰病者同一數なりしは、實

に歐米先進國に對して誇るに足るのみならず、內地に於ける一般國民の衞生狀態も同年は各地の開業醫が、軍醫に徵發せられて醫士の數は非常に減少せしに拘らす、町村醫は却て閑散なりしが如きは、國民一同が眼前に祖國の興廢を控へて互に心氣の興奮を來たしたる結果、精神の緊張力が身體を强健ならしめたるに由る、前述の如く人間の身體には自然に疾病を防禦す可き機關の備はるありて、黴菌の撲滅、創傷の防遏等皆天性作用のある在り、故に心神の作用が常に健全にして疾病の原因となる可き、憂鬱、恐怖、怠慢、惰弱、弛緩、貪婬、煩悶、喜豫等の甚たしき變化なき以上は、自ら健全無恙の狀態にある可きなり、之を人間以外の動物に看よ、彼等は外觸時處の點に於て、人間以上の刺戟を受け、其智識の程度甚だ低きが、故に、疾病防禦の作用に乏しく、殆んと天性の儘に放過し去るも、人間の如く心神狀態の激變なきを以て、平常一般其健康を維持する點に於て、却て人間に勝ること萬々なり。

人の心神作用、千態萬狀なりと雖も、常人に在りては其境遇の如何に拘らず、憂鬱恐怖、怠慢、惰弱、弛緩、貪婬、煩悶、喜豫等の無き者なし、故に十全健康を以て眞の無病とせば常人の身體は悉く病者に屬す可し、其程度の多少は別問題として、既に悉く病者

に屬すとせば弱身に追込む祟神なる外觸時處の侵襲を受くるは亦已むを得ざるなり、要するに心神內觸は實に疾病の本原にして、他の外觸は其原因を誘發す可き病緣に外ならず、然り而して夫の心神の作用が、何故に憂鬱、恐怖其他の變化を爲し、其病原を釀起するかの問題は、本論の主要とする所なり、請ふ條を更めて具さに之を叙せしめよ。

三、惑病不二

惑體叙し去り、病原述へ來りて、兩性の狀態を說示したれば、彌、進んで兩者の關係を論結せざる可からず、茲に一言を要するは、本論は明治二年、論師が五十一歲の撰に係り、惑病同原論と題せり、然るに明治二十年に至り、同原の原を改めて體と爲し、兩來同體論と唱ふ、蓋し前の腦脊異體の體を更めて性と爲したるに同しく、從來實驗上の實體に於ては固より毫も替ることなく、但た世の本論に對し其意義を誤錯することなからんことを期したるに過きず、然り惑病同體不二、果して何の理由をか存す、論に曰く

惑本ハ唯佛氏之ヲ談ズ、病原ハ醫學ノ要門トス、所謂惑本トハ無明也、無明ハ覺不覺和合ノ念想ニシテ種々ノ妄知妄見ヲ爲起スルガ故ニ所知障ト名ケ、種々ノ念想煩惱亂シテ妄智妄業ヲ作爲スルガ故ニ煩惱障ト名ク、此二障ハ千障萬惑ノ根原ナルガ故ニ、無明ヲ惑本ト名クル也、病原トハ身心凝流ノ二體、和平ヲ失スレバ皆之ヲ疾病ト名ク、病學通論ニ云ク、十全健康ヲ以テ眞ノ無病トセバ、今人ノ如キハ悉ク病者ニ屬スベシ、故ニ健康ト疾病トハ較然タル分界ヲ示スヿ能ハズト、予曰ク此說尤モ好シ、大凡ソ身心ハ和合ノ所成ナルガ故ニ、過不及偏固アレバ皆疾病トナス、其過不及甚シカラザルヲ暫ク健康トナス、然モ世ノ所謂健康ハ惑本無明即チ是レ病原ヲ孕胎スルヲ知ラズ、維摩經ニ曰ク、從癡有愛則我病生ト、故ニ惑本ノ體久キヲ積メバ必ズ疾病ヲ發ス、或ハ怠惰放恣、或ハ思念過勞、皆病緣トナリ、想念凝滯シテ癲痲癇癆等ヲ發スルガ如シ、總テ一切ノ疾病、心思情想ニ關係セザル者ナキヲ以テ知ル可シ、又佛氏斷惑修證ノ失誤ヨリ種々ノ疾病ヲ生ズルコトアリ、但タ世人ハ其實體ニ暗ク、惑病同原ヲ知ル能ハズ、抑モ古人ノ說ニ上醫ハ未病ヲ療ズト云フ、稍、佛氏修證ノ理ニ近シ、予故ニ曰ク諸病ノ本原ハ惑體也、諸惑

三、惑病不二

ノ本體ハ無明也、無明ハ即チ和合業識ノ念想也、是故ニ佛氏一念ノ起動ヲ千惑萬病ノ本原トス、此ニ觀察學斷ノ功夫アリ、信解行證ノ階序アリ、三乘五乘ノ分滿アリ、若シ實ニ無心無念ノ境界ニ至ラバ、身心ハ猶ホ泡影ノ起滅スルガ如ク、迷悟修證ハ夢裡ニ水火ヲ渡ルガ如ク、萬法ハ空華ノ開落ニ異ナルナキノミ。

以上は是れ本論の全文なり、直截簡明、些の粉飾を附けず、然れども前來の無明論、心識論、腦脊異性論等に學び得て此に到らば、通讀一過直ちに其意義を了解す可く、復た多言を要せざるべし、聊か解を附して讀者の練習に資する所あらん。

讀者は前の腦脊異性論に於て學び得たる如く、腦中に流入する所の脊髓液が腦氣と和合し、之れが身體の諸部に流行して、其廢液が身外に泄除して滯碍なきは健康無恙の身體とし、若し通身に滯碍する者が一時に發動すれば熱病と爲り、其勢稍、弱なれば瘧疾と爲り、腦中に滯碍すれば頭痛を起し、胸腹に滯結すれば癥瘕と爲り、肺中に滯腫すれば勞瘵と爲り、脚部に滯腫すれば脚氣と名づく、是れ皆同因にして其所部に隨つて異相を現はす者なり、夫の和合の廢液とは即ち脊髓液の上流して腦心源に浸入和合し、其れが粘纏溷濁して惑體を釀起し、之れが腦氣筋に依りて全躯

に流動するが故に、吾人の心神上の總ての作用は、暗昏癡疑の迷相を現はし、從て憂鬱、恐怖、怠慢、貪婬、惰弱、弛緩、煩悶、喜豫等、有らゆる妄惑の感動と爲り、其一顰一笑が悉く身體の變化を起し、之れが萬病の原因となるのみならず、其廢液の身外に泄除する者の顯著なるは、平常に於て鼻涕粘痰と爲り、其久しく體內に滯塞するもの、或は熱病、或は瘧疾、或は頭痛又は勞瘵、癥瘕、脚氣等の性惡なる疾病を發生し、其勢稍、緩弱なる者は、身體各部の機關中に潛伏し、外觸時處の誘介に乘じて忽ち萬病を釀起するなり、凡そ喉肺の粘痰、鼻涕の濃厚、其他の疥癬癤腫の類此等總ての痰膿は皆是れ和合心の廢退釀泄する所のものにして、病理學上或は痰と膿とを區別することあるも、但だ痰は直ちに廢退する者、膿は既に敗化腐酸せるに由るのみ、別種あるにはあらず。

要するに、心神の妄惑は腦脊和合の溷濁に由りて焉起し、萬病の原因は此妄惑の心的作用に由りて釀成するものなり、果して然らば惑病元來同體不二とす、試みに日常の實驗に看よ、瞋恚、喜豫、驚駭、悲哀の切なるに際し、心悸亢進し、胸窩餓かにドキドキとして、妄識流動の狀態、歴然として感知せらるゝにあらずや、又去つて萬國の醫

論に聽け、精神の過勞は肺癆の誘因となる可く、精神の安逸は肺癆の經過を長からしむと云ふに非ずや、我國を始め萬邦に於ける近世の肺癆患者は醫學の最も進歩せる今日に於て彌、其の數を增加し來れるの事實は抑も是れ其基因する所なかる可からず、惟ふに人事百般、日に月に複雜より益、複雜に入り來りて、生存競爭の活劇場裡、人智の進むに從ひて彌、精神の過勞を來たすは勿論、一切の妄惑、有らゆる煩悶、無限の慾求は、時々刻々に人を誘ふて病原を釀造せしめつゝあり、一方に醫學の進歩せると同時に、他力の病原は益、其の釀起を急ぎつゝあり、あはれ文明は妄惑の進捗なるかな、萬病の本原は惑體なり、諸惑の本體は無明なり、無明は即ち和合業識の念想なり、是故に一念の起動は千惑萬病の原因なり、論師自ら之を觀察學斷して餘りなきを得、氣宇俊敏颯爽、身軀肥壯健全、死に際して毫も病兆を見ず、七十四年雙脚天に朝す、從來佛徒の云ふ所、高遠廣大、空しく名義を談じて其の本體に實詣なく、盲修暗證、猥りに拂拳を弄して其の實性に精究なし、故に所謂禪病なる種々の疾病を發し、或は狂氣怪亂の者あるに至る、憐まざる可けんや、今や惑體を實質に拈示して攝引弛張、之を放ちて其適く所を察し、之を捉へて其窮まる所を知る、而して萬病の

本原亦た此惑障にあることを顯明し、身心不二の妙諦を說示せられたり、是に於て斷惑は即ち治病なることを了し、治病は即ち斷惑に在ることを解す可し、然り而して斷惑工夫の一義は最初の無明論に於て、纔かに其端緒を說示したるのみ、爾來心識論以下の諸說に於て心性實驗上の總てを論明したれば、爰には專ら斷惑工夫の要術を詳悉せざる可からず、是れ即ち次章に見る所の老婆新說なり、讀者は去つて愼重に斯說の敎誨に參せざるべからず。

終りに菠みて一言を要するは、本章の前提に於ける五蘊の意義なり、般若心經の所謂五蘊皆空なりと照見すれば一切の苦厄を度すとは、啻だに心經の文言のみならず、一切の經論皆此意義を說く、而して五蘊即ち色受想行識は、總て心識の上に立てられ、其中の受想行識の四蘊は直接に心的作用を說く者なるを以て、敢て疑問とならず、然るに色の一蘊即ち吾人の肉身を始め天地森羅萬象に於ける諸經論の說示に至つては、尙未だ了解し難き者あらん、唯識論の意義に從へば、物象界即ち吾人の肉身を始め天地森羅萬象は皆是れ唯識の所變にして識作用の相分に過ぎずと謂ひ恰も明鏡に向つて自身の影像を見るが如く、識自身の作用が自身の影像を浮べ

て、復た自身が之を見るが如くなりと說く、楞伽、起信等の諸說は、水波の喩を以て一心の相狀を謂ふ、詮じ來れば悉く一心の體相用を語るに外ならず、且く色心の二法を立つるも、其實は一心識の說明のみ、今本論の言ふ所亦た畢竟此等の意義に違ふ所なしと雖も、其取扱ひ振りに於て大に古今の理談と異り、實驗上の事實に於て、物象界の事實は飽までも事實として、直接に物質の儘に說示し、物象の儘に究明し、物的作用は飽までも物的作用として、直接に其物質に依て顯明し、心象と物象とを混泪して兩者の分界を沒失するが如きことを爲さざるなり、否曾だに兩者の分界を顯明するのみならず、自身に之を實行して實果を收め得たるなり、故に著者は前述に於て、之を現象本體並行一元論と釋し、純正唯心說と簡別したるなり。

最初無明論以下本章に逮びて、全編の要義茲に其畢りを告げぬ、次章以下亦本論の要趣なりと雖も、其は學者の修養に關する者、故に前示に學得して之を後示に實詣せば、本論師の三昧に嫡嗣することを得んか、敢て學者の奮勵を望む。

第六章　老婆新說

一、禪定力

三分、光陰二早過、靈臺一點不指磨、貪生逐日區區去、喚不回頭爭奈何、是れ古哲の感慨なり、吾老師五十餘年の學究、工夫做し盡して只難を知る處、一朝豁然として無何に入る、爾來或は閑吟秋野に步し、或は冷笑春筵に坐す、固より黃葉を把るに懶く、何ぞ箭弦を挾むに堪へん、さあれ婆情一片、未だ全く灰ならず、眞淨界裡豈獨り自ら樂まんや、是に於てか、倦を扶け燈を挑けて一稿を草す、之を老婆新說と爲す、其說く所全く親言親語に出づ、學者須く愼重に參す可し、初めに禪定の次第に示し、其が實驗の要を言ふ、乃ち曰く

(一) 夫無明和合之識者、諸大菩薩未能明了、不覺動起之本源者、一切諸佛未顯說之、故學者往往謬解之、且如禪徒、多以旨修暗證當宗旨、予亦曾向胸臆肚裡工夫、其部之心識皆既坐斷、雖稍脫煩惱之麁惑、未能免微細生滅之動念、智障、又聞西洋之理學說、心源在頭腦之中、予乃放下從前工夫、用力腦裡、其始堅確而定力難及、種種工夫稍覺有動、

一、禪定力

增勵心力欲究之流動變幻如捉禾丸如逐影響又胸臆頓起非常之妄識或煩悶或鬱結予謂此必誤工夫又退守胸臆雖然上部覺有淵源屢進屢退遂斷北大本

諸佛未顯の識體、諸菩薩未了の本源、今明かに其說を得たり、旨修暗證を以て宗旨に當つる者、須く精究實詣す可し、凡そ瞋恚、喜豫、驚駭、悲哀の切なるに際し、心悸亢進は即ち胸臆肚裡に潛伏せる所の無明和合の識體なり、故に論師曾て此に向つて定力を用ふ、工夫進むに從ひ其部の心識は皆既に拔除して稍、煩悶の惑を脫すと雖も、未だ微細の妄念を免かるゝことを能はず、依つて從前の工夫を廢し、更に定力を腦底に用ふ、其始めは和合の凝滯堅確にして定力及び難く、種々工夫の結果、漸く動搖を覺ゆ、涅槃經に所謂先づ定を以て動くと即ち是れなり、彌、定力を勵まして之れを拔除せんと欲すれば、流動變幻して恰も水中に瓢子を捉ふるが如く、空間に影響を逐ふが如し、而して先きに空淨せる所の胸臆部は俄かに非常の妄識を起し、或は煩悶し、或は鬱結を感ず、論師自ら思惟すらく、此れ必ず工夫を誤れるにはあらずやと、乃ち退きて更に先の胸臆を守る、然れども其淵源は必ず腦中に在る可きを覺り、一進一退、工夫做し盡して遂に其大本即ち惑源を斷拔することを得たり。

禪定工夫の次第は叙述の如し、而して其禪とは靜慮の義にして靜坐鎭念の工夫なり、又定力とは佛法中に於て惑障を斷ずる方法の名にて、即ち一定の身處に心氣力を勵ますをいふ、此方法此工夫に依り、斷惑拔妄の參修を爲す、之を禪定力と云ふ。

二、觀察智

禪者常に言ふ、諸緣を放捨せよ、萬事を休息せよ、乃至心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めよと、蓋し是れ禪の要術なりと雖も、其實際に至つては、思はじと思ふことのみ思はれるが實際にて、靜坐默然之を久うすれば、妄想自ら遏む可しと思ひの外、却て千慮萬感交々湧發し、此れを押へんとすれば彼れに轉じ、彼れを制せんとすれば更に他を加ふ、心猿飛び移る五慾の枝、意馬馳走す六塵の境、焉ぞ科らんや、三年前の美人の容姿、今に於て此の靜坐默然の檜舞臺に現はれ來らんとは、如何とも度し難く、濟ひ兼ぬる者は凡夫の妄想惑念なり、是に於てか、觀察智の要起る、而して此觀察智は空想を廻らし、空理を尋ぬるの意にあらず、唯た一念起滅の地に向つて、觀察學斷の工夫を凝らすをいふ、涅槃經に所謂先づ定を以て動き、後ち智を以て拔く

と即ち是れなり、從來の盲修暗證は前顯の弊患に陷り易し、或は思はん、妄識とは無形の心的作用なり、然るに之を物質の流動體なりとして、恰も腎の肉體の疾病を治療するが如く言ひ爲し、動くの、拔くのと甚だ奇怪千萬ならずや、是れ全く外道の見解にして佛法に非ずと、此れ所謂盲修暗證なる彼等の空見なり、試みに察一察せよ、彼等の所謂色蘊なる者は、即ち心識所變の者なりと自ら言ふにあらずや、吾人の肉體が既に心識所變の者ならば、其肉體中の流動物も亦た心識所變の者にあらずや、若し果して心識所變の者ならば、妄識惑體は物質的流動體なりと云ふも、矢張り心識作用より顯はれたる物體其物が妄識惑體なりと云ふ意義になるを以て毫も不思議とするに足らず、其思惟の此に及ばずして、盲修暗證を是れ事とし、却て他を外道視するは、畢竟此觀察智に乏しきに由る、心識と云へば唯だ無形の者とのみ考ふ、所變以後に於ける現象界の事實を事實として其儘に取扱ふことを解せざるは、觀察智に於て欠くる所ありと謂はざるを得ず、兎に角從來の已見を脫して實驗的に工夫し見よ、自ら釋然として發明する所あらん、說に曰く

(二)方知從前之動念煩惱皆是不覺和合之識相而非覺心之體性大凡非堅剛猛利之定力不能斷和合之識相而其定力究心源最難若但斷胸臆肚裡之煩惱而不究心源則墮二乘地

工夫做し盡して其本源を斷拔し、五蘊皆空淨の妙境界に到達して回向返照すれば、從前の動念煩惱は皆是れ不覺和合の識相なりしことを了悟し、覺心の體性は如々不動にして明鏡止水の如く、漢來れば漢現はれ、胡來れば胡現はれ、實の如く其實相を照覺して、昏暗癡疑の迷相は既に去つて復た其影像を認めず、恰も昨夢の醒めたるが如くなり、さあれ其の此に到るの工夫は堅剛猛利の定力に由るにあらざれば、和合の妄識を斷盡すること能はず、而して其定力心源を究むるは最も難事なり、若し唯だ胸臆肚裡の麁惑を斷滅するも、心源即ち腦底細微の無明根を拔除するにあらざれば、破然として無何に悟入するの大覺なく、唯だ所謂灰身滅智の二乘地に墮して遁陰忌避の閒道人と化し、獨り纔かに無爲を娛み、依然として鬼窟裡の活計たるを免れず、而して回心向大の菩薩地は未だ夢にだも見ざるとあり、先聖之を稱して聲聞外道と排擯せられたるも、古今の禪客多くは此坑に墮在し、我れは佛に見えたり、彼れは神に接したりと叫び、盡天盡地に第二人なきの思ひを爲す、是等は盲修

暗證、纔かに瞥地の智通を夢みて、入頭の邊境に逍遙しつゝ悟相の幻覺に魔魅せられたる者なり、矧んや半醒半狂の沒分曉漢たるに於てをや、況んや螫駒伏鼠の似而非道人の如きは素より言ふに足らざるをや、されば胸臆肚裡の疑惑先づ空淨して、腦底稍、動かば、百尺竿頭更に一歩を進めて衝天の志氣を擧げ、所謂智を以て其本源を拔くの勇猛精進こそ、實に參禪の要訣なれ。

三、拖泥帶水

兒を憐れんで醜きを忘るゝは、先聖皆然り、落草の風談、黃葉の方便、和光同塵の攝受も、蓋し皆薩埵の行願なり、論師獨り自ら善くせず、敢て婆說紛紜たるものは實に拖泥帶水の度生に出づ、說に曰く

(三)予愍世人之不能信之究之故不厭拖泥帶水婆說紛紜也耳雖然尙有向上事直須問取牛屎馬糞始得。

論師獨得の卓說、實驗心性の確論、曾て凡流の喜ばざる所、世人の信不信の如きは固より論師自身の得失に關せず、三昧に影響する所なしと雖も、實證出世の本懷は濟

度利生の外あらずとせば、論師の一代も亦之れが爲めの施設なり、凡流は知らず、敢て誹謗を試むる者、釋迦、孔、孟、基督の世代亦既に然り、澆季豈凡流の俄かに信ずる所ならんや、さあれ千古不磨の眞理は、因緣時節寂然照著たり、方今世人の實驗を貴び、空想を厭ふに至れるも、蓋し亦因緣純熟の時節なるらし、本著の施設も亦此の時宜に應ずる微舉に外ならず。

尙ほ向上の事に至つては、牛屎馬糞、即ち無念無想の心地に參取し、合元殿裡の長安に問候して始めて得可し、豈啻だに牛屎馬糞に拘せんや、燈籠露柱も亦可也、山門法堂も亦可也、庭前柏樹子も亦可也、麻三斤可也、乾屎橛可也、佛手可なり、驢脚可なり、手に任かせ、拈し來つて不是あること無し、其用不着なるに至つてや、瞬目拗眉用不着、拂拳棒喝用不着、叉手當胸用不着、禮拜用不着、經行用不着、坐作進退一切用不着、復た焉ぞ大乘と說き、小乘と論じ、玄と唱へ、妙と言はんや、向上の事は且く措く、向下の消息奈何が通じ去らん、鉢裡飯、桶裏水、喫茶喫粥、屙屎放尿、鼻齁齁、腹便便、妄塵の纏ふに一任す、復た焉ぞ眞淨界を美まんや、復た焉ぞ三賢十聖あることを知らんや。

第七章　結論

一、禪定の要訣

上來、無明論、心識論、腦脊異性論、惑病同體論、老婆新說の四論一說は、坦山老衲が一代の學究、悉く是れ實驗上の立談なり、而して前賢未發の創見、古今獨步の卓識、詮し來れば從來の理觀空義を排して實驗實詣に依り、唯心的本體に即して物質的現象の事實を實際に攻究せられたるものなり、而して其要は應病與藥の敎化門に在らずして、禪定工夫の接化門に在り、言ひ換ふれば、菩提樹下の根本的實詣にして、成道以後の開道的垂敎にあらず、由來祖門の要道は、敎外別傳と立憲し、不立文字と唱破して、瞎驢一代の敎說も、古聖先賢の玄談も、敢て拘する所にあらず、直截根原、立地見性の活工夫に在り、而して此活工夫は即ち禪定の力に一任し、觀察學斷の智見に由る、古來禪の流弊も亦た一にして足らず、不立文字敎外別傳の下に、或は看話禪、或は默照禪などと唱へ、各、我見の一派を成して、得たり顏なる野狐禪あり、前者は古人の糟粕を嘗めて、其の悟跡に倣ひ之を自身に實現せんと焦せり、後者は眼を蔽ふて殊更

に文學を排し强ひて沈默を守りて古哲に默契せんと努む、蓋し皆盲修暗證の沒工夫なり、古哲の語錄公案を皆見して自究の參照に資すること必ずしも不可なるに非ず、先進の師友に參して實地の推挽を受くるは最も必要なりとす、さあれ先人の語話に泥みて難解の語句を强ひて理會せんと努め、又殊更に耳を掩ひ、眼を閉ちて鎭念を是れ事とし、空しく光陰を度る者、皆是れ盲修の沒工夫にして、未だ禪定の要道に當らず、偶ま幽閑の境に逍遙するが如き者あるも亦是れ暗證の靜慮にして尙ほ是れ法塵分別の影事、識蘊邊際の活計に過ぎず。

若し夫れ禪定の要訣ならば、正身端坐、直ちに一念起滅の地に向つて惑障の本體を根絕するに在り、然り、惑障の本源、無明の體性等の何物なるかは前來の所說に於て既に之を盡し、之れが斷惑の次第も其大要を論述したれば、今は禪定の梗概を敍して、實踐躬行の要訣を說く可し、但だ正身端坐の法式は、先著仙術に於て之を詳述したれば、此には省略す。

定力とは讀て字の如く、心氣力をして一定の部所に在らしめ、此氣力に依つて惑障の流行を拒絕するをいふ、而して其順序は先づ下腹部に定力を込め、其部の空淨す

るに至つて、順次上方に工夫を進め、腦項接續の路を絶ち、其本源たる腦底を空淨するに已む、其術に曰く

神氣をして下に充たしめ、元氣を氣海丹田に收め、心をして脚頭に在らしむ、

氣海丹田とは、即ち下腹のことなり、此處に定力を込めんには、心持にて腰部より兩股に掛けて、神氣力を込むるなり、最初は思ふまゝならねど、漸次慣るゝに從て、神氣は自然に下方に充實す、神氣既に下に充ち來らば、更に進んで元氣を丹田に收むべし、是れも最初は坐して、脊柱骨を直立すれば、下腹は却て釣り上りて力弱くなり、容易に力の入らざるを常とす、されど是れ又漸次工夫すれば、自然に腹力を增し來る可し、但だ注意を要するは、最初より力餘り強く度に過ぐれば、腸を傷け、或は脈道を絶ち、忽ち疾病を釀すことあり、工夫を誤らざる樣、深く留意を要す、寛急其宜きを得るは各自の自得に由る、又心をして脚頭に在らしむるとは、神氣は頭腦を本源とするが故に、暫くも放過せば、神氣は忽ち頭腦に集結して、下方は空虛となるを以て、心をして常に脚頭に在らしむるは、定力を放過せざる要心秘訣と知るべし、

龕、惑、無、明、即ち腹部の惑障を斷するは、坦山式禪定の第一歩なり、世の禪客多くは此

初歩に住して第二歩以上を知らず、其腹便々たるに逮んで、既に得たりと爲すは所謂野狐禪なり、爰に下腹部の惑障既に空淨を知らば、更に進で胸臆部に定力を用ふ、是れ禪定の第二歩なりとす、胸臆部既に空淨す、若し此處に住して得々たらば所謂二乘地に墮して、唯た鬼窟裡の活計のみ、更に奮勵一番して腦項接續の路を斷し、腦中に蔓延する所の根本無明、即ち微細の惑障筋を悉く拔出し盡すに至らば、豁然として無何に悟入するの妙境界に達す、此處に到らば、先に腦中に輸送する所の脊髓液は轉じて別處に流行し、脊髓の本能たる身體の營養は、完全の作用を爲して皮肉壯健となり、和合の妄識は一切空淨して腦底洗ふが如く、至妙淸淨の心性は晃乎として寰宇を照破す可し、是れ之を本來の面目現前すと云ふ、

要するに、無明煩惱即ち惑體妄識は、腦脊和合の流液なるが故に、其流行の部所に定力を込めて之を排除するなり、此に至つて理觀念法は一切不用なり、但だ定力堅剛にして勇猛精進なるを要す、若し定力堅剛なれば敢て鎭念を工夫せずとも、一切の念慮は自然に休息す、而して其斷惑工夫の方法順序は、下腹部の龕より漸次して頭腦の細に到るは、坦山式工夫の要訣なり、斯くの如く脫體露骨に說明し來れば、禪定

斷惑の方法も亦恰も醫の圭刀を執つて筋肉の疾病を治療するが如くなり、是故に從來の禪徒が、唯だ理觀を是れ事とし、唯だ鎮念を是れ修習するより考ふれば、坦山式は除りに、現實的科學的にして容易に信を措き難からんも、實驗眞證の工夫に由りて得たる所の本禪は、實地問題として、自身に之を躬行履踐して始めて得べきなり。

二、自然の結果

坦山式の禪定は、實に前賢未發の創見にして、實驗的眞工夫なり、而して從來の禪徒は旨修晴證、自然に悟入の時を待つ、故に其多くは野狐禪に終り、或は二乘地に墮在する者、滔々たる天下、概ね皆然らざるはなし、或は幽居久しきに亘りて心理上一種の習慣性を造り、磊落不羈無欲脫洒の境界に到達する者ありと雖も、是等の多くは一時心機の鎭靜したるに過ぎざるが故に、若し其境遇を換ふれば、復た忽ち動念して、或は以前に勝る妄迷の甚しき者あるに至る、旨修晴證の弊、到底僞似の悟道たるを免れず、偶ま徹通の人なきに非ずと雖も、此等は唯だ二、三十年、三、五十年、專心坐定

に勗めて已まざる自然の結果、知らず識らずの間に無明惑障の動流を鎭滅し、其本源を涸渴したるに由るのみ。

同性相衝くの原則、脊髓液流動の旺盛は、同髓液と衝撞漲溢して汎濫を起し、異性相引くの原則、腦氣の銳敏は益〻脊髓液上流和合の緣となる、故に神氣をして下方に充たしむれば、腦氣は自然に散解すると同時に、脊髓液の上流は自然と緩漫となり、又觀察腦底を壓せば、情慾の如き煩惱は全く起らず、無明の流行は自然に休息す、古聖に學者は子孫を絕つといふ、蓋し此等の意味ならん、故に禪定に由りて無明根を拔き、悟性を獲得するは靜慮坐斷の力なり、聞法に由りて迷情を脫し、覺性を證得するは觀察學斷の力なり、兩者其一を缺く時は眞箇の承當は得て望むべからず。

要するに、從來の禪徒は惑障其物に由來する所を知らずして、或は坐定、或は聞法の方に一任し、省悟を自然の結果に待つ、而して千百人中の三五は知らず識らずの間に、宗當し得る者あり、坦山式の禪定は惑障其物の實體を活捉して、其本據に突貫し、其絕滅に由りて眞淨界に投入するなり、故に勇猛精進工夫を怠らざれば、百人が百人ながら、千人が千人ながら、其工夫を用ひたる部所は、必ず其功果を實にすること

を得、兩者其結果に於ては別異なしと雖も、旨修暗證は錯謬多く且つ漠然として、往往奴を認めて郎と爲すの弊患を免れず、之に反して精究實證は直ちに本據を捉へ、實地に驗して旨認を許さゞるが故に、確乎として明白なり、永平古佛曰く、身心を決擇するに自ら兩般あり、參師聞法と工夫坐禪となり、聞法は心識を遊化し、坐禪は行證を左右にす、是を以て佛法は一を捨てゝ承當す可からずと、趙州古佛曰く、三十年にして若し會せずんば、老僧が頭を截る將ち去れと、坦山老師曰く、行住坐臥進止動靜に拘らず、祖だ一念起滅の地に向つて攝引張弛、之を放ちて其適く所を視、之を捉へて其窮まる所を察し、其源を斷ずるに及んで覺性常住、應用無邊、即ち是れ無明の脱、之を正覺と謂ひ、之を大悟と稱すと、古聖先賢、異中同しき所あり、千句萬章、空裡の風の如し、獨り坦山老師ありて明白確實、脱體露顯せしむ、學者實詣して烏の雌雄を辨すべし。

三、迷悟の分際

大悟一返、小悟數知れず、相續や大難事、醒醒の水、睡後の茶、快は則ち快なりと雖ども、

未だ以て睡綠を絶つに足らず、未だ以て禁酒の効に及ばず、世を憂しと山に入る人、山ながら復た憂き時は、何時地ゆくらん、繫駒伏鼠は先聖既に之を悲めり、且く幽閑を守るも尙ほ是れ法塵分別の影像なり、意は晴れたる秋の空の如く清く、心は虛空に等しくして法界胸中に在るに似たるも、尙ほ是れ識蘊の邊際、擊竹の頓省、桃花の破惑、蓋し皆數知れざるの小悟を做し盡し、大難事の相續を克くして、最後に大悟一返の妙境に投入したるなる可し。

問はれても言はれぬ梅の香りかな、古來の禪匠が拂拳棒喝の手段、蓋し皆迷悟の分際を實地に驗察するの方便なり、然るに中古以來の所謂善知識、强ひて擬して師となる近今の所謂宗師家、未だ自ら迷悟の分際を知らず、狠りに拂拳を弄し、恣さに棒喝を行し、而して或は自ら頭痛に臥し、或は癪瘕に俯し、其甚だしきは肋肺を病みて氣息奄々たる者あり、夜もすがら雲衲を役して肩の凝りを打たせ、脚脛を揉ませ、按摩の講說に得々たる者あるに至つては、實に沙汰の限りとやいはん、惑病同體の說、既に這般の消息を傳へて、本論の究明せるが如し、是を彼れに參照せば思ひ半ばに過ぐる者あらん。

磊落不羈、之を稱して悟者の班に入れ、恬憺無爲、之を呼んで解脱の人に列す、一簞食一瓢飲、陋巷に處して自ら樂む所あり、耕雲釣月、隨處に吟誦して塵世を忘る、茶禪、俳禪、酒落禪、蓋し皆一種の禪と稱す、是等の習癖は皆唯だ蘊界の分際のみ、未だ以て悟覺の分上となす可からず、死地に臨みて泰然自若、危急に處して從容不亂、是れ果して悟覺の分上なるか、武將が戰頭に立ちて三軍を叱咤するや、豪膽沈毅、是れ平素鍛錬の功に由る、獰奸猛惡の兇漢が殺伐を遂行するや、剛膽不敵、是れ彼れの稟性に出づ、豪膽不敵、沈着剛毅、蓋し皆一種の定と稱す、是等の鍛錬、稟性、皆唯た蘊界の分際のみ、未だ以て悟覺の分上となす可からず。

如何なる豪膽も、事に臨むの一刹那に於て、必ず心悸亢進、胸臆のドキ〳〵と震動するを免かれず、是れ即ち惑障の起滅なり、而して漸く慣るゝに從ひ、鍛錬の功克く沈着に入る、稟性、習癖、亦必ず刹那の動念に於て之を免れず、風流雅客の絶美に接してアット云ふ時、獰奸猛惡が殺氣發動の刹那に於て、胸臆肚裡にムラ〳〵と湧き出づる一念、是れ即ち惑障の起滅なり、而して漸く慣るゝに從ひ、稟性克く犯を遂げ、習癖克く吟を爲す、蓋し是等の總てが動念の一刹那に於ける心悸亢進は、蘊界の分際に

在りて決して免れ得ざる所なり。

若し夫れ悟覺の分上ならば、磊落不羈、敢て關する所にあらず、洒落風流、亦敢て係はる所にあらず、但だ轉機の一刹那に於て、安詳として毫も胸臆の動搖なく、心體恰も明鏡止水の萬象を映ずるが如く、漢來れば漢現はれ、胡來れば胡現はれ、而して些の罣碍なきは、蓋し得たるものあるに庶幾からんか。

孔子曰く、心の欲する所に從つて矩を踰えずと、稍、轉機の靜妙を得たるが如きも、果して能く其實を得たりや、否、彼れが七十後の消息、尙ほ明かに之を知るに由なきを奈何せん、東西の賢哲、雲の如く叢り、古今の碩德、星の如く連る、而して其實際の落處、果して奈何ぞや、凡そ迷悟の分際を明かにするは、唯だ轉機の刹那に在り、其刹那の狀態に於て、苟も一念起滅の罣碍あらば、未だ解脱の眞境にあらず、腦脊和合の識體は、動靜常なく、陰顯期し難し、其本源全く空淨して餘りなきに至るにあらざれば、一切處、一切時、事に臨むの刹那に於て、一念起滅の惑障は到底免れ得べからず、和合識の流動は是れ一種の物質的自然の作用にして、意思の制裁も及ばざる所なり、世を捨てゝ身は無きものと思へども、雪のふる日は、寒くこそあれ、嗚呼寒くこそあれ、此

三、迷悟の分際

時此際の刹那、果して能く空淨ならば、正に是れ實證の解脫にてあらん、憂きことの猶ほ此上に積もれかし、限りある身の力ためさん、此時此際の消息、果して克く無望碍ならば、正に是れ眞證の境界にてあらん、迷悟の分際、驗し來れば洞然として明白なり、學者宜しく含元殿裡、長安に問取して始めて得てん。

禪學心性實驗錄了

禪學心性實驗錄の後に書す

學說といふ者あり、人及世界の現象を說明せむと擬す、之を是とする者多きときは輒ち眞理を以て自ら居る、之を非とする者漸く進みて、世復た其價値を稱する莫し。然れども事實は居然たり、學說の一榮一落、之を奈何とすることなし、山は自ら靑靑、水は自ら流る、學說に籍りて手を實行に着くるや、便あり、不便あり、宜あり、不宜あり、倘し克く最も便宜なる學說を拿へ來る、學說乃ち生命あり。斷惑轉迷は人生の一大實行、禪の修練工夫や蓋しその尤も直截なる者、而して手を着くるの處亦實

に多端。故坦山老師、特に生理上の一學說に託して、或は當代の學徒に便宜なる一端的を示す、腦脊異性、惑病同體、之を學說として一是一非する、洵に人間の閑事業たるを妨げず、若し夫れ脚下を遺却するあるか、百世の下亦尙痛棒在り、曰、拙僧即刻臨終敢報。

明治丁未春二月

後學　建部遯吾僭識

跋

予が畏友として、予の禪學に於ける師導たる荒木磯天和尙は、曩に仙術の著ありて大いに吾人の修養を援けたり、今復た本著の擧あり、豈和尙の親切を欣ばざらんや、然り而して其腦脊異性及惑病同體の論趣の如きは、今俄に吾人の肯否を斷言するに由なしと雖も、是れ亦一種の學解として後來の精究に資する所なくんば非ず、矧んや名にし負ふ故原坦山禪師の實驗談としての本論、其講述としての本書なるに於てをや、吾人は我醫門の實詣に於て他時異日之れが愼重の批判を試むるの機あらんを待つ、方今禪學の勃興を見るの時に際し、從來の盲修暗證の弊患を打破して實質の開導を主とせらるゝに至つては、實に滿腔の赤誠を捧げて感謝の意を表さざるを得ず、予の今日は專ら自家の本務

に盡瘁して未だ全く斯學の蘊奥に參する能はずと雖も、忙中亦必ずしも閑日月なきにあらざるなり、古哲曰く閑時辨得して忙時に用ふることを得んと、予は之を忙時に修得して却て之を閑時に辨應せんことを期せずんばあらず、嗚呼、世の唯だ齷齪として麵の爲め、將た黄白の爲めにのみ蠢動しつゝある者、聊か試みに斯學に參する所ありて可ならずや、

丁未孟春　　陸軍一等軍醫　橋本傳太郎

明治四十年二月十八日印刷
明治四十年二月廿二日發行

（定價金四十錢）

編輯者　荒木礒天
發行者　山中孝之助　東京市京橋區築地二丁目卅番地
印刷者　河本穩之助　東京市京橋區築地二丁目廿番地
印刷所　株式會社國光社　東京市京橋區築地二丁目廿二番地
發行發賣所　上宮教會出版部非列堂　山中孝之助　東京市京橋區築地二丁目卅番地
關西賣捌所　合資會社積文社　大阪市東區南本町四丁目

不許複製

文學博士 村上專精先生序
加藤咄堂先生著

○增補 死生觀

全一冊 定價金四十錢 郵稅金八錢

死生は人生の一大事實にして千古未解の問題たり本書は古來哲人の精到なる思索と英知叡傑が決死の覺悟とに照し學説と事實との兩方よりこの問題を解決したるものにして議論穩健文章明晰大數に江湖の喝采を博し茲に第十五版を發行するに當り更に死生觀話數十題を加へ其道を補ひ本問題を論明せんとす乞ふ本を購ふて此千古未解の問題を決せよ。

文學博士 前田慧雲先生序
文學博士 南條文雄先生跋
加藤咄堂先生著

○運命觀

全一冊 定價金五錢 郵稅金六錢

人は運命の兒なり榮枯盛衰皆其爲めに左右せらる抑運命とは何ぞや本書は著者が精新なる論を以て蒼運命觀を擊破し世界各民族の運命に關する思想を擧げ更に深遠なる哲學科學の眞理により新運命觀を建設して個人國家社會の運命を論じ終りに人生の眞趣を解してこれが開拓策を說き此運命と奮鬪して成功の位地に達せるの實例を示すが讀め浮世の波に漂へる士來れ開運の鍵を得んとするの秘訣なり本書は成功の守符なり。

文學博士 井上圓了先生序
加藤咄堂先生著 島地默雷先生跋

○女性觀

全一冊 定價金五錢 郵稅金六錢

美神の權化として崇拜すべき婦人の化身として獻忌すべき本書は流麗の文と稀得の觀察とを以て女性觀の變遷歷史上の活動を叙し貴賓原等の奇習異俗より名媛才女が佳話並に闇黑面の女性及び婚姻居職榮等の問題を究めて社會上の地位を明にし更に婦人の心理的現象を示し奪を女性の教育婚姻の美成に關する神か覺か請ふ一讀を吞む勿れ。

文學博士 前田慧雲先生著

○修養と研究

全一冊 定價金五拾錢 郵稅金八錢

博覽廣識教練を帝國大學に執りて學を聞き徹を穿ち運厚篤實感化を東都の青年に垂れて一世の模範となれるは前田先生なり本書は先生が多年の研鑽になれる佛教教理上の大論文と修養に關する深厚なる談話とを筆錄したるものなれば一度本書を繙かんか親しく先生に接して指導を受くるの感あるべし。

文學博士 前田慧雲先生著

○蓮如上人

全一冊 定價金卅八錢 郵稅金六錢

佛教界に、最も多くの特色異彩を放ちつゝある、純他力教眞宗の大成者たる蓮如上人に就く、前田博士が、該博の學識と、世界の史眼とを以て、上人の時代、性格、教義、信仰、事業、感化等のあらゆる方面に涉り、微に入り、細を穿ちて、評傳せられたるものにして、上人の眞面目は、歷々として讀者の眼前に活躍し、純他力教の眞髓は、一讀の上に了解せらるべし。

久米邦武先生著

○上宮太子實錄

全一冊 洋裝美本 定價金七十五錢 郵稅金八錢

本書は爲眼遠識を以て史界獨步の稱ある前大學教授久米邦武先生が該博なる考證と奇拔なる見解とを以て、日本文明の開拓者たる聖德太子の實傳を詳叙し、荒唐不稽なる從來の傳說を破し前人未發新見地を以て其眞面目を發揮し、太子を中心として政治、宗教、文學、美術の各方面に亘りて日本文明の淵源を尋れ其の特色を說きて剔出し所なく、論は東西に及び、議は古今を悉くす、眞に敎國の氣運を說きて多くの珍書たり。敎國の氣運は今や熟して人は皆なこれを知らざるの珍書たり。敎國の氣運は今や熟して人は皆なこれを知らざるの珍書たり。我が文明の眞相を知らしむことを思ふ。本書の出る豈に偶然ならむや。

加藤咄堂先生著

○通俗講話 佛教要義

全一冊 ●總クロース美本 ●紙數六百ページ 正價金一圓卅五錢 郵稅金拾錢

本書は著者が年の研究を傾け盡くして、捨瀚なる佛教の要を摘み萃を拔き、序論殿然たる一大組織とし、高遠なる教理を示すに平易明快の筆を以てし、何人にも知り易く讀み易き講話體に說述し先づ佛教以前の印度哲學より釋迦牟尼の傳記に入り大小乘の區別唯識學說を說き、教理を示しては佛教の宇宙觀に進み宇宙は如何にして成立せしや、又宇宙は如何なるものなるや、其現象は如何、其本體は如何と、靈魂有無、輪廻轉生等を明し、其の死の權原生前死後の狀態、靈魂の有無、輪廻轉生等を明し、其の道德を說いては性の善惡並びに善惡の根準を論じ十善十惡、苦樂因果の原理を示し更に煩惱の源底を盡くして地獄極樂の說に及び身心所現の順序を示し、禪密紹律を精紹し、深く三界唯一心の妙理に入り分流を究めて玄旨の關係より、禪心の狀態を說き、靈妙なる宇宙と靈妙なる心識との一致の妙理を述べて筆舌の及ばざる佛教の幽微高妙なる境を窺はしめ、苦を離れて樂を得、迷を轉じて悟を開く佛教の要義は煩惱を說くに至りては各宗派の歷史を說くに至りては各宗派の特色を示し、更らに佛教發達の一貫の理を論じたる空前の好著なり。敎理を解げ、終りに其一貫の理を論じたる空前の好著なり。佛教の妙趣を味はれむことを。一本を購ふて佛教の妙趣を味はれむことを。

理學士 石川成章先生著

○宇宙の默示

全一冊 定價金七拾錢 郵稅金八錢

石川先生は我が國有數の科學者たると共に又熱烈なる宗教信者たり、宗教眼を以て自然を觀察し、科學眼を以て宗教を評論す、天に因く星辰も、地を彩る山川も皆な之れ自然の妙音たり、宇宙の默示たるならずや、先生流麗の筆を以て之れを寫し、時に人生の情熱を論じ、自然の光輝を說明し、時に水火の作用を說ひて人心の煩悶を寫し、時に自然美を示し、時に地球の生命を論ずる所何人か感妙に渙仰し、其秘密に隨喜せざらむ、苟くも宇宙人生に興を抱くの徒、希くは本書の妙音によつて大悟する所あれ。

新佛教徒同志會編纂

○來世之有無

全一冊 定價金二十錢 郵稅金四錢

現代の名士一百餘家が來世の有無につきて回答せられたるものにして實に之れ空前の盛事たり

「加藤弘之、佐治實然、志賀重昂、井上哲二郎、木下廣次、中田薰、井上圓了、島田三郎、南條文雄、村上專精、谷本富、三島中洲、三輪田眞佐子、湯本武比古、巴水女人、海老名彈正、平井金三、中島力造の諸若外九十餘大家一堂、前田慧雲、渡邊海旭、姉崎嘲風、井上圓了、島田三郎、南條文雄、村上專精、谷本富、三島中洲、三輪田眞佐子、湯本武比古、巴水女人、海老名彈正、平井金三、中島力造の諸若外九十餘大家一堂、

新公論社編 ○附錄學生消夏法

○男女學生氣質

全二冊 定價金卅錢 郵稅金二錢

該書は坪內雄藏、棚橋絢子、中田薰伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山脇ふさ子、鳩山春子、南條文雄、小杉天外、山縣悌三郎、前田慧雲、山路愛山、本田庸一、井上圓了、島田三郎、松村介石、中川嘉次郎、南岩倉具威、棚橋一郎、寺田勇吉、石黑忠篤、河東純一、坂本金藏、加納久宜、古川流泉、田中治六、加藤咄堂、境野黃洋、中島德藏、下田次郎等の大家が、現代男女學生の長短所方法を示されたるものなり。その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

黑岩周六先生講演

○人生問題

全一冊 定價五十五錢 郵稅八錢

人生とは何ぞや、是れ千古の疑問なり、哲人之を說き、碩學之を論じて、而して愚疑の人意々多からしむとす、然るに現代思想界の泰斗、黑岩先生、苦悶の人生問題に渙著して、自ら人生問題に渙著して、茲に此書あり、叙る所、頗る源泉を探り、大に其眞相を得て、人生の熱觀樂觀に終る、眞に天籟の妙音なり、世の有無に始まり、人生の終に來つて此聲音に接せよ、虛識くは人、疑ある人、迷ある人、平穩と滿足と活力とを得て、徒く且つ先ある人生に關着することを得ん。

醉庵　鈴木券太郎先生著

○犯罪論及女性犯人

●菊判全一冊總クロス美本●紙數五百五十ページ　定價金一圓五十錢　郵稅金拾五錢

犯罪とは何物か犯人とは何者か女性とは何物か女性犯人とは何物か、本書は此等問題に答へんが爲めに犯罪生理學、犯罪心理學、犯罪社會學の見地に據り罪罰の根本哲學を開立し世の法曹家の犯罪及犯人定義に一大動搖を與へ女性犯人に就ては其解剖的及生理的特狀を詳說し其人相、毛髮、乳房、生殖器、音聲、筆跡、言葉、色慾、文身の如き亦之を遺傳の法に商量し或は模型の理に依據し先天犯者熟情犯者其他の分類下に於ては各氏特質を列擧し我國殺近の犯罪事件を具體的に參考し以て理實配合の巧みを究て造化の微を開き人情の細に入り女性の秘密を暴露し其罪惡を檢案する處觀察犀利思索超凡洵に之れ科學の精華文學の上乘たり而して考證は則廣く百家に出入し論斷は則浮薄を避け一言一句悉く根底あり、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、理論深遠風神崇高の一大文章此書を指して現世紀の一大產物、思想界の一大革命と云はずんば將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也。

前東京高等師範學校教授　小山左文二先生著

○日本文法の解說及び練習

全一冊　三百八十ページ餘　定價六十錢　郵稅十錢

大學豫科、男女兩高等師範學校、各種高等專門學校入學受驗者、並に文部省教員檢定受驗者參考書として、中學校、師範學校、高等女學校の學生及び小學校教員檢定受驗者の參考書として、著者苦心の作に係る。解說周到にして明快、敍するところの練習問題實に一千五百餘。添ふるに明治三十年以降本年まで八年間に於ける各種高等學校入學試驗文法及び明治十八年以降本年まで二十年間に於ける文部省教員檢定試驗文法問題の全部を以つてし、一々適切にこれを解說指導せり

文學博士　南條文雄先生著

○修養錄

定價金四十錢　郵稅金六錢

溫厚篤實、而も道心堅固の聞えある、南條博士の實驗的修養を詳細に記載したる者は本書なり。章を分つこと六、節を分つこと二十、著者得意の趣味ある談柄は細大漏さず擧げて本書の中にあり。人生問題の解決に憫める者、若くは樂しき生活を送らんと欲する者は速に來て本書を讀み給へ。本書は蓋し煩悶者の慰藉劑なり、求道者の好資料なり。

渡邊國武先生序　加藤咄堂先生著

○心的生活英雄史

全一冊　定價金五十錢　郵稅金八錢

本書は古今の英雄を拉し來りて時代の推移と思想の變遷とを觀察し、波瀾あり抑揚ある彼が行動の裏面には煩悶あり慰安ある心的生活の存するを說破したるものにして、其名は英雄史たりといへども、實は是れ武士道發達史たり、思想變遷史たり。英雄傳たり。歷史傳たり。趣味に富むことは小說に優り教訓を含むことは倫理書に過ぎたり。

アーサー、ロイド先生序
忽滑谷快天先生著

○怪傑マホメット

全一冊　挿畫　定價金五十錢　郵稅金八錢

序論にはアラビヤの奇風異俗腹經倒すべき者詩趣津々たる者枚擧に遑あらず本論には宗教家としてのマホメットが迫害侮辱の中に隱忍默耐する預言者的高風を叙し更に將軍として鎬が千里の馬に跨り屍山血海を蹈破する雄姿を描き進んで鳴が政治家としての怪腕を揮ひ最後に鎬が人として起居動靜の跡より閨門の秘事に至る迄悉く詳記して餘す所なし。赤條々たる眞面目を現はす我國空前の大著なり。

ペークマン先生原著
杉村縱橫先生補譯

○改訂增補強肺術

全一冊　定價金四十錢　郵稅金四錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め、此書に六の特色あり

第一、時間を要せざること。　第二、費用を要せざること。
第三、場所を要せざること。　第四、勞力を要せざること。
第五、自文一致なること。　第六、總ふり假名付なること。

故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し、容易に實行し、而して確實に其功を收め得べし。

加藤咄堂先生著

○演說文章應用修辭學

全二冊　定價金七拾五錢　郵稅金拾錢

文名嘖々江湖に知られたる加藤咄堂先生は又我が國風宿の雄辯家なり、本書は先生が多年の經驗と修辭の原則により、演說并に作文に關する原理を說述して其應用を示し、言語の組立、音聲の抑揚、文章組織、推敲の工夫に至るまで叮嚀反覆に之れを說明し、古今東西の文話并に演說家の經驗談を加へ、實益に兼ねるに趣味を以てしたる近來稀に見るの好修辭學なり。

曹洞宗管長　森田悟由禪師序
加藤咄堂、峯玄光兩先生共著

○禪觀錄

全一冊　定價金三十錢　郵稅金四錢

禪とは何ぞや曰く言ひ難し本書は言ひ難きの禪を說き盡して餘蘊なく更に發して武士道の根底となり凝つて文學技藝の精華となれる事實を描寫し逸話あり滑稽あり神祕微妙一讀卷を擱く能はざらしむ。

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天先生著

○禪學講話

全一冊　定價金四十錢　郵稅金六錢

適切簡明以て精神の修養に資する者は禪也。古往今來、偉人哲士の眞骨頭を鍛練したるものは禪也。痛快明以て人生の眞意義を示し、處世の妙諦を說く者は禪也。本書人生の謎以下各章、明快の說、有趣の筆、禪の眞髓を發揮して餘蘊なし。

曹洞大學講師　忽滑谷快天先生著

○禪の妙味

全一冊　定價金四十錢　郵稅金六錢

上篇は精神淨靜の妙味を論じ苦樂昇沈の中に處する實學の工夫を示し百年の煩惱を一掃すべく下篇は觀性の妙味を說き唯心觀あり萬有一體觀死生透脫觀に及び千古の惑を破るべし眞に禪學者の眞師たり

文學博士南條文雄先生著

○感想錄

全一冊　定價金四十錢　郵稅金六錢

本書は博士平生の感想になるものにして或は古人の訓誡を示して後進を誘掖し或は博士自身の體驗より偉人才媛の逸話あり時に信仰に因て敎を垂れ時に武道を語り時に信仰を說じ加ふるに修養の則を以てす實に之れ精神修養の好指針品性陶冶の眞實料たり。

井渕堂發賣書目

文學博士松本文三郎先生著

○宗教と哲學　全一冊　定價金四十五錢　郵稅金八錢

本書全篇十有餘章まづ筆を宗教と哲學との根本問題に起し宗教道德研究と信仰等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據にある事を闡明す蓋し病弱なる現代思想界は此書に因りて始めて元氣の回復を求め得むなり

文學博士　三宅雄二郎先生著

○小泡十種　全一冊　定價金四十五錢　郵稅金六錢

流れて捲沫盡きざる大河となり、散じて纖粉限りなき飛沫となる、小泡が激瀾が蓋し近代稀有の快著なり。

獨乙哲學博士ポール、ケーラス先生著　鈴木大拙居士譯

○阿彌陀佛　全一冊　定價金卅五錢　郵稅金四錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケーラス博士その影響を採ひ殆ど小說的結構を以て通俗にこれが解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評喧々たることや弊堂頃者十年博士と面を同じうし最も博士と親密なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり豈啻佛の有無に惑ひ心の不安に悩ふる人のみこれを讀むべしと言はむや

文學博士　村上專精先生著

○自信錄　全一冊　定價金五十錢　郵稅金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明に「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の奥旨に及びて之を結ぶ五章廿七節既いて至らざるなく盡くして盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解此の書によつて聽よべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士　南條文雄師著

○人道　全一冊　定價金二十錢　郵稅金四錢

原坦山禪師著
荒木磯天講述

○禪學心性實驗錄　全一冊　定價金[illegible]錢　郵稅金六錢

加藤咄堂先生著

○修道講話　全一冊　定價金四十錢　郵稅金六錢

「毎日新聞」記者　島田三郎先生著

○我觀人生　全一冊　近刊

文學博士　根本通明先生著

○易學新說　全一冊　近刊

824
24'

019598-000-8

324-24

禅学心性実験録

原担山／著

M40. 2

ABG-0372